

社 会 科 教 室

第 159 号

平成 25 年度

香川県小学校教育研究会社会科部会
香川県小学校社会科教育研究会

いよいよ全国大会が

この冊子が会員の皆様に配布される頃は4月末ぐらいかと思います。25年度も数多くの成果が得られた1年だったと思います。そのいくつかを紹介させていただき25年度を振り返りたいと思います。

まずは、定例研や夏季研修会等においての若手の先生方の活躍があげられます。春の総会・懇親会において、若い先生方の活躍とそれを支えるベテランの先生方の支援をお願いいたしました。それぞれの研修会において、若手の先生方が自信をもって実践を発表する姿がみられました。また、自ら実践の範を示してくださるベテランの先生方もいました。また、研究フォーラムにおいても郡市の協力体制をしっかりと組みながらの確かな実践発表がありました。「研究実践の充実と世代交代」が着々と進められていると感じました。

2つめは、夏季研修会の充実があげられます。担当郡市である丸亀社研を復帰した仲善社研が協力し、会場設営や研究討議の充実を図ることができました。当日ご指導いただきました文部科学省教科調査官澤井陽介先生より研修会内容・進め方共にレベルの高いものであったとお褒めいただきました。

3つめは、全小社研で二つの香社研の取り組みを発表できたことです。東京大会では、高松 浅野小 葛西秀樹先生が「情報化した社会と私たちの生活 情報ネットワーク」の実践を、福岡大会では、観音寺南小 出濱大資先生が「新しい日本、平和な日本へ」の実践を発表してくれました。全国からの参会の先生方に香川の確かな研究実践と研究内容の深さを紹介できたと思います。

4つめは、2月15日に開催しました研究フォーラムカップ2014です。昨年度に引き続き、研究の更なる一般化と専門性を高めるという視点でカップ方式導入し開催しました。講師の帝京大学中田正弘先生が研修会当日、希に見る大雪と列車事故のため列車到着が遅れ、急遽、評価方式を切り替え、投票の多い支部にゴールドカップを、次点の支部にシルバーカップを渡すことにしました。どの郡市も昨年度の経験を活かして、実践してみたいと感じさせられる、分かりやすく魅力のある発表ができていました。結果、ゴールドカップは高松北に、シルバーカップは同票だった高松南、坂綾、三観の3支部に渡しました。後半は、大嶋和彦研究部長による28年度開催の大会研究主題テーマについての説明があり、これまでの研究の成果を踏まえた先見性のある大会テーマの設定ができたと思っています。指導講話をいただいた中田先生からは、香社研の研究実践をご理解された上での参加型の講話をしていただき今後の研究推進に大きな励みとなりました。

5つめは、28年度に開催する全国大会の研究発表会場校が正式に決まったことです。12月の香社研理事会において会場校が高松市立十河小学校、観音寺市立観音寺小学校（26年度に開校）に決まりました。2月の研究フォーラムで提案された研究テーマを受けて、それぞれの学校で研究推進の準備ができました。会員の皆さんの大きな協力を得て着実な研究実践を積み重ねていきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

終わりにになりましたが。本研究会に対しまして、深いご理解とご支援・ご指導をいただきました各教育委員会の先生方、並びに香社研の諸先輩に厚くお礼を申し上げます。

平成26年3月

香川県小学校教育研究会社会科部会

香川県小学校社会科研究会

(部) 会長 徳田 仁司

平成25年度事業報告

① 定例研究集会, 夏季研修会

【定例研究集会】

○ 6月定例会 (高松)

- ・ 月 日 6月22日(土) 9:30~11:40
- ・ 場 所 高松市ふれあい福祉センター勝賀
- ・ テーマ 子どもの自信を深める授業をつくる
～板書計画と子どもの反応の実証による～
- ・ 提案者 瀧 義幸 先生(高・一宮小) 大奥 洋介 先生(高・鬼無小)
第3学年 「校区から高松市のようすへ」
- ・ 司会者 増田 泰己 先生(高・木太小) 真鍋 長嗣 先生(高・栗林小)
- ・ 指導者 池田 茂樹 先生(東部教育事務所主任指導主事)
高橋 英式 先生(香社研OB)

○ 7月定例会 (小豆・さ東)

- ・ 月 日 7月6日(土) 9:30~11:40
- ・ 場 所 高松市銀星旅館
- ・ テーマ 基礎基本を習得し、思考力を育てる社会科指導の在り方【小豆】
思考力の育成をめざした学習プランの開発【さ東】
～教科書・副読本の活用による社会科授業の日常化～
- ・ 提案者 高木浩彰先生(小豆島町立苗羽小学校) 松田章子先生(さぬき市立志度小学校)
【小豆】第4学年「きょう土をひらく ～坂本養川と太田典徳～」
【さ東】第4学年「住みよい暮らしをつくる」
- ・ 司会者 平林泰徳先生(土庄町立湊崎小学校)
- ・ 指導者 永坂邦彦先生(さぬき市教育委員会学校教育課主任指導主事)
三井重彰先生(香社研OB)

○ 9月定例会 (坂出・綾歌)

- ・ 月 日 9月28日(土) 9:30~11:40
- ・ 場 所 坂出市勤労福祉センター
- ・ テーマ 分かる喜びを実感できる社会科学習の展開
～体験的な学習・問題解決的な学習の充実を通して～
- ・ 提案者 橋本 美穂先生(綾・宇多津北小)
第5年 「米づくりのさかんな庄内平野」
- ・ 司会者 河野 富男先生(坂・瀬居小)
- ・ 指導者 山内 秀則先生(香川県教育委員会事務局義務教育課主任指導主事)
唐木 裕志先生(香社研OB)

○ 10月定例会 (三観)

- ・ 月 日 10月19日(土) 9:30~11:50
- ・ 場 所 マリンウェーブ
- ・ テーマ 個が育ち、生きる社会科学習の創造
～考える力を育てる社会科学習をめざして～
- ・ 提案者 合田 雅気先生(観・一ノ谷小)
第3学年「市の様子」
- ・ 司会者 出演 大資先生(観・観音寺南小)
- ・ 指導者 小西 寛先生(観音寺市教育委員会学校教育課主任指導主事)
岡根 淳二先生(香社研OB)

○ 11月定例会 (高松)

- ・ 月 日 11月9日(土) 9:30~11:40
- ・ 場 所 高松市ふれあい福祉センター勝賀
- ・ テーマ 子どもが自信を深める授業をつくる
～板書計画と子どもの反応の実証による～
- ・ 提案者 水口 純先生(高・浅野小) 黒川 浩一先生(高・香南小)
第4学年 「きょう土を開く」
- ・ 司会者 福家 正人先生(高・国北小)
- ・ 指導者 小柳 良二先生(高松市教育委員会学校教育課指導主事)
植松 勝先生(香社研OB)

【夏季研修会】

- ・ 月 日 平成25年7月26日（金）
- ・ 場 所 丸亀市民会館
- ・ 内 容 提案発表，丸亀社研実践発表，各郡市社研のワークショップ型実践発表
- ・ 提案者 本部提案 : 大嶋 和彦（香川大学教育学部附属高松小学校）
丸亀社研 : 和田 早苗（丸亀市立郡家小学校）

分科会Ⅰ：三豊・観音寺社研実践発表

分科会	单元名	授業提案者	指導・助言者
第3学年	のこしたいもの，つたえたいもの	丸亀市城乾小学校 小野 咲絵	観音寺市教育委員会 学校教育課 主任指導主事 小西 寛
第4学年	わたしたちの県	丸亀市立城西小学校 平田 晃司	香川県教育委員会 東部教育事務所 主任指導主事 池田 茂樹
第5学年	自然災害を防ぐ	丸亀市立垂水小学校 寒川 英樹	まんのう町教育委員会 学校教育課 主任指導主事 佐柳 仁
	わたしたちの生活と食料生産	琴平町立榎井小学校 三谷 恵	
第6学年	わたしたちの願いを実現する政治	丸亀市立飯山北小学校 櫻井道芳	香川県教育委員会 西部教育事務所 主任指導主事 越智 紳一郎

分科会Ⅱ：各郡市社研のワークショップ型実践発表

学年分科会	单元名	提案者	指導・助言者
3年	学校のまわり	さぬき市立志度小学校 藤澤 大地	香川大学教育学部 伊藤 裕康
	校区から高松市のようすへ	高松市立植田小学校 藤沢 香居	香川県教育委員会 義務教育課 主任指導主事 山内 秀則
	校区から高松市のようすへ	高松市立大野小学校 花房 祐史	観音寺教育委員会 学校教育課 主任指導主事 小西 寛
5年	水産業の盛んな静岡県	坂出市立林田小学校 上村 勇介	まんのう町教育委員会 学校教育課 主任指導主事 佐柳 仁
6年	天皇中心の国づくり	土庄町立土庄小学校 鶴羽 美緒	香川県教育委員会 東部教育事務所 主任指導主事 池田 茂樹
	武士の世の中へ 源氏と平氏が戦う	三豊市立仁尾小学校 片山 大輔	さぬき市教育委員会 学校教育課 主任指導主事 永坂 邦彦

- ・ 講師 文部科学省 初等中等教育局教育課程課 教科調査官
国立教育政策研究所 教育課程研究センター 教育課程調査官 澤井 陽介 先生
「社会的な見方や考え方と社会科の授業づくり」

平成25年度 香社研フィールドワーク 活動報告

平成25年度のフィールドワークも、昨年度までと同様に、香社研だけのオリジナルツアーを企画しました。1泊2日でバスを貸し切り、教科書の事例地である兵庫県陶の里で陶芸体験、改築工事中になっている世界遺産の姫路城の見学、2012年に公開された映画で話題となった竹田城の見学といった魅力ある見学地を訪れました。今年度のフィールドワークの概要を以下に報告致します。

- 1 目的：① 教科書に掲載されている地域を巡り、教材研究を深める。
② 教科、世代、男女を問わず参加していただき、香社研の輪を広げていくとともに、教員同士の親睦を深める。
- 2 日程： 平成25年8月24日（土）25日（日）
- 3 参加人数： 23名

行 程	
8月24日（土）	
坂出＝＝＝高松＝＝＝[淡路 SA]＝＝＝＝＝ものづくり講演＝＝＝＝＝	
6:20 7:20 9:00 9:15 10:45（講演・昼食）	13:00
＝東大阪中小企業見学＝＝＝堺市役所展望台＝＝＝ホテル＝＝懇親会＝＝解散…	
13:30（選択） 15:00 16:15 17:15 18:00 19:00 21:00	
8月25日（日）	
ホテル＝＝＝＝＝丹波 陶の郷＝＝＝（バス内で昼食）＝＝＝竹田城見学＝＝＝	
8:00 9:00（湯飲み製作体験）	11:30 12:45 14:00
＝姫路城見学＝＝＝＝＝高松＝＝＝＝＝坂出	
15:00 17:00 19:30 20:00 頃	

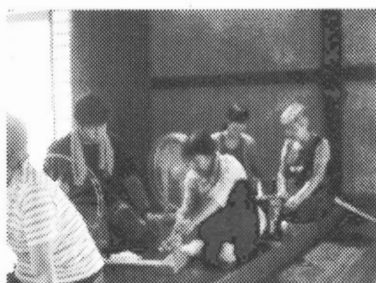
- 4 交通手段： 貸し切りバス
- 5 各スポット
 - (1) 8月24日（土）

ものづくり講演（東大阪市）



多種多様な業種・業態の企業が密に集積していることで、近隣の協力工場との『横請け』のネットワークが発達しており、部品の調達や加工を地域内の工場に依頼するなど、『地の利』を活かした『ものづくり』についてご講演をいただきました。

中小企業見学・体験（東大阪市）



グリコのおもちゃデザイナーとして活躍した宮本順三が蒐集した民族文化コレクションに迎えられてのおもちゃづくりか、綿の栽培、綿の実の収穫、加工等を多くの人と一緒にしている工房での機織り体験。お好みの方を選んで見学、体験しました。

(2) 8月25日(日)

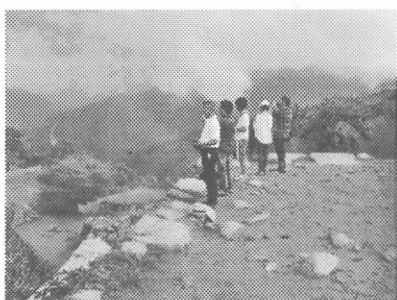
丹波・陶の郷 湯飲み製作体験(兵庫県篠山市)



教科書3・4年下にも登場する丹波立杭の陶の郷。そこで、陶芸体験をしました。湯飲みだけでなく、それぞれのオリジナリティー満載のお皿、茶碗、箸置きが形となって現れました

作品の焼成は丹波焼の窯元で行っていただき、後日、作品が手元に届きました。

竹田城見学(兵庫県朝来市)



山城遺跡として全国でもまれな完存する遺構である竹田城。「天空の城」・「日本のマチュピチュ」とも呼ばれ、ちょうどよい散策となりました。城郭部分に着く前後で、霧や雲に包まれた姿や竹田城から見下ろす風景を見ることができました。天空に浮かぶ城を思わせる一瞬に感動しました。

姫路城見学(兵庫県姫路市)



世界遺産であり、日本を代表する城の一つといっても過言ではない姫路城。今回の日程と重なって、今年は大天守保存修理という滅多にない機会に訪れることができました。修理をしている現場を眼前にすることができ、その豪華な造りの中に、この建築に関わる人々の緻密なこだわりを多く見ることができました。

6 旅を終えて

今回も社会科だけでなく、他教科の先生方も含めて、楽しく教材研究が深められました。その中でも本年度、もっとも嬉しかったことは、「1日だけでもいいから参加したい!」という先生がいらっしゃったことです。

そのような強い思いに支えられ、5回目のフィールドワークを無事終えることができました。道中には、運営委員による見学地紹介のプレゼンがあり、参加者からの一言があり、それぞれ独自のパフォーマンスで車内を盛り上げてくれました。

次年度も、その時間、その場所にしかない経験ができるように企画したいと思います。



基礎・テスト編集委員会

1 本年度の課題と年間計画

(1) 本年度の成果

基礎・テストの作成と修正を同時進行で行うシステムづくりが整った。

基礎の表紙絵を全県の児童に募集し、社会科への興味関心を高めることができた。

(2) 活動報告

今年度、年6回（前期版・後期版）の編集会議。

年	平成25年										平成26年		
月	4	5	6	7	8	9	10	11	12		1	2	3
作成 予定	① H26 前期版作成	②	③			④ H26 後期版作成	⑤	⑥					
			H25 後期版修正・完成						H26 前期版修正・完成				

【年間の活動】

	回	日 時	内 容	備 考
26年度 前期版 作成	①	5 / 11 (土) 12:30 ~ 14:30	担当決め H25 後期版修正	
	②	6 / 22 (土) 13:30 ~ 16:30	協議・作成	
	③	7 / 6 (土) 13:30 ~ 16:30	最終の話し合い	■ 会議の部屋とは別の部屋に、昼食を用意。 ■ 来られた方から食事案内。 ■ 12:00頃から昼食用意
	提出	7 / 16 (火) 7 / 23 (火)	世話役必着 事務局黒田必着	
26年度 後期版 作成	④	9 / 28 (土) 13:30 ~ 15:30	担当決め H26 前期版修正	
	⑤	10 / 19 (土) 13:30 ~ 16:30	協議・作成	
	⑥	11 / 9 (土) 13:30 ~ 16:30	最終の話し合い	■ 会議の部屋とは別の部屋に、昼食を用意。 ■ 来られた方から食事案内 ■ 12:00頃から昼食用意
	提出	11 / 19 (火) 12 / 3 (火)	世話役必着 事務局黒田必着	

編集作業では、次のように役割を分担し、編集作業を行った。

指導・編集責任者(教頭先生)、世話役(司会、原稿取りまとめ、添削等1名)

編集者(基礎・テストの編集、原稿執筆)

【社会科の基礎表紙絵募集】

全県から78点の作品応募。基礎テスト編集委員による厳正なる抽選の上、選考。

最優秀作品及び優秀作品については、来年度の社会科の基礎の表紙、裏表紙に掲載。

【入選者への授与品】

最優秀 8名 賞状、副賞(地球儀)、カラーペン

優秀賞 18名 賞状、カラーペン

2 編集・執筆者一覧（敬称略）

指導者

- 全 体 …… 徳田仁司（高松市立国分寺北部小学校 校長）
第6学年 …… 高橋克佳（観音寺市立常磐小学校 教頭）
 合田吉宏（丸亀市立城乾小学校 教頭）
第5学年 …… 森昭二（善通寺市立西部小学校 教頭）
第4学年 …… 市原茂幹（高松市立植田小学校 教頭）
第3学年 …… 橋本義人（東かがわ市立大内小学校 教頭）
 佐藤孝治（坂出市立加茂小学校 教頭）

編集委員

◇ 総括

黒田拓志（香川大学教育学部附属高松小学校）

◇ 学年責任者

- 第6学年 …… 大嶋和彦（香川大学教育学部附属高松小学校）
第5学年 …… 渡部岳史（香川大学教育学部附属坂出高松小学校）
第4学年 …… 河田祥司（香川大学教育学部附属高松小学校）
第3学年 …… 藤本博文（香川大学教育学部附属坂出小学校）

◇ 執筆者

- 第6学年 泉宮広也（三豊市立上高瀬小学校） 岸上也寸志（三豊市立詫間小学校）
 大平晃司（観音寺市立大野原小学校） 中西昇（丸亀市立城北小学校）
 佐藤南（丸亀市立垂水小学校） 秋山侑大（丸亀市立城坤小学校）
 馬場直明（丸亀市立栗熊小学校）
- 第5学年 熊野真美（高松市立中央小学校） 石橋奈生子（高松市立栗林小学校）
 大奥洋介（高松市立鬼無小学校） 網野未来（高松市立香西小学校）
 香川卓也（善通寺市立東部小学校） 滝井康隆（多度津町立四箇小学校）
- 第4学年 瀬名宏樹（小豆島町立安田小学校） 高木浩彰（土庄町立苗羽小学校）
 葛西秀樹（高松市立浅野小学校） 平井小百合（三木町立氷上小学校）
 白川由美（高松市立多肥小学校） 森川美香（高松市立大野小学校）
 柏徹哉（高松市立川添小学校）
- 第3学年 山本香代子（坂出市立坂出小学校） 山本 泰司（坂出市立坂出小学校）
 香川和美（坂出市立松山小学校） 大佐古佳美（綾川町立羽床小学校）
 六車 浩（東かがわ市立誉水小学校） 久保田 直寛（さぬき市立志度小学校）
 田中由賀里（さぬき市立神前小学校）

さらによりよい社会科教育を展開できるように、社会科の問題作り等に挑戦された先生方に厚く御礼申し上げます。

研究主題

社会的な見方・考え表し方・在り方の学びを社会参画につなぐ学習 ～ 社会科授業づくりの基本を学び合う ～

香川大学教育学部附属高松小学校 大嶋 和彦

I 研究主題・サブテーマ設定の背景

1 研究主題設定の背景

5年前に行われた平成20年度の四国大会においては、内容研究に重点を置いて研究を行ってきた。その成果は、『「社会科ノート」による思考力の育成』として、研究図書にもまとめてきた。その後、平成21年度から平成23年度にかけては、「意欲」「思考力」「評価」といった学習方法を中心に取り組み、授業づくりの研究として成果を上げることができた。

しかし、新学習指導要領による教育研究が進められてきたが、そこにはいくつかの課題も挙げられており、その対応が急がれているところである。いくつか課題を挙げると、①言語活動や思考・表現の方法等の指導方法についての研究は進んできたが、内容を系統づけたカリキュラム(指導計画)の研究が十分でないこと、②子どもが意欲をもち、主体的に学ぶ学習に課題があること、③1時間の授業研究については深められてきているが、カリキュラム(指導計画)に基づく教科書を活用した日々の授業を新採・若年教員がスムーズに行うことが難しいこと、④子どもが意欲をもち、学ぶ喜びをもつ評価の研究が十分でないこと、⑤授業のまとめ・表現物により家庭・地域等へ発信し、社会参画へつなぐ授業をいかにつくるかなどである。

そこで、これら5つの課題を研究上の課題として解決すべく、研究主題「社会的な見方・考え表し方・在り方の学びを社会参画につなぐ学習」を設定した。

2 研究の方向性

小学校社会科の学習は、「※地域社会や我が国における人々の社会生活を広い視野からとらえ総合的に理解することを通して、公民的資質を養う」ことをねらいとしている。ここにいう、社会生活とは「※社会とのかかわりの中での人々の生活のことであり、地域の地理的環境や組織的な諸活動の様子などとともに、我が国の国土の地理的環境や産業と国民生活との関連、我が国の歴史的背景など」を含んでいる。(※は学習指導要領解説より)

文中「広い視野からとらえる」は、社会生活について多面的・多角的な社会的な見方を深めることであり、「公民的資質を養う」は、社会的な見方・考え表し方を深めることにとどまらず、社会人としての在り方を求めることである。これは、社会的な見方・考え表し方・在り方を互に関わり合わせ「社会参画」につないでいくことにより、養うことができるものと考えている。

なお、社会参画については、「持続可能な社会の実現を目指すなど、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培う」として、今回の指導要領改定でも重視されているところであり、今後の授業づくりの目指す方向として大切にしたい。ここまで述べてきたように、本主題のもとに展開される学習は、社会科の内容研究を充実させ、それを思考と表現の一体化による子どもたちの学びで深め、実社会・実生活へつながりを求める学習である。

3 サブテーマの変更について

(1) サブテーマ設定の背景

ここでは今年度変更したサブテーマについて説明する。今、全国的に社会科の大きな課題となっていることは、社会科授業が、1時間の授業として成立していない場合が多々見られることである。一部の社会科を専門とする教員による授業では、教科書教材を基本にしながらも地域教材の活用を図り、内容を再構成して、子どもが主体的に学ぶ工夫を取り入れながら授業づくりを行っているのに対して、

社会を専門としない教師が行う授業の中には、「教科書を読み内容をノートに書く学習」「教科書と教科書指導書により解説しながら板書する学習」「教科書と社会科の基礎による学習」など画一的で受け身的な学習が行われている場合が見られる。

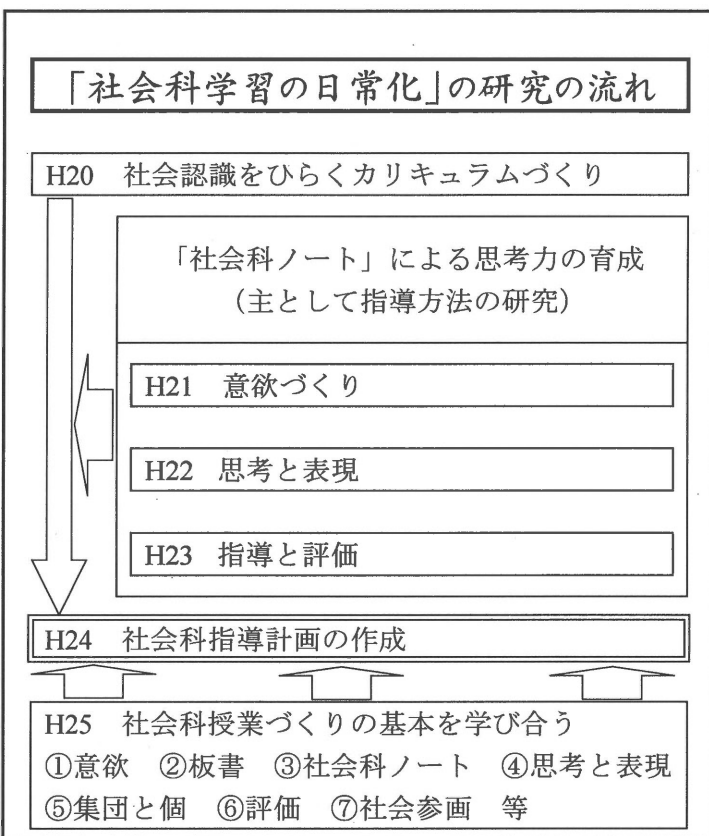
このような状況を改善したいという願いから、右の図のように「社会科授業の日常化」に向けた研究主題を設定し、現在まで研究を進めてきた経緯がある。平成 20 年度まで続けられてきた社会科ノートの活用、教科書の活用の研究を軸にした社会認識をひらくカリキュラム研究を継続しつつ、平成 21 年度は「意欲づくり」、平成 22 年度は「思考と表現」、平成 23 年度は「指導と評価」の研究とテーマに迫る視点を変え、主として指導方法について研究し改善に努めてきた。夏季研・定例研等の確かな実践により、単時間における学習の内容や指導方法は充実してきた。しかし、学校現場の社会科授業が改善されたかという点、まだ難しい状況にある。

そこで、平成 24 年度は文部科学省教科調査官・澤井陽介先生のご指導を受け、平成 20 年度までの研究を生かして、すべての担任が連続的につながりのある社会科授業が展開できるよう「社会認識をひらく指導計画（単元計画）」を作成することにした。香川県下の各学校のカリキュラムの基軸になる「地域版のカリキュラム・指導計画」をつくり、それに自校の特色ある地域教材を取り入れ、授業の日常化に生かしてもらおうと取り組み、その一部を冊子にまとめることができた。すべての学級担任が取り組む社会科であるからこそ、伝統として研究を行ってきた「社会科の本質を求める授業」を目指していきたいと考える。そのために、今まで研究してきた「意欲づくり」「思考と表現」「指導と評価」といった視点を基盤にして、教科書や社会科ノートの活用を生かすことが大切である。そして社会認識をひらく教材については、教科書教材と地域教材を主とし、ネタ的なその場限りの教材は避け、子ども自らが本質を求めていけるような授業づくりを目指す方向で研究を進めていきたい。

(2) 「授業づくりの基本を学び合う」方策

平成 28 年度の全国大会に向け、今年度中に全国大会の研究主題を設定する計画である。そこで、平成 25 年度は、今までの成果を踏まえ「授業づくりの基本」を指導計画づくりの過程で学び合うことにより、指導計画を充実するとともに、課題についても明らかにしていきたい。

具体的には、下に挙げる 7 つの視点から研究を進めつつ、指導計画の中での「内容・教材の構造」「単元観」「単元構成」「学習の構造」「本時の学習指導」のどこに課題が存在するかを検討し、修正を行いたい。(PDCA サイクル)



研究課題① 内容・教材の構造
研究課題② 単元観 等
研究課題③ 単元構成
研究課題④ 学習の構造
研究課題⑤ 本時の学習指導

検討

修正

- ① 「主体的で意欲をもつ学習」の研究
- ② 「板書計画に基づく授業づくり」の研究
- ③ 「社会科ノートづくり」の研究
- ④ 「思考と表現を深める」研究
- ⑤ 「集団と個の関わり」の研究
- ⑥ 「学習の評価」の研究
- ⑦ 「社会参画につなぐ」研究

Ⅱ 研究主題研究の「具体の姿」～実践編～

まず、研究の「具体の姿」の全容を述べ、次に指導計画の実践例を示すことにする。



研究課題①「内容・教材」の構造づくり

まず、指導要領と教科書分析により、単元の内容を分析し、授業づくりの基礎をつくる。

内容・教材の構造図

5年 「日本の米づくりを考えよう」

(発展的な内容)

農業分野においては、地産地消、ブランド農産物の開発、農業を行う会社をつくる等の工夫がなされているが、耕地面積の減少、農業人口の減少と高齢化、そして東日本大震災や WTO 農業交渉などの課題がある。その中で、1999年「農業基本法」が制定され、自給率向上を目指した政策が進められている。また、一方で農業・農村の多面的機能の充実が期待されている。

(教科書)

小学生の農作業体験 虫送り、雪中田植えなどの行事 58,59P

農業は国民の食糧を確保する重要な役割を果たしている。生産に従事する人々が消費者の需要に応え、新鮮で良質なものを生産し出荷するため、地形や気候などの自然環境や社会的な条件を生かして生産を高める工夫や努力をしている。また、運輸の動きによって鮮度を保ちながら生産物を早く消費者に届ける努力をしているが、我が国の農業には解決しなくてはならない多くの課題が残されている。

内容(ア)

我が国の農業は、国民の食料を確保する重要な役割を果たしており、主食である米をはじめ野菜、果物、畜産物などを生産している。

(教科書)

広告(食べ物のふるさと探し) 46,47P
様々な農産物の分布 48,49,98,99P
地図帳 67P

食料基地 65P
米の生産量と消費量のグラフ
生産調整 66,67P

(関連する内容)

内容(イ)

我が国の主な農産物や畜産物の生産量や主な産地、土地利用の特色は、自然環境と深いかわりをもって営まれている。

(教科書)

日本列島のいろいろな地域で米づくりが行われている 50,51P
ほ場整備、庄内平野 52,53P
庄内平野 雪解け水 季節風 用水路
防砂林 月別平均気温のグラフ
月別日照時間のグラフ 54,55P
米づくりの農作業ごよみ 専業農家 56,57P

(地域教材)

高松地域の農作業ごよみ
ため池の配水のしくみ

(基底となる内容)

内容(ウ)

食料生産に従事する人々は、地形や気候などの自然環境や社会的な条件を生かして、品種改良や生産の効率を高める技術改良や味や品質の向上、食の安全な確保に努めながら、生産や出荷をしている。

(教科書)

共同作業 カントリーエレベーター
農業試験場 勉強会 60,61P
農業協同組合(JA) 営農指導員 62P
農業生産技術試験場 品種改良
人工衛星やカメラを積んだヘリコプターを使った米の生育調査 63P
(地域教材)
高松南部カントリーエレベーター

内容(エ)

農業の盛んな地域では、輸送手段や経路、出荷先や出荷量などを判断するために情報を収集し、鮮度を保ちながら生産物を早く消費地へ届ける努力をしている。このような運輸にかかわる費用なども価格に含まれている。

(教科書)

米づくりにかかる費用 57P
庄内平野の米が全国にとどくまで(図)
フェリーやトラック
米屋 スーパーマーケット
産地直送する農家のインターネットサイト 64,65P

研究課題② 単元観・目標・評価規準の設定

どのような社会認識をもたせたいのか、「内容・教材の構造」をふまえて単元観を確立する。

ア 単元観の構想

- ① 「内容・教材の構造」づくりを通して教科書を分析し、単元の方向性を考える
- ② 教科書内容に地域教材を取り入れ、地域の特色をもった社会認識をつかめるよう単元観を構想する

本単元における単元観の概要

本単元「日本の米づくりを考えよう」においては、問題を持ち、見通しをもつ段階において、日本の米の生産量及び消費量が年々落ち込んでいることに気づき、子どもがそれを何とかしようと思通しをもって学習に取り組むことを期待している。最終的には、自分たちで考えた方策を社会にアピールすることで社会参画につなぐ学習としたい。

また、我が国の米づくりは自然条件や社会条件と深いかわりをもって営まれていることをつかませるためには、庄内平野の米づくりだけを学ぶだけで十分ではないと考えた。地域教材である讃岐平野の米づくりと対比する思考操作を取り入れることによって、より豊かに日本の米づくりについて理解を深めることができるものと考えている。

イ 目標

- 我が国の米の生産が国民の食料を確保する重要な役割を果たして国民の食生活を支えていること、米の生産は自然環境と深いかわりをもって営まれていることや、米の生産に従事している人々は地形や気候などの自然環境や社会的な条件を生かして生産を高める工夫や努力をしていること、また運輸の働きによって鮮度を保ちながら生産物を早く消費者に届ける等の努力をしているを理解する。我が国の農業には解決しなくてはならない多くの課題が残されていることを理解し、国民生活を支える米の生産の発展について考えようとする。
- 我が国の米の生産の様子から学習問題を見だし、地図、統計などの資料を活用するなどして調べたことをにまとめるとともに、米の生産の様子と自然環境や国民生活とを関連づけて考えたことを適切に表現する。

ウ 評価規準（各観点2つ程度を基本とする）

社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・ 表現	観察・資料活用の技能	社会的事象についての 知識・理解
① 我が国の米づくりの様子に関心を持ち、意欲的に調べている。 ② 国民生活を支えている我が国の農業の発展を考えようとしている。	① 我が国の米づくりの様子について、学習問題や予想、学習計画を考え表現している。 ② 我が国の米づくりは自然条件や社会条件と深いかわりをもって営まれていることを考え適切に表現している。	① 調べたことを白地図や作品などにまとめている。 ② 地図や地球儀、統計などの資料を活用して、我が国の農業の様子について必要な情報を集め、読み取っている。	① 我が国の農業は国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることや自然環境と深いかわりをもって営まれていることを理解している。 ② 米づくりに従事している人々の工夫や努力、生産地と消費地を結ぶ運輸などの働きを理解している。

研究課題③ 単元構成づくり

「内容・教材の構造」に地域教材を加え、指導計画に評価計画を加えた計画を作成する。

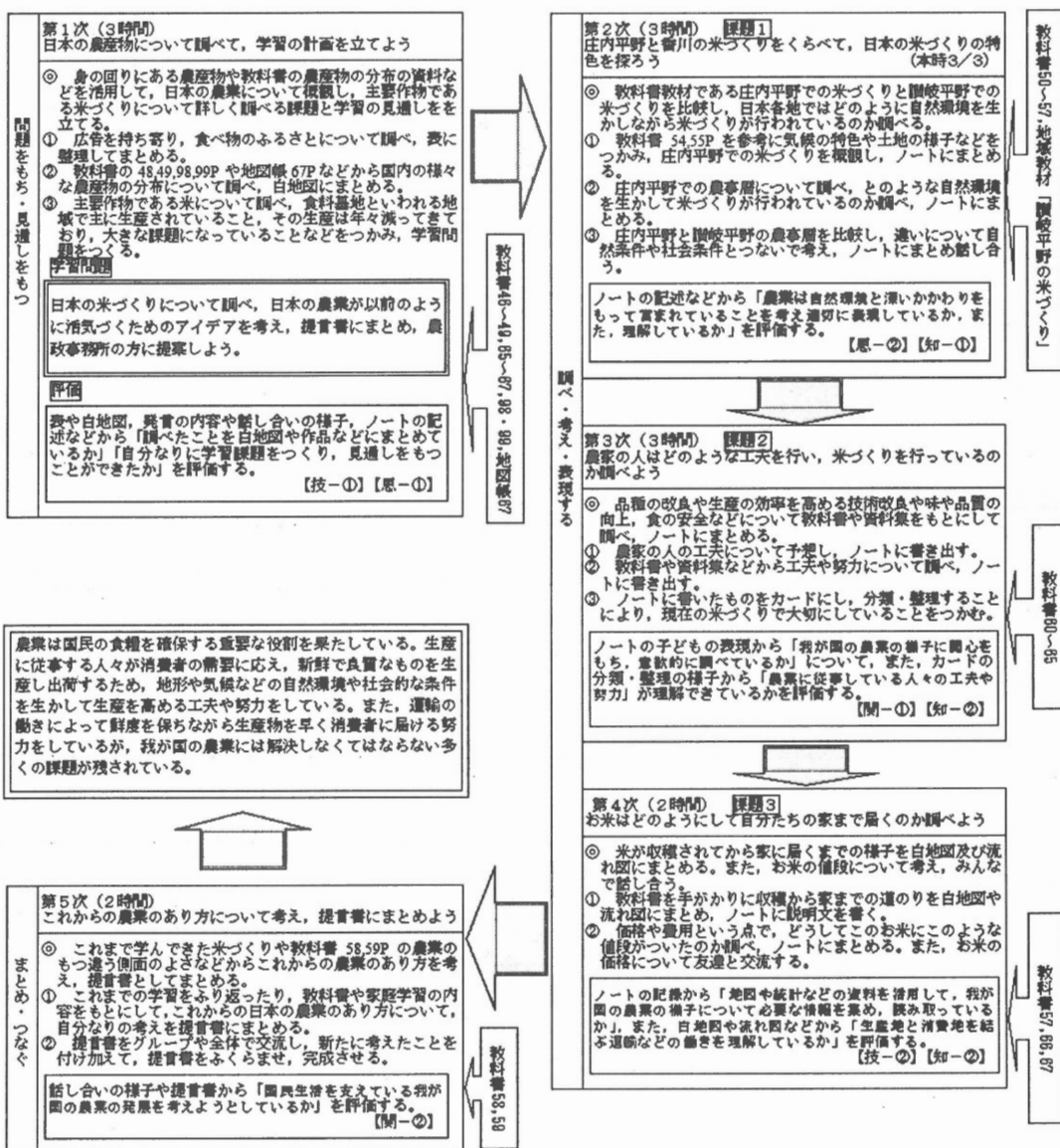
第5学年 単元名「日本の米づくりを考えよう」

1 評価規準

(表記：関一①、思一①、技一①、知一①)

社会的現象への関心・意欲・態度	社会的思考・判断・表現	観察・資料活用技能	社会的現象についての知識・理解
① 我が国の米づくりの働きに関心をもち、意欲的に調べている。 ② 国民生活を支えている我が国の農業の発展を考えようとしている。	① 我が国の米づくりの働きについて、学習問題や予想、学習計画を考え表現している。 ② 我が国の米づくりは自然条件や社会条件と深いかわりをもって営まれていることを考え適切に表現している。	① 調べたことを白地図や作品などにまとめている。 ② 地図や地球儀、統計などの資料を活用して、我が国の農業の働きについて必要な情報を集め、読み取っている。	① 我が国の農業は国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることや自然環境と深いかわりをもって営まれていることを理解している。 ② 米づくりに従事している人々の工夫や努力、生産地と消費地を結ぶ運輸などの働きを理解している。

2 単元構成 (全13時間)



研究課題④ 学習の構造づくり（地域の特色をもち「社会認識をひらき、教材とつなぐ」）

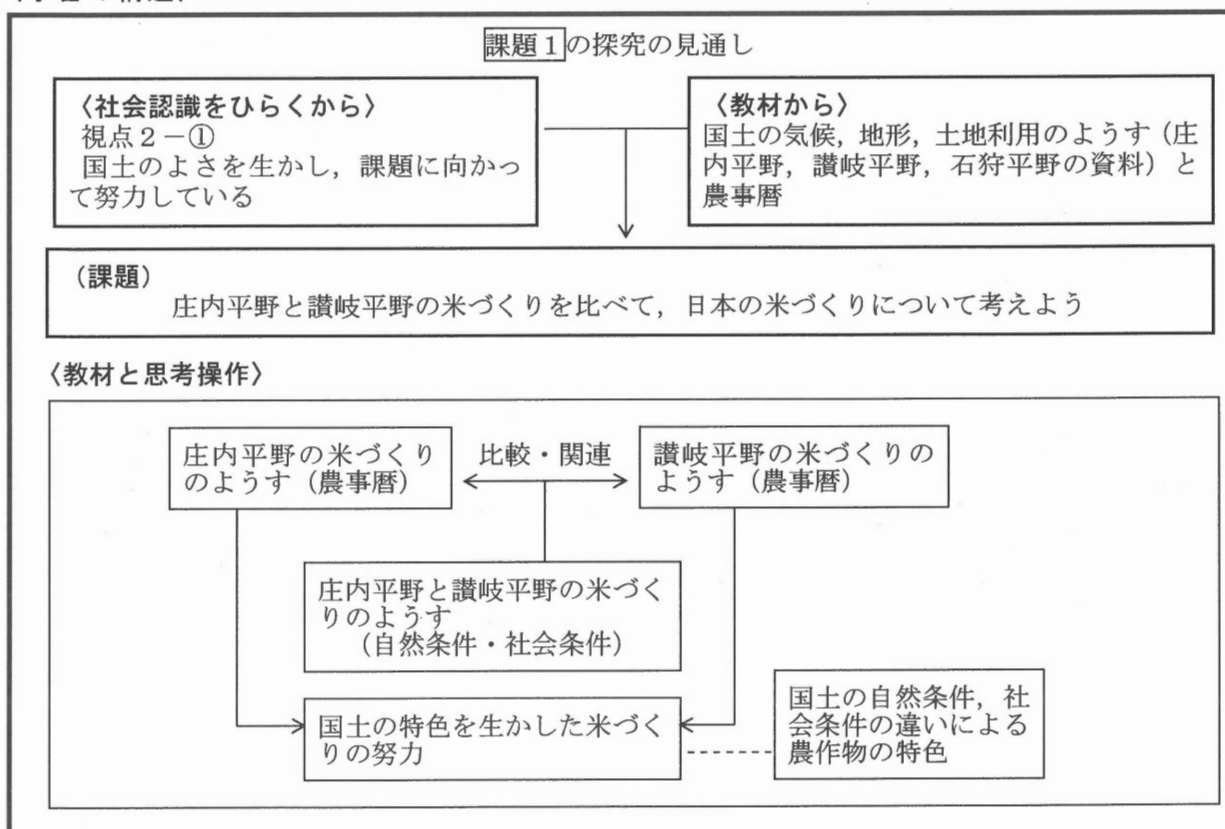
5年単元「日本の米づくりを考えよう」（13時間）

学習問題	日本の米づくりについて調べ、日本の農業が以前のように活気づくためのアイデアを考え、提言書にまとめ、農政事務所の方に提案しよう。
------	---

課題1 （3時間） ○ 庄内平野と香川の米づくりを比べて、日本の米づくりの特色を探ろう ① 教科書 54,55P をもとにして庄内平野の米づくりがさかんな条件をまとめる ② 教科書の農事暦と香川の農事暦を比較し、特色をまとめる ③ 他地域の米づくりの特色を調べる	
社会認識をひらく	
内容知	視点2 社会の変化に対応する認識 ～変化に対応し、広い視野から考えをもつこと～ ① 社会の変化とともに、郷土や国土のよさを生かしながら、人々は生産や消費などで多くの課題に立ち向かって努力している
方法知	・ 気候や地形、土地利用図で生産の工夫をしていることを書き出す。 ・ 農事暦を比較し、他地域の特色を関連づける。

教材	
地域教材の調査 ・ 香川・川島地域の農事暦と特色より、ため池からの配水とつないで米づくりを考える。 教科書・資料 ・ 教科書 52～59P	

〈学習の構造〉



研究課題⑤ 本時の学習指導案づくり

思考操作により思考力の育成を図る。到達目標とそこに到達するための支援方法の設定により、指導と評価の一体化を図る。

本時の学習指導

(1) 目標

- ・ 庄内平野の米づくりのようすと讃岐平野の米づくりのようすをくらべ、日本の米づくりの特色について考えることができる。

(2) 学習指導過程

学 習 活 動	児童の意識の流れ	教師の支援・援助活動
1 前時までに学習してきたことをふりかえり、本時のめあてをつかむ。	庄内平野と讃岐平野の米づくりを比べて、日本の米づくりについて考えよう。 同じ日本でも香川の米づくりと庄内平野の米づくりでは違いがあるようだ。違いのわけを考え、日本の米づくりの特色をまとめよう。	○ 庄内平野の学習の際に、郷土香川ではどのように米づくりが行われているのだろうかという課題に気付かせ、意欲的に取り組めるようにする。
2 家庭学習で調べた讃岐平野の米づくりについて交流し農事層にまとめる。	家庭学習で讃岐平野の米づくりについて調べたよ。 田植えは、5月中旬に行われることが多いようだ。 苗は、ビニールハウスではなく、露地で育てているよ。 一つ一つの田の面積は、とても小さいよ。 田植えに使う水は、ため池と香川用水に頼っているよ。	○ 家庭での聞き取りや、取材活動に積極的に取り組めるよう配慮する。 ○ 気付いたことをクラスで話し合わせ、1つの農事層にまとめていくよう配慮する。
(1) 讃岐平野の米づくりについて話し合う。		
(2) 話し合ったことをもとに農事層にまとめる。	香川の米づくりの様子が分かったよ。庄内平野の米づくりのようすと比べてみよう。	○ 庄内平野と同じように農事層をつくるようにし、その違いに気付きやすいよう配慮する。
3 庄内平野と讃岐平野の農事層を比較し、日本の米づくりの特色について考える。	庄内平野は5月上旬に田植えをするのに対して、讃岐平野は主に5月だ。 苗は、4月からビニールハウスで苗を育てている。讃岐平野では5月だよ。 庄内平野は園芸鉢が通み、一枚の田がとても大きいよ。 庄内平野は、最上川の水を利用している。土地改良区が水を管理するのは同じ。	○ 自然条件（気候、地形等）と社会条件（1軒あたりの農地面積、専業農家率）等を用意しておき、自由に活用できるようにする。
(1) 農事層を比較し、相違点をノートに書く。	同じ米をつくるのに、どうしてこのような違いがあるのだろうか。	〈評価〉【思考-②】
(2) 相違点について、各平野の自然条件・社会条件とつないで、考え、ノートにまとめる。	各平野の自然条件・社会条件 庄内平野 5月に田植え 讃岐平野 5月に田植え 気候のグラフ 庄内平野では気候のピークに出穂を合わせるため、温室で育苗し、5月に田植えを行っている。 水利用の仕方 庄内平野 広大な農地 最上川の水 讃岐平野 限られた農地 ため池の水 讃岐平野では、限られた水資源を有効に活用するため、田植えの時期を合わせている。	到達目標を「2つの平野の相違点を自然条件や社会条件とつないで考えることができる。」とし、これに達しない場合は、1つの相違点に対して、1つの自然・社会条件を提示し、つないで考えるよう助言する。
(3) 2つの平野の比較から言えることを考え、日本の農業の特色について話し合う。	日本では、各地の気候に合わせて米づくりが行われ、長い年月をかけてその土地の自然条件・社会条件に最も適したかたちになっている。そこには、地域を特色を生かして米づくりをしようと努力してきた人々の営みがある。	○ 共通して言えることをもとに、沖縄ではどうか、北海道ではどうか等、日本の他地域にも転移して考えられるよう助言する。
4 次時のめあてをもつ	農家の人は、どのような工夫を行い、米づくりを行っているのか調べてみたい。	○ 次時のめあてをもたせ、意欲をつなぐ。

Ⅲ 研究主題について～理論編～

1 「社会的な見方」について

(1) 「社会的な見方」の学びを求める社会認識の内容を明らかにする。

香小研社会科部会では、平成20年度の四国大会において「社会をひらく」を研究主題とする、社会認識の内容の研究とそれに基づく社会科カリキュラムについて提案したが、内容研究の成果を十分生かさないままその後の研究が行われてきた反省がある。「社会認識を明らかにしたカリキュラムづくり」とそれに基づく「主体的な学習」を究明しなければならない。その際、新学習指導要領が示された後に出てきた次の2点についても重視したい。

- 平成23年3月11日の東日本大震災以降、「社会生活」についての取り組みについて変革が求められるようになってきた。その1つが、「持続可能な社会」の実現を目指すことの重視、2つ目は、「日本人としての心」の再認識、3つ目は、「社会参画」につなぐことである。このようなことを実現するためにも、まずしっかりと社会認識をもつことが大切になってくる。
- 平成23年12月、第2期教育振興基本計画の「基本的な考え方」がとりまとめられた。昨今のグローバル化や少子高齢化、さらには先般の東日本大震災など、深刻な諸課題を抱えるわが国は、きわめて危機的な状況にあり、まずはこのような危機を国民全体が共有する必要があるとし、そのうえで、持続可能で活力ある社会を実現するために、単に経済成長のみを追求するのではない、成熟社会に適合した新たな社会モデルを構築することで、一人ひとりが生涯にわたり能動的に学び、力を養い、その成果を社会に生かすことが可能な生涯学習社会を構築していくことが必要としている。このことをふまえ、多様性を基調とする「自立、協働、創造」の三つの理念をキーワードとし、今後の教育行政の方向性について考えていくとしている。

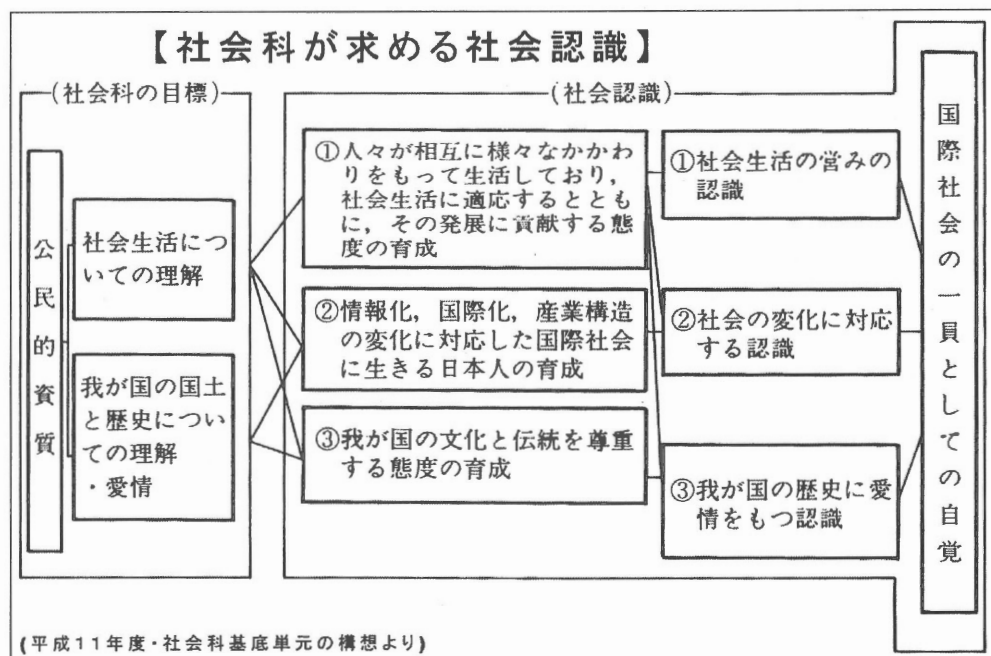
以上のようなことも考慮して、これからの社会科教育においてどのような社会認識をもたせたらよいのか考えていきたい。

(2) 本研究会の「社会認識論」

本研究会では、その発足の時以来、「社会認識論」と「社会科学習構造論」を研究し続けている。その中で、現行の学習指導要領による「社会認識論」にかわるものとして、平成11年「社会科基底単元の構想」として示した下図の「社会認識」と次頁の「社会認識基底表」がある。これが、平成20年新学習指導要領のもと「社会認識をひらく」を研究主題とした研究へと発展してきている。

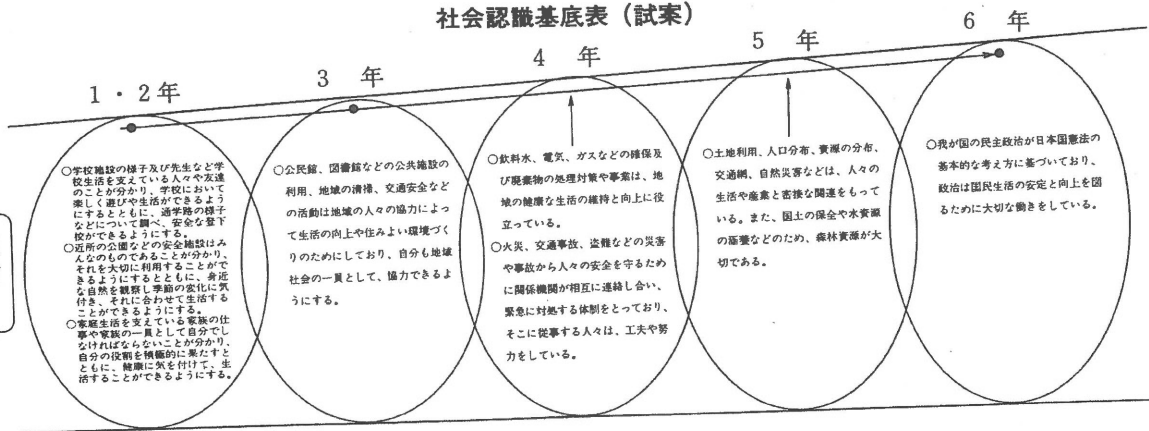
「社会認識をひらく」とは、従来どちらかというと「社会認識」は社会諸科学の見方による内容知であったことを「社会認識をひらく」として社会諸科学だけでなく、自然諸科学、人文諸科学などの

科学知・内容知と人間としての生き方・在り方の「人間知」を入れた内容知としてとらえたものであり、社会認識はこの「内容知」と「方法知」によって構成するとした主張を行った。ここに改めて、平成25年度の研究で「社会認識」を考える場合、この20年度の研究成果を十分に生かし、発展させたいと考えている。

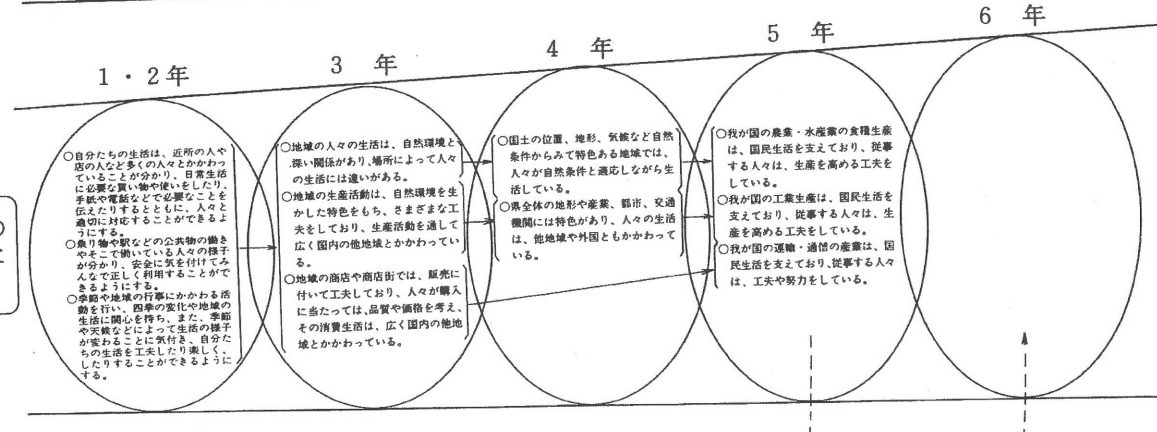


社会認識基底表（試案）

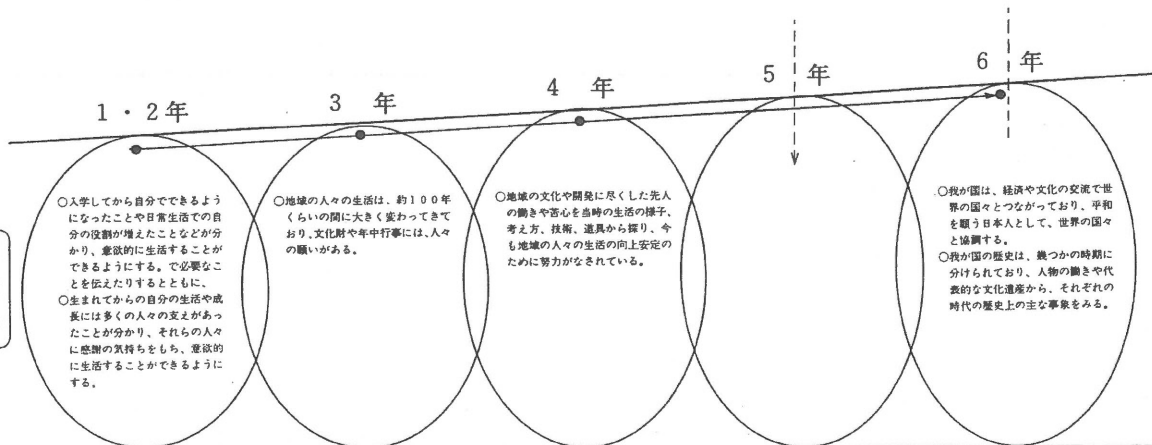
社会生活の営み



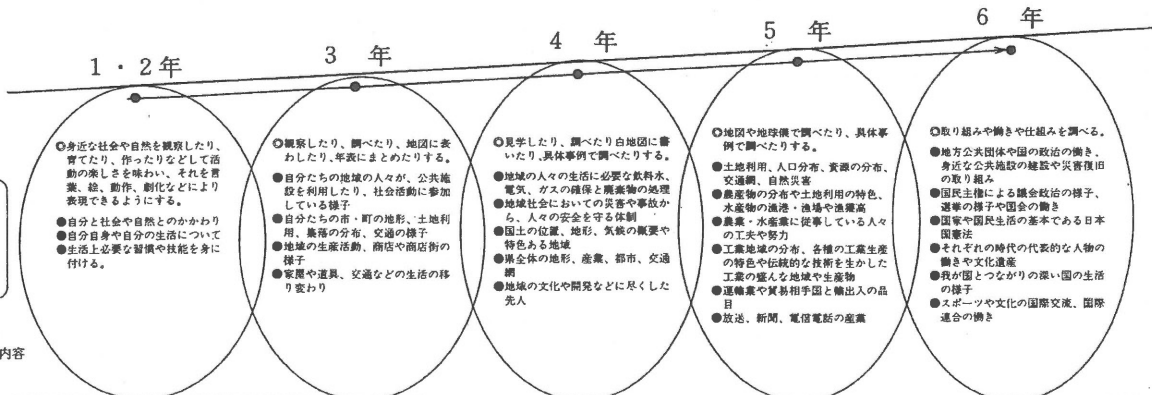
社会の変化に対応



我が国の歴史に対する愛情



認知力の育成



○ 調べ方
● 認知の内容

(3) 社会認識の内容を次の①～④の手順で明らかにする。

① 社会認識の柱を学習指導要領の目標におく

～文部科学省・澤井陽介教科調査官のご指導(平成23年度夏季研)をよりどころにして～

社会認識の柱を学習指導要領の目標と教科調査官・澤井陽介先生のご指導を関係付け、平成11年度作成の「社会認識」の柱を改訂する。

学習指導要領「社会科の目標」	文部科学省・澤井陽介教科調査官 「教材と社会認識の関係をとらえる」 (平成23年度夏季研)
○ 社会生活についての理解 ○ 我が国の国土と歴史に対する理解と愛情 ○ 公民的資質の基礎 (小学校・中学校の各学校段階における社会科の特質を確認するとともに相互の関連を踏まえて指導に当たることが大切である。)	○ 社会的事象のつながりの認識 ○ 人間の生きる姿の認識 ○ 変化・発展の認識 ○ わたしたちの生活とのかかわりの認識 (社会生活を教材のもつ特性からみたものである)

② 社会認識の「視点」を設定する

社会認識の内容知・方法知から「社会認識の視点」を設定する。

社会科の目標	社会認識
	〈内容知（科学知・人間知）〉 社会生活についての理解 ① 人びとが相互に様々なかかわりをもって生活を営みながら自らが社会生活に適応し、地域社会や国家の発展に貢献する。 視点1 社会生活の営みの認識 ◎ 私たちは、人や物との関わりの中で、くらし（生活）を営み、願いをかなえる努力をすること 我が国の国土と歴史についての理解と愛情 ② 知識基盤社会やグローバル化が進む時代の中で、国際社会に主体的に生き、持続可能な社会の実現を目指す 視点2 社会の変化に対応する認識 ◎ 社会の変化に目を向け、広い視野に立って自分の考えをもつ 我が国の国土と歴史についての理解と愛情 ③ 土地と生活のかかわりの変化にともなう時代の特色を風土の中に築いた先人の働きを見つめ、伝統や文化に愛情をもち、受け継いでいく 視点3 我が国の歴史に愛情をもつ認識 ◎ 先人の働きに人間としての生き方や在り方を求める 公民的な内容 ④ 平和で民主的な国家・社会の形成者として市民・国民にふさわしく国際社会に主体的に生き、公共的な事柄に自ら参画していく 視点4 国際社会の一員として参画する認識 ◎ 国際社会の一員としての自覚をもち、社会事象のもつ意味を考える

再構成の学習を「意欲」「思考操作」「評価」から組織し、主体的に学ぶ力を育成する。

再構成の学習を組織し、主体的な学習を進める中で、「思考と表現」「指導と評価」の統一を図り、言語活動の充実を目指す

③社会認識の視点と内容（試案）

視 点	事項(指導要領の内容から)	視点の内容
社会生活の営みの認識 ◎ 私たちは、人や物との関わりの中で、くらしを営み、願いをかなえる努力をすること	- 人々の健康で安全な生活を守るために、関係の諸機関が連携して政治が行われている - 地域では、人々にとって健康で安全な環境がある - 地域の人々の生活が、変化・発展しているため先人の働きがある - 地域社会に対する誇りと愛情をもつ	① 関係の諸機関が連携して、人々の健康で安全な生活を支えている ② 人々の生活が変化し発展する中で、人々の協力や先人の働きがある ③ 私たちは地域とかかわり、誇りと愛情をもつことが大切である
社会の変化に対応する認識 ◎ 社会の変化に目を向け、広い視野に立って自分の考えをもつこと	- 身のまわりの生活は、地域・国土と環境とが互いに絡み合っている - 自分たちの生活は、他地域や外国とのかかわりをもちながら営まれており、人と物の流れを通して見るのが大切である - 地域社会の社会的事象の特色や相互の関連について考える - 我が国の国土の様子、国土の環境と国民生活との関連について考える - 我が国の産業の様子、産業と国民生活との関連、情報化の進展の意味について考える - 環境の保全や自然災害の防止の重要性について関心を深め、国土に対する愛情をもつ - 持続可能な社会の実現を目指す	① 社会の変化とともに、郷土や国土のよさを生かしながら、人々は生産や消費などで多くの課題に立ち向かって努力している ② 人々はよりよい社会を築くよう、環境・情報・福祉・防災などの課題に協力・連携して取り組んでいる ③ 持続可能な社会を目指す取り組みを進めることが大切である ④ 社会事象は相互に関連しており、日常の動きに目を向け、その事象のもつ意味を考えるよう努める
我が国の歴史に愛情をもつ認識 ◎ 先人の働きに人間としての生き方や在り方を求めること	- 地域の人々の生活の変化や地域の発展は、先人の働きによるものであり、人々の願いでもある - 国家・社会の発展に大きな働きをした先人の業績や優れた文化遺産の理解を深める - 我が国の歴史や伝統を大切にし、国を愛する心をもつ	① 今の生活を支えているのが先人の働きであり、そこには人々の知恵や願いがある ② 郷土や国の発展に尽くした先人の業績や文化遺産を大切にし、受け継ぐ ③ 我が国の時代の特色をもとに歴史や伝統・文化に誇りをもつ
国際社会の一員として参画する認識 ◎ 国際社会の一員としての自覚をもち、社会事象のもつ意味を考えること	- 身の回りや地域の具体的な事例を調べ、感動したり、共感したりして、日本人としての自覚をもつ - 地域社会の一員として社会事象の意味をより広い視野から考え政治の働きに関心をもつ - 平和を願う日本人として世界の国々の人と共に生き、互いの文化を尊重し、国際社会における我が国の役割を自覚する - 公共的な事柄に自ら参画していく資質や能力をもつ	① 人々は、社会の出来事に共感したり、感謝したり、課題をもったりして社会を発展させようと努力している ② 国際社会における我が国の役割の現状から地域社会の一員としての自覚をもつ ③ 平和を願う日本人として、世界の人々と共に生きることの大切さを自覚する ④ 公共的な事象に、自ら参画し、よりよい社会を形成しようとする

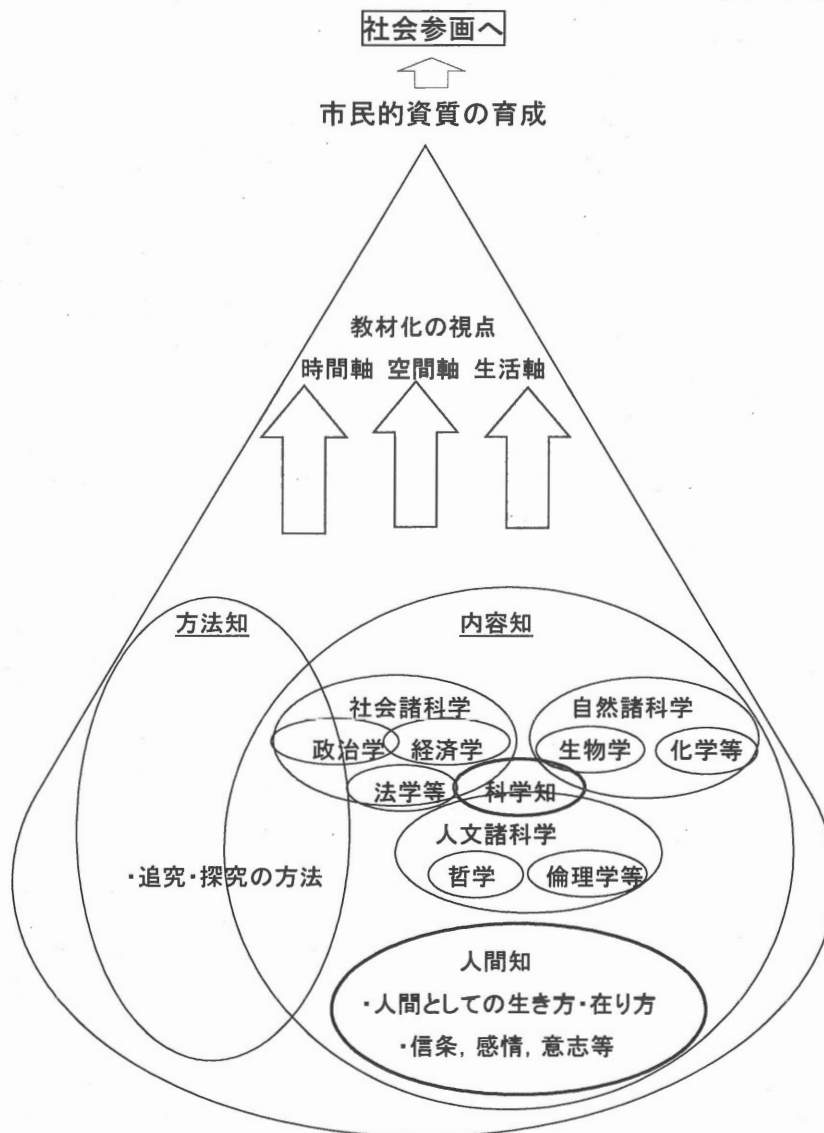
④ 社会認識の「視点」の内容（要点）を設定する

視点 1	視点 2	視点 3	視点 4
① 関係の諸機関が連携して、人々の健康で安全な生活を支えている ② 人々の生活が変化し発展する中で、人々の協力や先人の働きがある ③ 私たちは地域とかかわり、誇りと愛情をもつことが大切である	① 社会の変化とともに、郷土や国土のよさを生かしながら、人々は生産や消費などで多くの課題に立ち向かって努力している ② 人々はよりよい社会を築くよう、環境・情報・福祉・防災などの課題に協力・連携して取り組んでいる ③ 持続可能な社会を目指す取り組みを進めることが大切である ④ 社会事象は相互に関連しており、日常の動きに目を向け、その事象のもつ意味を考えるよう努める	① 今の生活を支えているのが先人の働きであり、そこには人々の知恵や願いがある ② 郷土や国の発展に尽くした先人の業績や文化遺産を大切にし、受け継ぐ ③ 我が国の時代の特色をもとに歴史や伝統・文化に誇りをもつ	① 人々は、社会の出来事に共感したり、感謝したり、課題をもったりして社会を発展させようと努力している ② 国際社会における我が国の役割の現状から地域社会の一員としての自覚をもつ ③ 平和を願う日本人として、世界の人々と共に生きることの大切さを自覚する ④ 公共的な事象に、自ら参画し、よりよい社会を形成しようとする

(4) 社会認識の「内容知」の構造

社会認識の「視点」の内容を研究するには、下図に示した「内容知の構造」の研究を進めることが大切である。このことの詳しい内容は、研究図書P39～P43による。

以上のような点をふまえ、香社研では、社会科における知の構造を次のようにとらえたい。

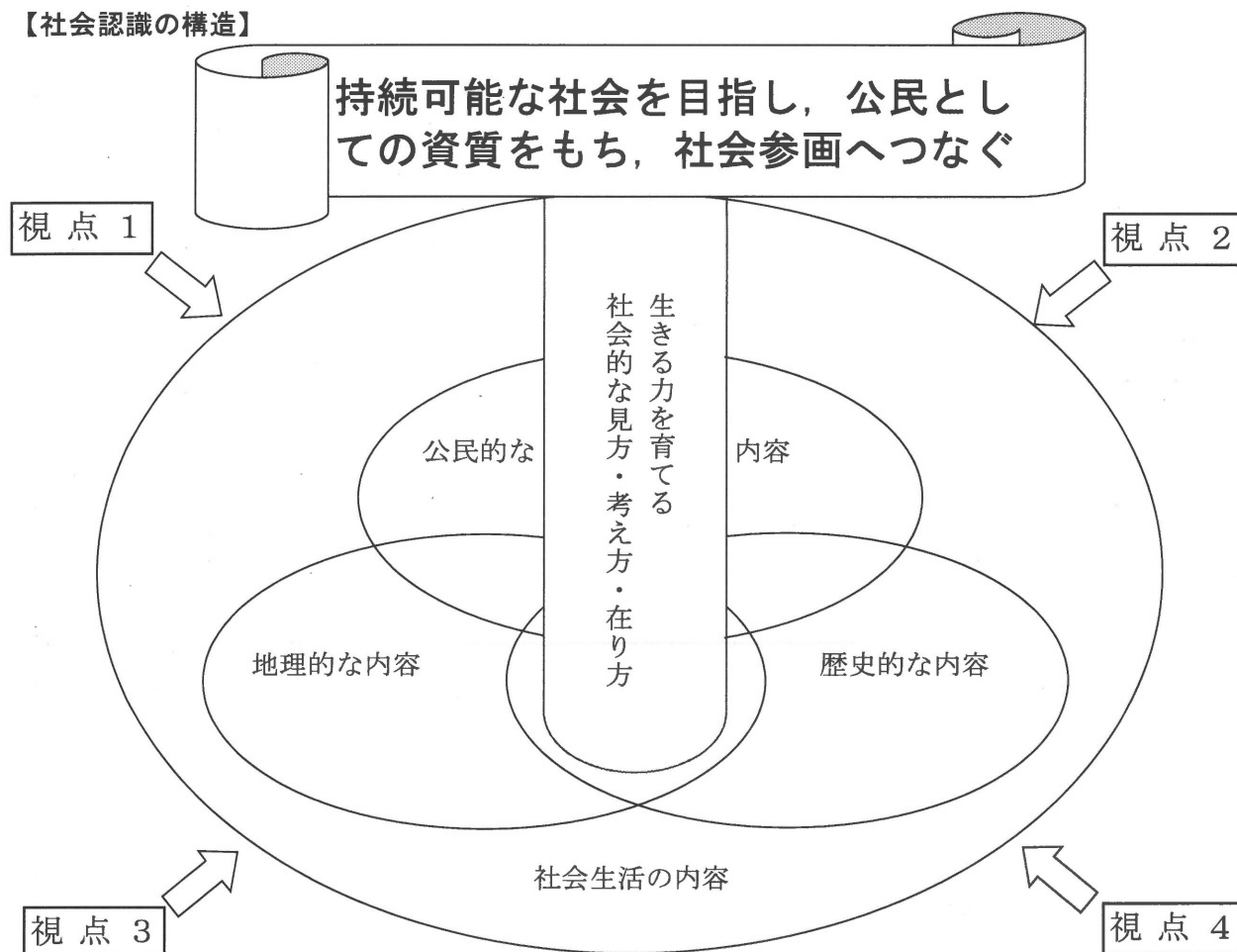


【求められる社会科の内容構造】

- ① この社会科の「知の構造」を基にして社会生活の課題解決に必要なと思われる情報を多様を選び出し、選り出していくことから始めるところに社会的な見方を育てていく要因がある。与えられた情報で課題を解決していくことからの脱却が大切になる。(学習環境の形成，社会科カリキュラムの日常化)
- ② 多様を選び出した情報を「整理」し、「類別」することで，課題を明確にしつつ探究していく見通しをもつという社会的な見方を育てていく。(問題をもち，見通しをもつ段階)
- ③ 課題を明確にし，解決への見通しをもってさらなる調査・観察することを明らかにする社会的見方を育てる。(問題をもち，見通しをもつ段階，考えをまとめ，働く段階)
- (5) 「社会認識をひらく」内容を「社会的な見方」の育成に生かす

「社会認識をひらく」内容知は、「社会的な見方」を育てる具体的な認識として下図に示す地理的な内容，歴史的な内容，公民的な内容の学習として展開する。学習の特色を挙げておく。

【社会認識の構造】



①「地理的な内容」について

地理的な見方とは，地域や日本や世界に見られる諸事象を，位置や空間的な広がりや日々の生活とのかかわりで，地理的な事象として見だし，調べていく観点を見つけていくことである。そして，どこに，どのようなものが，どのように広がり，人々の生活とのかかわりをとらえて，見出し，興味と関心をもち，観察・調査したり，資料を収集したりして課題意識をもつことである。

②「歴史的な内容」の社会的な見方について

歴史的な見方とは，地域や我が国の文化の発展や人々の生活の向上に尽くした人物，文化遺産や出来事を，いつ，どこで，誰が，どうしたの視点をもって目を向け，風土的条件と文化や伝統的なかかわりに社会的な見方を広げ，関心を高めることである。そして，私たちの生活のようすや生活に根ざした伝統や文化について，地域や我が国や外国の政治や社会の動向について，新聞やテレビの情報を得たり，図書館や歴史資料館などで資料を収集して調査。観察して社会的な見方を広げることである。

③「公民的な内容」の社会的な見方について

公民的な見方とは、社会生活の中で人間として値打ちのある生き方を、私たちのまわりで起こる社会事象のくらし、政治、経済、世界平和などに関することについて、日々の社会事象の変化を踏まえた様々な情報を収集しながら、適切に判断するよう、友達や親や地域に問いかけて、社会的な見方を確かめようとするものである。そして、身近な社会生活の中で、よりよい学校生活や社会生活を作るために、自分たちで何ができるか、何をしなければならないかといったことに課題意識をもつ社会的な見方ができることである。

2「社会的な考え表し方」(社会認識をひらく方法知)について

(1) 主体性を育む意欲づくり

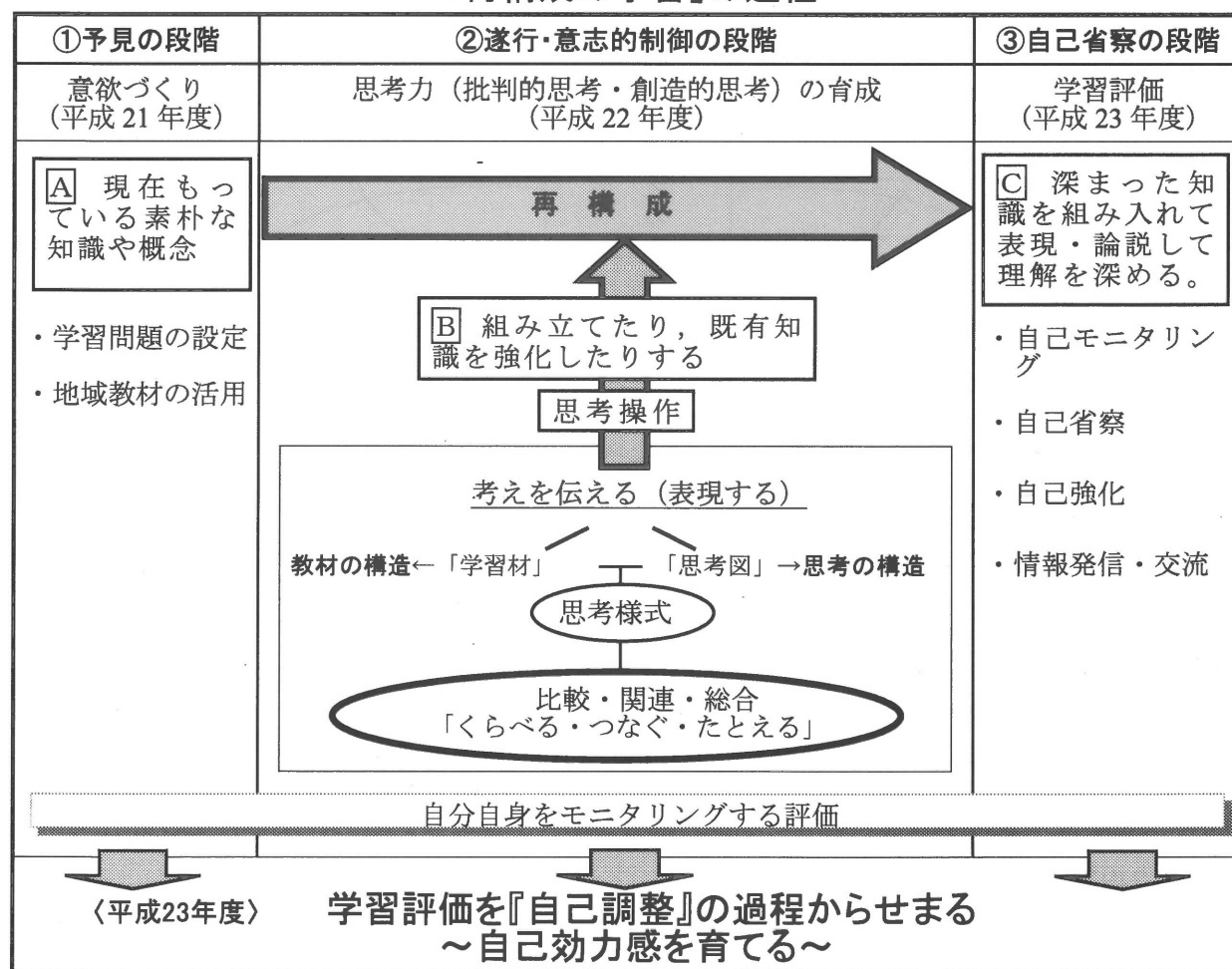
「学ぶ意欲」を高める考えを学習過程でとらえる

学ぶ意欲を高める学習の過程は、①問いをもつ、②問いを追求する、③問いを広げるといったそれぞれの段階に分けて考えることができる。

- ① 問いをもつ……子ども自らが生み出すことが大切、追求への意欲を育てることが中心
 - ② 問いを追求する……表現活動を中心に据え、学び方を援助、交流の場を工夫することが大切
 - ③ 問いを広げる……伸びを認める、社会の一員としての自覚、次の学習への出発点

(2) 思考と表現の一体化による再構成の学習(これまでの研究をもとにした概念図)

「再構成の学習」の過程



① 自己調整の過程としての「再構成の学習」

学習は、3つの段階をサイクル活動として展開する。3つの段階とは、「予見」「遂行・意思的制御」「自己省察」である。大まかに言えば、「予見」は学習場面を設定し、意欲的に取り組む計画を立てる

段階である。「遂行・意思的制御」は思考と表現の統一による再構成を図ることによって、思考力を育てる段階である。「自己省察」は、総括的な評価を入れた自己評価をする段階と言える。この3つのサイクルが自己調整の過程であり、このサイクルを通して「自己効力感」を育てていくことが重要となる。このことを視点にして、研究の概要を次の図のように考える。

予見の段階では、学習場面を設定し、取り組みの計画を立てる。自己効力感をもって目標設定、課題設定し、方略プランニングと合わせて計画するのである。遂行・意思的制御、自己省察の段階においては、自己モニタリングをしながら自己評価、自己強化をするという自己調整を図る学習を目指している。思考力は、図のように、**A**「現在もっている素朴な知識や概念」を、**B**「組み立てたり、既存知識を強化したり」して、**C**「深まった知識を組み入れて表現・論説して理解を深める」よう再構成することによって育てられる。すなわち、思考力は**A**から**C**に高めることによって育てられる。その高める過程の活動が、思考様式の活動であり、自分自身をモニタリングによって自己評価しながらの活動になる。

この思考様式による活動は、考えることと伝える・表現することと合わせて「考えを伝える(表現する)」活動である。

② 思考力の育成

ア 思考力の発達の筋道を意識する

子どもの思考力は、経験を通して得たもの、こと、人について思考を働かせて解釈し、説明する能力を獲得することで発達していく。その過程は、技術(できる・できそう)から科学(わかる・なす)への発展の過程といえる。技術(できる・できそう)は、もっぱら対象にあたって、興味と断片的な知識をもとに知ろうとし、それを利用しようとするに関心が向けられる。そこで、簡単に問題解決して目標に達すればそれで終わってしまい、その過程を説明することはない。科学(わかる・なす)は目標達成のために、対象にあたって知り、その取り組みの結果に終わらず、さらに深く解決過程を意識して説明していくことに特徴がある。

このように、思考の発達には、①目標に達することに関心をもち、②周辺的活動の段階から始まって、③具体的活動に意味を意識する段階を経て、最後に、④反省的思考にもとづいた論理によって意識的に行動する段階へとすすんでいく。これを、ピアジェは、思考の発達の筋道といい、「周辺から中心への発達」として、特徴づけている。社会科の授業においてもこのような思考の発達の筋道を意識しながら授業づくりを行っていく必要がある。

イ 思考力をいかに育てるか

思考力を育てるとは、物事を構造的に把握する態度を育てることである。構造的な把握を行うために、種類や用途、場所、時間経過などで分析したり、類別したり、関係づけたり、条件を変えたりしながら、思考そのものが特色としてまとまっていなければならない。思考力を育てることは、知識を構造化している過程としてとらえることが大切である。

思考力は、従来は、ただ、感受性、記憶、言語、数、推理などばらばらな能力のよせ集めとして、取り扱われてきた。そのため、これら個々の能力を別々に訓練することによって、思考力を発達させることができるものとしていた。だが、断片的な能力の訓練では、たとえ知識として覚えたり、技能として習熟できたものであっても、それだけで、思考力が育つことにはならない。

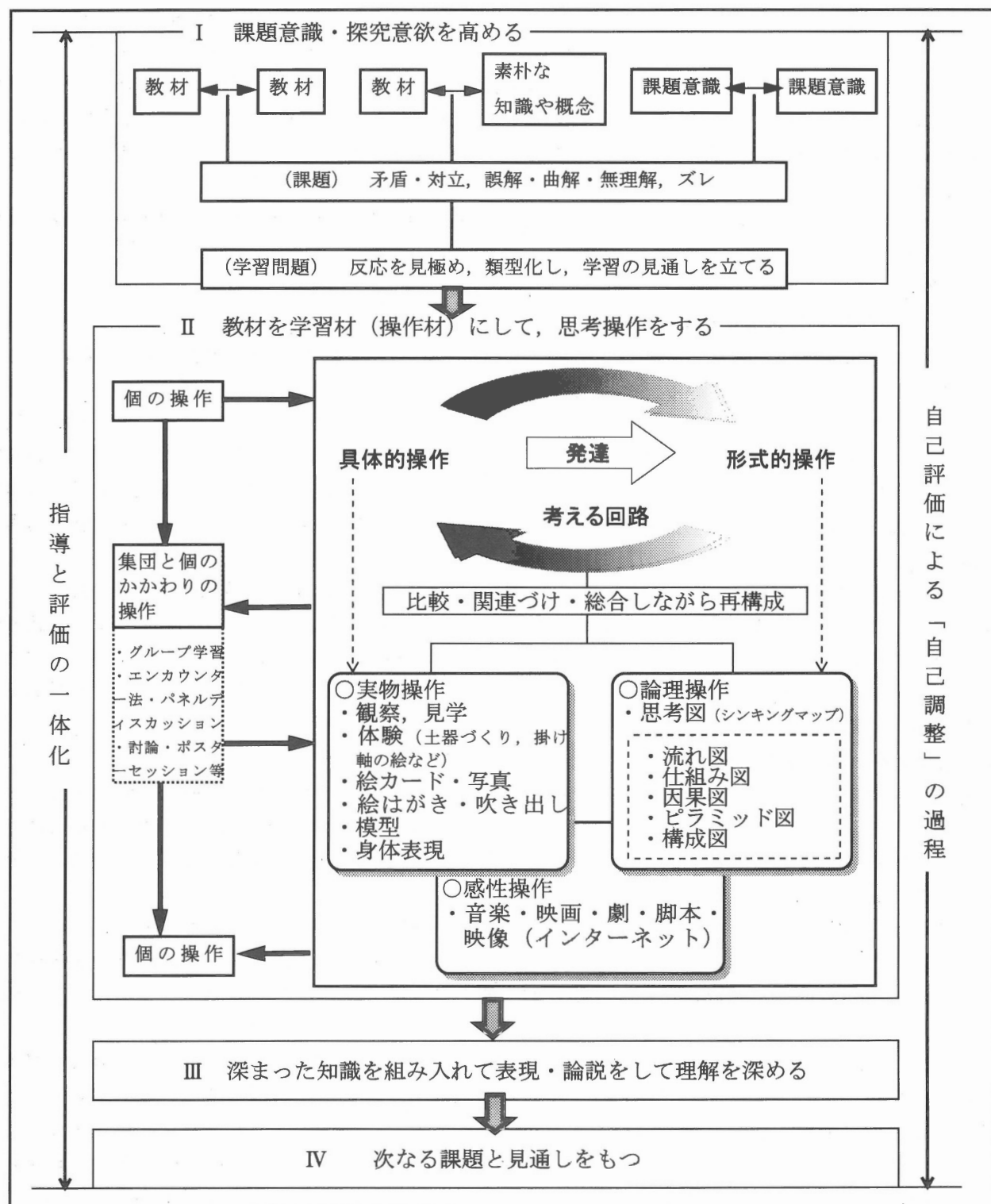
確かに、読み、書き、計算の技能は、思考力の発達の重要な道具である。しかし、その技能自体が、思考力の発達の原動力ではない。例えば、ことばが読めることと、ことばの意味を理解することとは違う。読みの技能は、習熟だけで獲得できるが、意味の理解は論理的思考の構造を前提とする。そして、この思考の構造は、子どものそれまでの成熟、経験、知識、技能などが組織的に統合されている全体なのであり、子どもの思考構造とのかかわりの中で、学習により、生きて働く思考力になるのである。

つまり、思考力を育てるために大切なのは、正しい知識の理解に当って、過ちやつまずき、意識のずれを自分で発見して、それを修正していく過程である。この自己評価を伴う活動は、思考の構造の中に確実に組み込んで、より正しく深い理解を進めていくことになる。これは「思考力の内面化」と

呼ばれている。

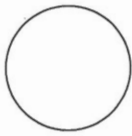
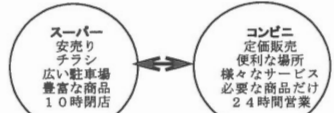
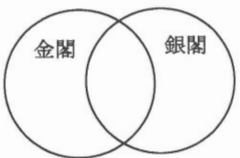
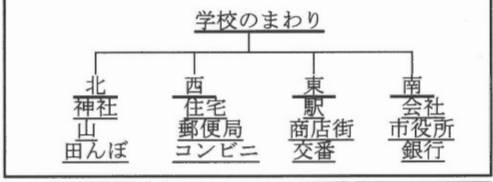
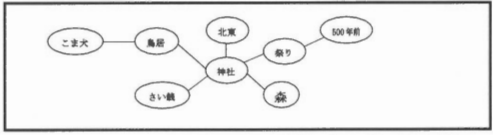
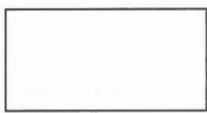
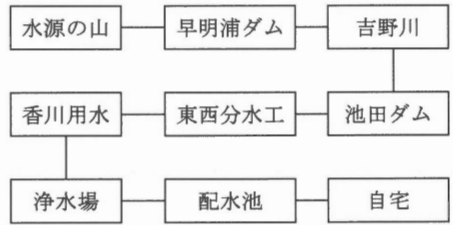
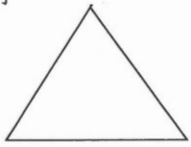
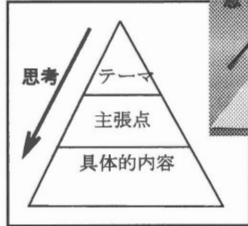
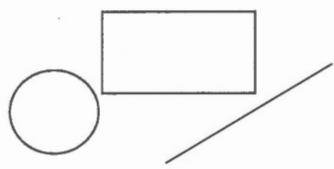
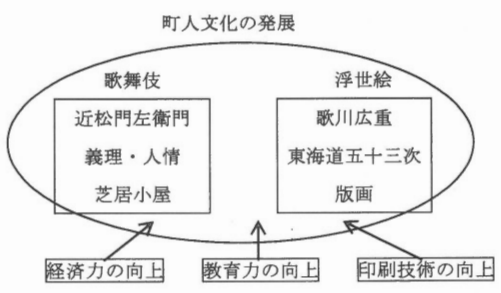
思考の質的な発達を促すためには、活動がある点でせき止められるような状況に立たせることが必要である。このせき止められる状況は、社会的事象の矛盾や対立の場面であり、課題や学習問題の設定などの学習活動に生かしていくことで、学習に意欲的に取り組むようになり、飛躍的な発展にもつながってくる。

〈子どもの思考の過程〉



そこで、学習材の開発に合わせて、「思考の構造」（子どもが思考する道筋）を明らかにすることにより、昨年度取り組んできた。その中心としたのが、「思考図」（シンキングマップ）の活用である。このことによって、「思考と表現」の一体化による言語活動の充実を図りたい。

〈思考図(シンキングマップ)の5つの型〉

	名称	思考の様相	例
①	サークルマップ 丸 	分析する 比較する 仲間分けをする 自分の考えをふくらませる	  
②	ツリーマップ 線 	考えを整理する 自分の考えをふくらませる 発想を広げる	 
③	フロアマップ 四角 	順序性を明らかにする 原因と結果をつなぐ	水が家に届くまで 
④	ピラミッドマップ 三角 	自分の考えを積み上げていく 考えを概念化する 主張点を具体で述べる	 
⑤	コンストラクションマップ 丸, 四角, 線等の 構成・組み合わせ 	いくつもの考えを 構造化し, 整理する	町人文化の発展 

3 「社会的な在り方」と「社会参画につなぐ」について

(1) 「社会的な在り方」は「人間的な在り方」を深める

社会科の究極的なねらいである。公民的資質の基礎を養うとは、社会生活の内容を通して、地理的な内容、歴史的な内容、公民的な内容について学び、日本人としての自覚をもち持続可能な社会の実現を目指して国際社会に主体的に生きるよりよい社会の形成者として「個が実社会の中で参画への見通しをもつ」社会的な在り方を育てることである。このように教科としての社会科が果たす「公民的資質の基礎を養う」ことを、社会科の内容認識にとどまらず、実社会とかかわり、探究しようとするものである。

そこで、どうしても教育活動全体で行う道徳教育でいう「人間的な在り方」のかかわりを述べておくことが必要であると考え。道徳教育の指導内容は、子どもの自立心や自律性、生命を尊重する心の心の育成を重点にするとともに、基本的な生活習慣、規範意識、人間関係を築く力、社会参画の意欲や態度、伝統や文化を尊重する態度を育成することにある。このような内容をもつ道徳教育は、人間として自らの人生をどう生きるかを一人一人に問いかける（「人間的な在り方」を求める個の確立）なのである。これは、常に前向きな姿勢で未来に夢と希望をもち、自主的に考え、自律的に判断し、決断し、決断したことは積極的にしかも誠実に実行し、その結果について責任をとることができる人間である。このように、人間的な在り方は、学校の教育活動全体で行う道徳教育が社会とかかわりながら個の確立を求める中で、「社会的な在り方」は個が社会での役割を求めるものであり、「社会的な在り方」は、「人間的な在り方」の追究を深めていくものといえる。

(2) 「社会参画」への意識の高まり

「社会参画」につなぐ意識を高めようとする要因としては、経済成長の過程で失われた大家族や地域コミュニティがある。そして、その後の近年の経済社会の急激な変化に伴う人口減少、高齢化社会の到来により、地域の活力が薄れ、住民が生きがいを求めることが弱くなり、都市も農漁村も地域コミュニティが崩壊状態になってきたことが挙げられる。

これらの状況から「社会参画」への意識が生まれた。住民たちの意識の変化や地域活性化の願いから社会貢献の活動への参加意識が高まり、自らがよりよく生きるための地域の生活者として、環境づくりに参加・実践してはとする「社会参画」への意識が高まってきた。

(3) 「社会参画」の意義

平成18年に、59年ぶりに教育基本法が改正され、教育の目標に「公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと」が新たに盛り込まれた。それを受けて、平成19年の学校教育法の改正により、義務教育の目標にも同様なことが規定された。

「社会参画」という言葉が一人歩きをしている感があるが、その前提としての「公共の精神」がまず大切にされなければならない。「公共の精神」とは、社会全体の利益のために尽くす精神、まさに国や社会の問題を自分自身の問題として考え、社会のほかの人々と一緒に協力し合いながら社会を形成していく精神のことを指す。これまでの日本人は、ややもすると国や国家はだれかがつくってくれるものという意識が強かったのではないだろうか。これからは、国や社会の問題を自分自身の問題として考え、そのために積極的に行動していくことが大切である。一人一人が「自分なんだ」という自覚をもつこと、それがいわゆる社会参画である。

つまり、社会参画という前に公共の精神や公正な判断力、あるいは社会に向ける関心などを教育活動全体で育むことが大切である。社会参画はその先にあるものである。社会参画も必ずしもゴールではなく、学習経験と考える必要がある。

(4) 「社会参画」につなぐことについて

「社会的な在り方」は、よりよい社会を目指すことにある。私たちがよりよい社会を目指し、築いていくためには、社会生活の内容を基礎とした地理的な内容・歴史的な内容・公民的な内容の見方や考え表し方の学びを「持続可能な社会」の実現を目指した観点から、実社会の生活における社会的な自分たちの在り方を「社会参画」、すなわち社会の中で「働く」ことについていくことによって達成し得るものである。そして、そのつなぎは、実社会で働くことの考えをもつことであったり、実社会に生かして働くことであったりする。

その「社会参画」につなぐ内容としては、社会生活の中で、地理的な内容としては地域の調査・観察の中で人・もの・こととのかかわりから、歴史的な内容としては人物・伝統や文化などのかかわりから、公民的な内容としては、災害、福祉、環境、エネルギー、平和のことなどから具体的なつながりがあげられよう。

ここに、社会科の認識論は社会に参画・実践論を加えることの重要性があると考えている。社会参画への意欲や態度の育成にあたっては、次の3つの視点が大切である。

① 社会的事象の確かな理解

よりよい社会を目指して取り組む人々を「参画するモデル」として取り上げる。実社会に生きる人々がどんな目的で、どんな願いをもって、どんな働きをしたのかなど、社会的事象の意味を理解することが大切である。

② 思考力・判断力・表現力

社会は、様々な働きが相互に関係し合って、課題を解決してきている。そのため、多面的に考える、人ごとではなく「将来にわたって」自分の関わり方を考えるバランス感覚をもって判断する、意見交換ができるといった能力を育む必要がある。

③ 社会的な見方や考え方

社会的事象の意味をとらえる見方、考え表し方、在り方を養うことによって、自分の社会に対する働きかけの在り方について見つめ直し、自分の在り方について考えることができる。協働への糸口を見つけ、かかわろうとする。

授業の中で「あなたにできることは」と拙速に答えを求めるのではなく、事実をしっかりと確かめ、自分たちのできることの効果や実現性を吟味し合う学習が、社会参画への意欲や態度の形成につながっていくのである。

(5) 「社会参画」へつなぐ対策

社会的な在り方を社会科学習で学び、それを「社会参画」につなぐことが、社会参画への意識の高まりとともに求められている。社会科学習では、これまで述べてきたように社会参画の活動そのものを含むものではないが、社会参画へのきっかけとなるよう「社会参画」につなぐことは重要なことである。ここでは、「社会参画」へつなぐ場となる対策を述べておく。

まず、「社会参画へつなぐ」きっかけとなる場の具体的な事例を2つ挙げておきたい。

① 各地で伝わる祭りは、地域の寺社を核に住民の手によって受け継がれており、地域住民にとっては季節の大きな楽しみであり、地域の芸能・芸術・食などの文化が融合した、いわゆる地域文化の宝である。祭りへの参加は、自らの文化を守り、継承することへの参画がある。このような事例からは、「社会参画」につなぐ活動を生むきっかけが考えられる。

② 近年、各地の道路沿いに「道の駅」が整備され、周辺の農家の人たちが、自分たちで育てた農産物を共同で置いている。そこには、地域の人、近隣の人、観光客等の人たちによるにぎわいがあり、参画する姿がある。このような事例についても「社会参画」につなぐきっかけとなる活動が存在する。

以上2つの事例を具体的に述べたが、このような事例以外にも次のような「きっかけ」となる事例

が考えられる。今後の実践の中での取り組みが望まれるところである。

- 行政の機能へのきっかけとして
 - 一人暮らしのお年寄りの世話
 - 子どもの地域での育成
 - 河川、河川敷、道路、公園の清掃や除草
- 公共の機能へのきっかけとして
 - 伝統文化の継承
 - 古民家、町並みの保存
 - ごみの収集
 - 地産地消の推進
 - 地域の特産品の発掘・調査・販売
 - 住民の安心・安全
 - 自然環境の保全
 - 地域の祭り・行事 など

IV 「教科書活用による社会科授業の日常化」のために

～地域の特色をもつ「社会認識をひらき教材とつなぐ」指導計画づくりによる～

「教科書活用」は、教科書の記述内容の順序に従っての活用ではない。社会認識をひらく内容と教材をつなぎ単元の学習として認識する中で教科書が活用できる。社会認識をひらく内容が教材とつながり、具体性を伴うより確かな認識をした内容としてとらえられる。この教材は、教科書だけでなく、特に「地域教材」が重要となる。全国共通の社会認識の内容としてではなく、「地域の特色をもった認識」としたいのである。このような指導計画を作成することは、社会認識をひらくことと教材をつなぐことが成立しているかどうか見極めつつ「指導と評価の一体化」の学習が要件となる。

そこで、まず、「指導と評価の一体化」についての考えを述べ、次に「地域の特色をもった認識」の指導計画の作成にふれたい。

1 「指導と評価の一体化」による社会科授業の日常化

(1) 思考力を育てる評価の在り方

① 求める評価観

学習評価は、学校における教育活動に関し、子どもたちの学習状況を評価するものである。学習評価には、目標に準拠した評価（観点別学習状況の評価と総括的にとらえる評価）、相対的評価、個人内評価がある。このうち目標に準拠した評価のうち「**形成的評価における学習評価**」を研究することとする。とりわけ、子どもが思考と表現の一体化による活動を展開する構成主義的学習観に立ち、「再構成の学習」を図る中で、この評価の研究を進めていく。

子どもたちが、知識や技能を学び、受容していくだけでなく、子ども自らの課題に基づき、知識を再構成し、生きて働く知識や技能として学んでいくことが求められている。教師の指導の結果を評価する学習評価ではなく、評価規準に基づく形成的な評価と子ども自身が自分の学びや成長を自己評価することとを一体化することが、構成主義的学習観に立つ評価なのである。

また、「つまずきをなくす」ことが目的の学習評価ではなく、「つまずきを教師と子どもが共に生かす学習」を目指したい。そこでは、つまずきを教師と共に子どもたちが協働して自覚的に克服しようと活動する姿がある。そこに、子どもたちは、自分の進歩、考えの変わったこと、自分で何ができるようになったか、まだまだできないことは何かなどを自己評価するのである。

このような評価観に立つ学習評価を進める上で有効な「評価方法」として、次の2つを挙げたい。

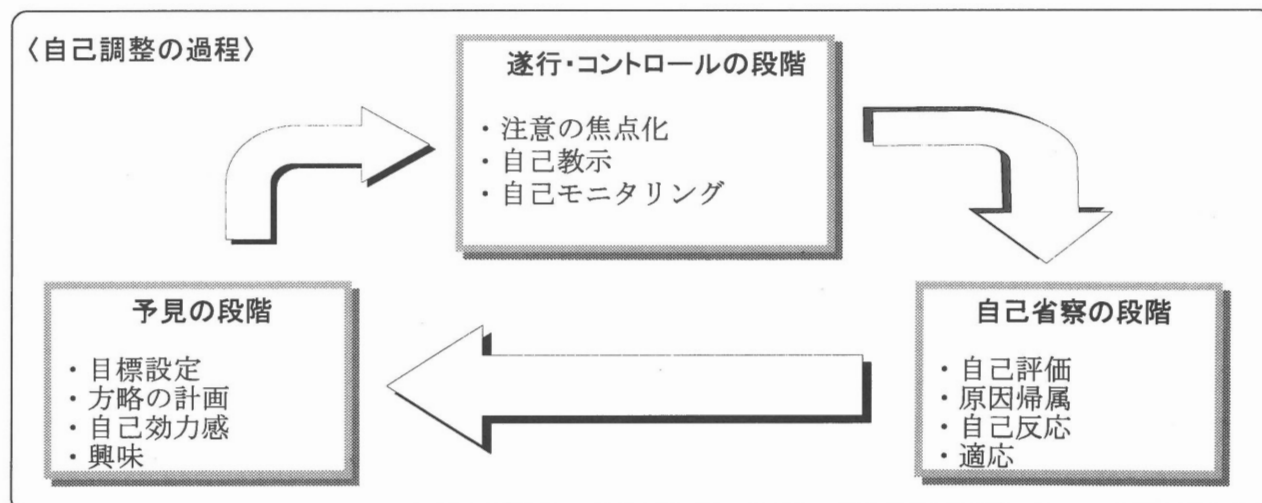
① パフォーマンス評価法

パフォーマンス評価法とは、目標として知識・技能を活用する力を位置付け、パフォーマンス課題とルーブリックを用いて評価する方法である。

② ポートフォリオ評価法

ポートフォリオ評価法とは、子どもの学習活動の過程や成果などの記録や作品を計画的に集積したファイル等を保存・活用して、子どもの学習状況を評価する方法である。

② 学習評価を「自己調整」の過程でとらえる



「再構成の学習」は、学習を認知や情動といった個人的な過程だけでなく、人、環境、行動が相互に関係し合って展開するとしている。このように、学習を認知や情動の過程としてとらえることの上に、人と人とのかかわりや学校・家庭・地域、教育情報資料などの環境や体験、奉仕活動、社会参画活動などの行動の過程としてとらえる学習を構想している。

そして、このことを学習評価の研究にあててみると、評価は学習過程における「自己調整」を図る過程としてとらえることができる。すなわち、結果主義の評価ではなく、学習の過程における「過程主義」に立つ評価であり、このことを自己効力感を高める「自己調整」の過程としてとらえたい。

自己効力感とは、一定レベルの行動を遂行したり、獲得したりする能力に関する信念である。それは、人がある事態に対処する際、それをどの程度効果的に処理できると考えているかという認知を重視し、一定の結果へ導く行動を自らやれるという期待を抱く自覚を生じる自信のようなものをさす。

さて、この「自己調整」についてであるが、「自己調整」とは、目標到達を目指し、思考や感情、方略行動を自らが引き起こし、自己の内面を組織的、計画的に機能させていくことを指している。そして、自己調整は、図に示すとおり、「予見の段階」「遂行・コントロールの段階」「自己省察の段階」の3段階の循環的プロセスにより行われる。

③ 自己評価で大切にしたいこと

- 認知面と情意面が一体となった自己評価が効果的である。
- 自己の語り、日記、ポートフォリオなどが動的資質を繰り入れた自己内省の練習に役立つ。また、ふり返りシートも役立つ。
- 自己評価には、認知的自己評価と情意的自己評価があり、子どもが自ら知識や技能を身に付けたり、獲得した知識や技能を積極的に生かすには、「関心・意欲・態度」のような情意面が基盤として育つことが大切である。
- 自己評価は、自分自身の学習過程について意識化し自己強化することを促し、自己調整を図っていく。

④ 「自己調整」の過程を社会科ノートに

ア 授業改善の視点

現在、学力は、知識や技能にとどまらず学習意欲、思考力、判断力、表現力等を含むものという考え方をし、その育成を重視した授業づくりが重視されている。

そのためには、次のような視点からの授業改善を行っていききたい。

- 通知表や指導要録の評定のためにだけあるのではなく、授業の中での形成的評価として機能させるまた、評価は知識・技能といった見える学力だけでなく、思考力等見えにくい学力も評価対象にできるような評価方法を開発する。
- 学習内容だけの評価ではなく、学び方(学習方法)についても評価を考えていく。

イ 「見える学力」の評価

「内容知」における「見える学力」とは、主に都道府県名、主な山地、河川等の名称、歴史的事象等の社会的事象についての知識・理解といった学んだ結果身に付いた知識であり、これはペーパーテスト等で測りやすい。このような基礎・基本の事項の理解の上に立つてこそ、その教科ならではの思考が可能になることは明白である。

ウ 「育てたい力(見えにくい学力)」の評価

その一方「育てたい力」としては、その子ならではの「基礎・基本の内容」が挙げられる。これは、その子の学習過程での発言や表現物から、その子の思考の流れを読み取り確実に「定着」しているかどうかを見取るわけであるから、テスト等では簡単には測れないものであろう。

また「方法知(学習力)」については、まさに「育てたい力」である。

学習力には、論述力、討論力、論理的思考力、問題を追究したり解決したりする力などがあるが、それ自体、数値化が難しい。これらの力は、ポートフォリオやグループエンカウンター、ポスターセッション等を体験していく過程で、しかも教師の適切な指導のもとに身に付いていく力でもある。

社会科授業では、自ら主体的に調べ、調べたことを効果的に表現し、表現と思考の連続によって社会的事象の本質について考え、深めていく力を育てていくことを大切にしたい。そのためにも、「見えにくい学力」の評価の評価法として、「ポートフォリオ評価法」や「パフォーマンス評価法」があるが、ここでは、授業評価として、パフォーマンス評価法を取り上げたい。

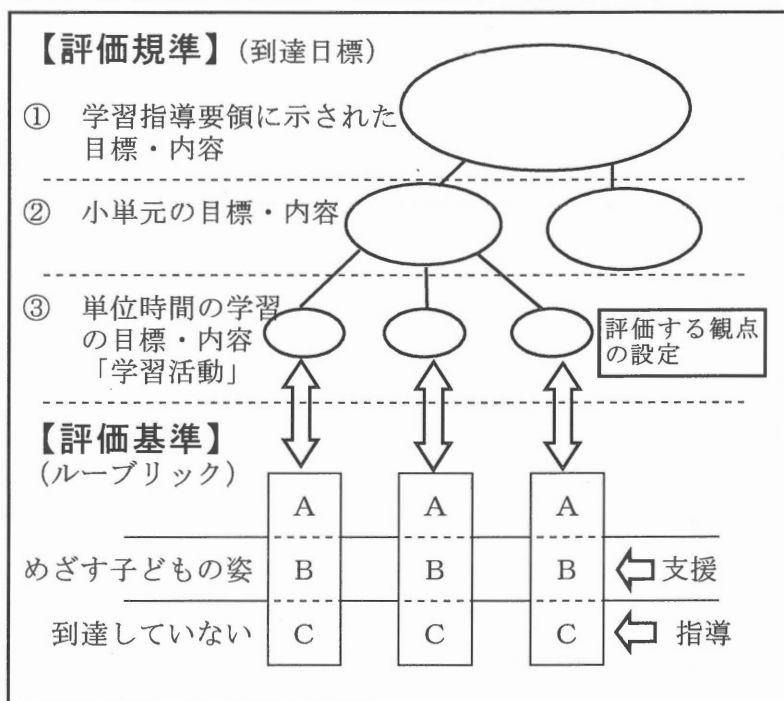
パフォーマンス評価は、パフォーマンス課題に基づく子どもの思考や技能を実際の授業場面で子どもが発揮することを捉えて評価するものである。例えば、小論、レポート、絵や図表、思考図、討論、演技、表現物としての作品などを評価する。ここで課題は、パフォーマンス課題である。

パフォーマンス課題は、小単元の学習の見通しがもてる内容と思考・表現を描くことのできる課題でなければならない。単なる学習問題、学習課題では、このことの研究は深く追究できない。それと同時に、「指導」と「評価」の統一で示された評価基準の設定による評価は、具体的には、ルーブリック(評価基準)が大切になってくる。

ルーブリックとは、パフォーマンス課題に対する子どもたちの認識の質的な転換点に基準を合わせて評価の指標を段階的に設定する試みである。ルーブリックの研究実践を積んでいくことにより、より精度の高いルーブリックが作成され、到達目標の明確化による確かな学力の形成がなされるのではないかと考え、今後ルーブリックの開発を行っていきたいと考える。

⑤ 学習活動と評価基準(ルーブリック)

また、必要に応じて単元の中での学習活動に即した評価基準を設定するとともに、それらを授業場面の中で、どのような評価方法により評価するのか



を具体的に示すことが必要になってくる。特に、思考力・判断力・表現力の評価については、できる・できないというようなドメイン的な評価では、子どもの見取りはできず、それに対する指導も難しい。

この時に必要になってくるのが評価基準（ルーブリック）である。子どもの思考の様相を予想し、それに対する指導を用意しておくことにより、結果としての評価ではなく、授業場面で子どもへの支援・指導を行い、意図的に思考力・判断力・表現力を伸ばすことができる。つまり、形成的な評価であり、過程としての評価である。

⑥ 社会科ノートを生かした自己評価

自己調整を図っていくためには、自己評価を単元を通して行っていく必要がある。子どもたちが日常的に使っているノートで自己評価ができるよう、次の頁の図のような評価カードの開発を昨年度より行ってきたが、今年度も継続していきたいと考えている。特に、本研究主題では、子どもが自ら主体的に学ぶ姿を大切に考えている。そのためには、自己調整しながら学習していくことが何よりも大切であるとこれまで述べてきたが、その学びを支える活動の一つが、この自己評価であり、今後も大切にしていきたい。

自己評価で「自己調整」を図る（高学年用）（例）

自己調整の過程	わたしの「すてき」カード		よくできた ◎	だいたいできた ○	もつとがんばる △
予見の段階	①目標設定	学習のめあてをもてた			
	②方略の計画	問題を解決する仕方の見通しをもてた			
	③興味	楽しく喜びをもって取り組めた			
	④自己効力感	自分のもっている力でやってのけられた			
	※各校でのめあて・観点				
	※コメント記入欄				
遂行コントロールの段階	①注意の焦点化	めあてに向かって集中できた			
	②自己教示	自分でよい資料を選ぶことができた			
	③自己モニタリング	自分の思いや考え方をノートに表せた			
	④自己効力感	自分で考えたことがうまく進んでいる			
自己省察の段階	①自己評価	自分の考えを表し、主張できた			
	②協働	仲間とのかかわりが深まった			
	③創意	自分らしい課題を見つけ、調べられた			
	④自己効力感	まとめたことに満足できた			

2 「単元構成」による指導と評価の一体化

(1) 単元の指導計画と評価計画の一体化 ー教科書教材の活用ー

評価規準については、平成22年5月に文部科学省から「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）」が出され、それを受けて、平成22年11月に国立教育政策研究所より評価規準の作成のための参考資料が示された。さらに、平成23年3月には、評価方法等の工夫改善のための参考資料が示され、具体的な事例を通して、どのように評価していけばよいのかという具体例も示された。

それらを受け、観点別学習状況の評価に係る最適の時期や方法を單元ごとに整理することが重要である。これにより、評価すべき点を見落としていないかを確認するだけでなく、必要以上に評価機会を設けることで評価資料の収集・分析に多大な時間を要するような事態を防ぐことができ、各学校において効果的・効率的な学習評価を行うことにつながると考えられる。

具体的な手順としては、従来作成してきた指導計画の中に評価計画を位置付けるようにする。どの時期に、どのような方法で見取っていくかということも明示する。また、パフォーマンス課題を明確に位置付けることによって、どのような道筋で思考と表現の一体化を図り、どのような思考力を育てようとしているのかをはっきりとさせる。それにより、教師がどのように指導していけばよいのかもはっきりとしてくる。

(2) 地域の特色をもつ「社会認識をひらき教材とつなぐ」指導計画作成による社会科授業の日常化

研究主題「社会的な見方・考え表し方・在り方の学びを社会参画につなぐ学習」の理論的な研究を踏まえ、社会科授業を日常化するよう実践するには、具体的な授業の姿が分かり、実践意欲を持つことができる指導計画の作成が急がれるところである。指導計画の具体的な姿としての作成については、本提案の最初に述べたが、ここで再度「指導計画」の全容を示しておく。

- ① 「内容・教材の構造」
 - ② 「目標」と「評価規準」
 - ③ 「単元構成」
 - ④ 「学習の構造」
 - ⑤ 「本時の学習指導」



「単元観」をもつ

V 今後の研究の方策

1 これまでの研究の成果(平成20～24年度)を踏まえた研究内容とする。

(1) 平成20年度

- 四国大会主題「社会科をひらき実社会に生きて働く教育の創造」
～内容知と方法知を探究するカリキュラムによる～
 - 研究図書「社会科ノート」による思考力の育成 出版
 - 研究誌 「社会認識の系統からみた社会科新単元構想」

(2) 平成21～23年度「社会科ノート」による思考力の育成

- 平成21年度 学ぶ意欲を高める学習の工夫

平成22年度 学習材の開発による個に応じた学習と集団と個のかかわり

平成23年度 学習評価を「自己調整」の過程からせまる

(1) 平成24年度

- 浅野大会主題「社会的な見方・考え表し方・在り方の学びを社会参画
につなぐ学習」
～教科書活用による社会科授業の日常化～
 - 社会科指導計画 作成

2 新研究主題による研究

- (1) 夏季研修会・支部研修会・定例研修会などによる
- (2) 郡市研究会・研究主題による

3 研究成果の刊行

- (1) 平成24年度～27年度にかけて

社会科基底単元による年間指導計画の冊子作成 ～実践編を入れて～

- (2) 研究成果の刊行～全国大会に向けて～

研究図書を刊行

[参考文献]

- 「授業改革と学力評価」 北尾 倫彦 図書文化社 2008 年
- 「子どもの思考力」 滝沢 武久 岩波書店 1984 年
- 「考える・まとめる・表現する」 大庭・コティ・さち子 NTT出版 2009 年
- 「学ぶ意欲の心理学」 市川 伸一 PHP新書 2001 年
- 「学習心理学」 辰野 千寿 教育出版 1994 年
- 「社会科ノート」による思考力の育成 香社研 東洋館出版社 2008 年
- 「社会認識の系統からみた社会科新単元構成(試案)」 香社研 2008 年
- 「自己調整学習の理論」 バリー・J・ジーマーマン, デイル・H・ジャンク編著 塚野州一編訳
北大路書房 2006 年
- 「自己調整学習の実践」 バリー・J・ジーマーマン, デイル・H・ジャンク編著 塚野州一編訳
北大路書房 2007 年
- 「自己調整学習と動機づけ」 バリー・J・ジーマーマン, デイル・H・ジャンク編著 塚野州一編訳
北大路書房 2009 年
- 「自己調整学習の成立過程」 伊藤 崇達 北大路書房 2009 年
- 「小学校学習指導要領解説 社会編」 文部科学省 2008 年
- 「社会認識教育の構造改革」 社会認識教育学会編 明治図書 2006 年
- 初等教育資料 3月号 「社会参画への意欲や態度を形成する教育の推進」 2012 年
- 「新しい公共を担う人びと」 奥野 信宏 栗田 卓也 岩波書店 2010 年 など

本年度総括 さぬき・東かがわ社研

研究主題

思考力の育成をめざした学習プランの開発
～教科書・副教材の活用による社会科学習の日常化～

1 研究主題について

本部会は、「思考力・判断力・表現力の育成」という観点から社会科学習を見直す。特に、公民的資質の基礎を養うために日本人としての自覚をもって国際社会で主体的に生きるとともに、持続可能な社会の実現を目指すなど、よりよい社会の形成に参画による資質や能力の基礎を養うことを柱にしながら社会事象を課題意識をもって多面的にとらえ、分析・整理・総合して問題解決する力を育成する学習プランの作成をめざした。

サブテーマを「教科書・副教材の活用による社会科学習の日常化」としたのは、教科書・副教材の分析により基礎的基本的な事項と内容の確実な習得。さらに教科書・副教材を活用して社会的な見方や考えの技能を身に付けさせるための社会科学習を日常的に行うというねらいがあるからである。

〈本年度の具体的な研究内容〉

- (1) 教材開発について（教科書・副教材活用）
- (2) 資料活用と児童の表現活動の関わり（社会参画の意識・思考が見えるノート作り等）6月27日
- (3) 思考力の育成と児童の表現活動の関わり（言語活動について）11月21日

2 研究の実践

- (1) 第1回研究会 6月27日 会場 東かがわ市立引田小学校

① 研究授業 4年 単元名 「ごみの処理と利用」

授業者 東かがわ市立引田小学校 教諭 原井 和彦

本時の主張点

ア 教材開発について

東かがわ市環境衛生課よりペットボトルがごみ袋にリサイクルされるという情報を授業の切り口として用いた。さらに昔より現在の方がごみ。さらにごみが増えているという現状を押さえながら学習に入った。

イ 資料活用と児童の表現活動の関わりについて

自然災害も想定してごみの量の移り変わりもグラフや写真などから認識させた。それを基に分別するとごみが減るという思考を考えさせ、どのような分別が可能かを思考させ、ノートに表現させた。特に本時ではサイクル図を利用し、分別するとリサイクルが可能になることを全員に理解させたかった。

また、自分たちにもできる分別方法を提案させ、社会参画の態度の育成につながるような学習を展開してきた。

② 研究討議

ア 見学を核にし、ごみを身近に考えられる単元構成であった。

イ ドイツや上勝町の事例を出し、分別すると資源が確保されることを理解させていた。手間やコストはかかるが、いろいろな資源を生むことはできるので、東かがわ市ももう少し分別を増やしてはどうか、という考えの下、自分たちにもできることを思考させるということは社会参画にもつながる。

ウ どの部分をどうすれば「さらに分別」なのか。児童にももう少し具体的な見通しがあれば話し合いが深まったのではないかと。

エ 教師や児童の立ち位置がやや不明であった。普通はさらに分別しようという意見は出にくい。今回の課題として、例えば「東かがわ市の〇〇さんは全てのごみを一袋に入れています。〇〇さんに分別してもらうために、市の職員として何を言いますか。」など、立場を明確にさせてもよかったのではないかと。

③ 指導 さぬき市立長尾小学校 教頭 亀井 健男

ア 教材開発について

- (ア) 分別の方法について比べるポイントが絞られていたので分かりやすかった。ただ、分別せず今のままの方が楽と言った児童の根拠は何をもってそう思ったのか吟味してみる必要がある。具体的につかませた方が感覚的に分かりやすいと思われる。
- (イ) サイクル図は分別する、しないの2つに分かれていたが、さらにそれぞれのプラス面とマイナス面が書き込める4分割の図でもよかったのではないかな。この方が見落としている点を発見できる。
- (ウ) 社会参画につなげるために自分にできること考え、環境衛生課に訴えるプレゼンがあれば児童は力を発揮しやすい。

イ 教科書活用について

- (ア) 教科書には生活に生かす問いが記載されている。それをうまく生かしてほしい。

ウ 学習評価について

- (ア) 単元の中で、節目の部分において適格に評価計画をしっかりと立てておくことが大事である。必然性のある場面で作られた表現物などを活用したい。

(2) 第2回研究会 7月24日 会場 さぬき市立志度小学校

香小研社会科部会夏季研修会での提案検討会。

① 演習 単元名 「第3学年 学校のまわり」

提案者 志度小 教諭 藤澤 大地 大内小 教諭 柴田 奈緒 中央小 教諭 増田 奈々
引田小 教諭 原井 和彦 三本松小 教諭 白澤 一修

② 内 容

夏季研修会へ向けて提案内容を部員で検討を行う。学校のまわりを学習する際に3年生という実態を踏まえ、どのように展開できるかをグループで検討した。その後、藤澤 大地作成状況を発表し合い、共通理解を行った。

(3) 第3回研究会 11月21日 会場 さぬき市立中央小学校

① 研究授業 6年 単元名 「新しい日本 平和な日本」

授業者 さぬき市立中央小学校 教諭 増田 奈々

本時の主張点

ア 教材開発について

教科書の資料や年表などの資料を現在の様子と比較しながら学習問題を作り、戦後20年余りで東京オリンピックまで行ったことや技術開発などの高度成長期を支えてきた人々の願い迫る授業を行った。さらに、家庭でのインタビューを通じて当時の様子が身近に感じられるようにしてから調べ学習を行った。

研究討議

- ア 当時の様子をイメージできる写真や資料をもっと用意したい。
- イ インタビューの内容を精選し、ゲストティーチャーの活用も行いたい。
- ウ 教師が教えるところが多かったので、児童の思考が働く場面が必要である。
- エ 「短い言葉でまとめる。」「キーワードを見つける。」がどの教科でも生きる活動であった。
- オ 教科書の文章と写真をつなげると時代背景が膨らんでくる。
- カ これまでの学習過程が分かるノートがほしい。

③ 指導 さぬき市立長尾小学校 教頭 亀井 健男

- ア 本時で「昔の人の気持ちを考える場」があった。インタビューしてきたことと、今の自分たちの生活などを比較しながら、年表や国交関係を押さえながら考えると活動があるとよかった。
- イ 2020年の東京オリンピックはどういう位置づけかを考える。例えば、スポーツを通しての経済復興、高齢化社会の日本、途上国への国際的援助などをオリンピックやパラリンピックを通して取り組みを世界へアピールする。
- ウ ノートを板書と同じようにとれると思考がつながりやすい。特に板書では、児童の思考操作ができるようなところがあるとよい。意欲 → 思考 → 評価とつながるように展開していくと同時に、ところどころに矛盾や疑問に突き当たる場を設けると効果的である。

1 研究主題

「子どもが自信を深める授業をつくる ～板書計画と子どもの反応の実証による～」

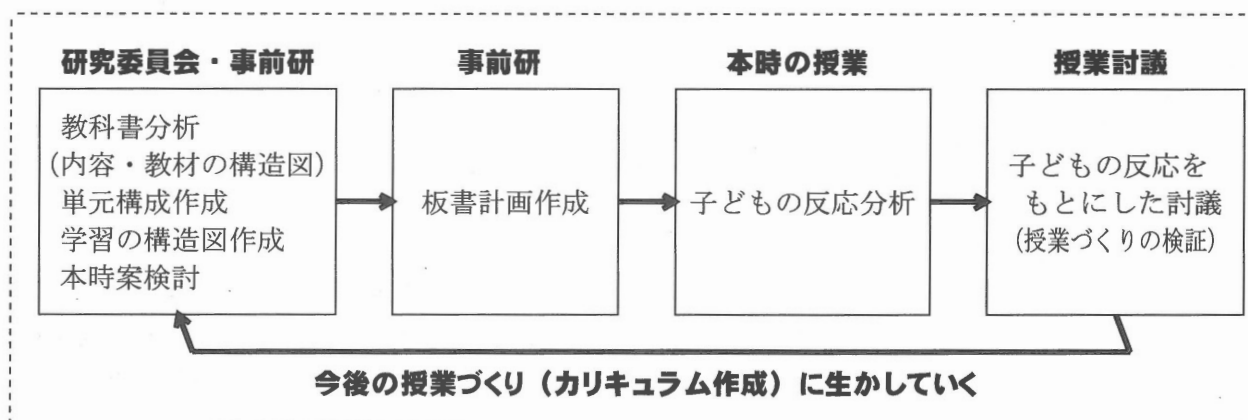
2 本年度研究の概要

(1) 研究主題について

昨年度は、「社会科の内容・方法の再構成の学習をふまえた「社会科ノート」づくり」をテーマに、サブテーマを「教科書活用による社会科授業の日常化」として授業実践に取り組んだ。そして、各ブロックのどの実践においても、新学習指導要領の内容の改善に示された授業や、これまでの市社研が積み上げてきたプランの切り口を変えた実践が展開できた。

また、これまでの研究内容を継続しつつ、日々の社会科の充実を目指して、どの先生もが取り組めるような社会科にするために、内容や方法を再構成し、「教科書を活用した」授業研究を進めていった。ただ、昨年度の事前研修会や授業討議においては、内容・教材の構造、学習の構造、単元の展開方法などについての研修が中心になり、授業における子どもたちの反応から研究を深めていくことは十分ではなかった。

そこで、本年度はこれまでの理論研究を踏まえた上で、より実践的な研究を深めていくために、本年度は研究テーマを「子どもが自信を深める授業をつくる」、サブテーマを「板書計画と子どもの反応の実証による」とし、授業研究において板書計画を作成した上で、それを切り口に授業づくりにおいてどのような課題があったのか、今後どのような改善を図っていけばいいか、といった具体の授業に焦点を当てた研究を以下のような手順で行っていった。



(2) 研究活動

日時	活動	内容
4月18日	教科主任研修会	本年度の運営、研究、各種事業の計画等 各ブロックごとに授業研究、研究討議 鬼無小実践提案 板書づくりワークショップ 分科会Ⅱ提案(植田小、大野小実践提案) 各ブロックごとに授業研究、研究討議 東植田小実践提案
6月13日	市定例研修会①(教科研)	
6月22日	香社研定例研修会①	
7月24日	夏季研修会(市)	
7月26日	夏季研修会(県)	
10月30日	市定例研修会②(教科研)	
11月9日	香社研定例研修会②	

3 研究実践について

第1回定例研修会 平成25年 6月13日(木)
第2回定例研修会 平成25年10月31日(木)

今年度は北、南の2ブロックに分かれ、下記の通り毎回4本の実践を行っていった。第1回の教科研では、偶然にも単元が重なったこともあり、その単元をどのようにつくっていくかということをも市社県全体で検討し、深まりのある実践を行うことができた。

また、実践の概要を見ても分かるように、第2回の教科研では教科書をどう活用するか、そして地域教材にどうつなげていくかということについて議論を深めることができた。

		授業者	単元名	実践の概要
第1回 教科研	北 ブ ロ ッ ク	鬼無小学校 大奥 洋介	3年「校区から高松市のようすへ」	高松市の絵地図に、古い建物や施設の絵カードを付け加える構成操作を行い、児童の認識を現状を学ぶ社会認識から歴史認識へと広げていった。
		木太南小学校 府中 恵子	3年「校区から高松市のようすへ」	これまで点でしかなかった校区から、道路や電車等の交通機関を意識することで線としてつながり、市全体を意識できるように学習していった。
	南 ブ ロ ッ ク	植田小学校 藤澤 香居	3年「校区から高松市のようすへ」	ペープサートをつくることを通して、土地利用の様子だけではなく、その土地に暮らす人々に目を向け、地域への誇りと愛情を持てるようにした。
		大野小学校 花房 祐史	3年「校区から高松市のようすへ」	高松市の様子を概観した後で、再度校区を焦点化し、「じまんマップ」に校区を取り入れることで、郷土に対する誇りを持ち、校区に対する愛情を育てた。
第2回 教科研	北 ブ ロ ッ ク	古高松南小学校 上枝 浩司	3年「店ではたらく人」	教科書のスーパーと地域にあるスーパーの工夫についてカード操作を通して比較し、地域のスーパーならではの工夫に気づくことができた。
		弦打小学校 大西二美予	4年「きょう土をひらく」	教科書教材の学習を通して、地域の発展に尽くした先人についての学び方・調べ方を習得し、それを生かして地域教材を探究していった。
	南 ブ ロ ッ ク	東植田小学校 窪田 啓伸	4年「きょう土をひらく」	典型材による基礎・基本の習得と地域教材における問題解決学習の連続を図り、地域の開発・発展について調べたことを「絵物語」に表現した。
		檀紙小学校 松本 隆	4年「きょう土をひらく」	教科書教材の学習でつかんだ学び方をもとに、檀紙の地域教材「彦四郎」の調べを通して、人々のみまや焼きに対する思いや願いを考えていった。

4 本年度の成果

- (1) これまでの理論研究を踏まえた上で、より実践的な研究を深めていくために板書を取り上げ、授業研究の際には板書計画をもとに話し合うことで、具体的に児童の姿をイメージしながら研究を進めることができた。
- (2) 昨年度に引き続いて単元構成を工夫して、児童の意欲が継続していくように、単元の中でも「問題をもち、見通しをもつ」段階で単元の学習問題を児童とともにつくり、学習計画も共有しておくことで、見通しのある学習を行うことができた。

5 本年度の課題（来年度の方向性）

- (1) 今年度の後半の研究では、「教科書をどう扱うか」ということについても検討された。ただ、単元の中で教科書教材と地域教材をどのように組み立てて単元構成を行っていくか、ということについては、来年度以降も研究を深める必要がある。
- (2) 板書に焦点を当てて実践的な研究を行ったが、評価についてはあいまいなまま実践を行ったために、十分に共通理解することができなかった。来年度じっくりと研究していく必要がある。

1 研究主題

社会認識と社会に関わる力を育てる学習
～基礎・基本を習得し、思考力を育てる社会科学習の在り方～

2 本年度研究の概要

(1) 研究主題について

小学校社会科の学習は、「地域社会や我が国における人々の社会生活を広い視野からとらえ総合的に理解することを通して、公民的資質を養う」ことをねらいとしている。「社会生活」とは、社会との関わりの中での人々の生活のことであり、地域の地理的環境や組織的な諸活動の様子などとともに、我が国の国土の地理的環境や産業と国民生活との関連、我が国の歴史的背景などを含んでいる。

社会生活について多面的・多角的な社会科の見方を深めることが「広い視野からとらえ総合的に理解する」ことであり、社会的な見方や考え方・表し方を深め社会人としての在り方を求めることが「公民的資質を養う」ことである。公民的資質は、社会的な見方や考え方・表し方を関わり合わせ、社会参画につないでいくことによって、養うことができると考える。

これらのことから、社会科部会では「社会認識と社会に関わる力を育てる学習」を研究主題として、学習の中で「基礎・基本の習得」と「思考力の育成」の充実を図っていくこととした。

先に記した社会生活を構成する要素を「社会的事象」として、社会的事象との関わりを通じて情報を集め、整理して、自分なりの解釈をすることのできる学習の実践を行った。その際、社会的事象をとらえる観点と方法が重要であると考えた。そして、知識・技能のみならず、意欲、思考力、判断力、表現力等を含めた「基礎・基本」の定着を図る学習を構築し、その上で、社会的事象との自らの関わり方を考える力を育てていくことを目指した。

(2) 研究活動

日 時	活 動	内 容
平成25年4月30日(金) 5月30日(金)	事業計画 第1回授業研究	組織づくり・研究テーマ・年間計画立案 第6学年「天皇中心の国づくり」 授業者 土庄町立土庄小学校 霧羽美緒教諭
7月6日(土)	香社研定例会	第4学年「きょう土をひらく ～坂本養川と太田典徳～」 提案者 小豆島町立苗羽小学校 高木浩彰教諭
7月26日(金) 9月24日(金)	香小研夏季研究会 第2回授業研究	第1回研究授業をもとにした提案 第4学年「ごみのしよりと利用」 授業者 土庄町立四海小学校 渡辺裕子教諭
平成26年2月15日(土) (随時、数回)	社会科フォーラムカップ 編集作業	第2回研究授業をもとに実践交流にてパネル発表 副読本「わたしたちの郷土 小豆島」改訂版編集

3 研究実践について

※ 第2回授業研究 第4学年「ごみのしよりと利用」から抜粋

(1) 単元構成 (◎：各次の目標、○番号：中心となる活動や内容)

第1次	身の回りのごみや処理について調べ、話し合うことで、学習の計画を立てよう。 (3時間) + 校外学習 ◎小豆島のごみ処理の現状について調べ、学習問題をつくる。 ①総合学習でゴミを分別したことを思い返し、ゴミがどのように処理されるのかに関心をもつ。 ②埋め立て地の見学と、横浜市と小豆島のごみの量の変化の比較から、小豆島はゴミの量が減っていないことに気付く。 ③昔と今のごみ処理の方法を調べ、分別することで埋め立て地のごみを減らしたいという思いをもとに、学習課題を作る。
第2次	クリーンセンターとリサイクルセンターを見学しごみ処理の方法や働く人の願いを調べたり、それぞれのよさやこれからの課題について考えたりしよう。 (本時5/5時間) + 校外学習 ◎2つの施設を見学し、ごみ処理の仕組みや工夫、働く人の願いなどを仕組み図にまとめ、話し合いからこれからのごみ処理についての考えをまとめる。

	①教科書や処理施設の資料を読み、2つの施設の様子を概観し、見てきたいところや質問したいことをノートにまとめたり、調べたいごみを決めたりして、見学の計画を立てる。 ②見学してきたことをもとに、自分が調べたごみの処理の仕組みを仕組み図で整理する。 ③仕組み図に働く人の工夫や思いを書き込む。 ④自分が調べたごみ処理の方法を発表し合い、それぞれの施設のよさや課題をノートに整理する。 ⑤焼却施設や再生施設のよさや課題を、小豆島の埋め立ての現状と関連づけながら話し合い、これからのごみ処理についてノートに自分なりの考えをまとめる。
第3次	環境を守り、これからもくらしやすい社会を続けるために、今、自分にできることを考えよう。(2時間) ◎ごみ減量の取り組みを調べ、自分たちにも協力できること、参考にできることを考える。 ①ごみ減量化に積極的に取り組んでいる県の、ごみを減らすための市民の取り組みを調べ、ノートに整理する。 ②調べて分かったことをもとに、ごみを減らすために何ができるかを考え、話し合う。
第4次	環境にやさしい小豆島にするためにできることを考え、ポスターを作って家庭や学校に呼びかけよう。(3時間) ◎環境にやさしく、資源を有効に活用できる小豆島にするために、調べたことをポスターにまとめる。 ①これから先も、住みよい小豆島にするために、家庭や学校に伝えたいことを話し合い、整理する。 ②自分が取り組んできた活動をもとに、ポスターを作り、お家の人に発信する。 ③資源の節約や有効利用を呼びかけるポスターをごみ置き場に掲示し、地域の方にごみの減量を呼びかける。
到達度評価	小豆島はごみの処理方法が、焼却と再生の2種類あることが分かった。ごみの分別に心がけている人が多くいる中で、一部の人はまだリサイクルに対する意識が低い。わたしたちが大人になったころも、いつまでも美しい小豆島であってほしい。わたしたちが地域に住む一人として、これからも分別を心かけた生活をしていきたい。

(2) 思考と表現を深める中心方策

① 第6学年「天皇中心の国づくり」

聖徳太子の目指した天皇を中心とした争いのない国づくりをとらえるため、三角図を用いて太子の取り組みに込められた思いや願いを探ることにした。

「比較」段階は、家庭学習で調べておいた聖徳太子の業績の情報カードを、太子の思いに着目して類別し、図の下段に置いた。「関連づけ」段階では、分けた理由や業績に対する聖徳太子の共通する思いを考え2段目に書くようにした。自分の考えをもとにグループで分けた理由を話し合った後、まとまった意見をカードに記入し、学級全体で交流した。カードに共通する言葉を見つけてキーワード化した。「統合する」段階では、挙がってきたキーワードをもとに、三角図の中央上段に聖徳太子が目指した国について自分の言葉でまとめた。

② 第4学年「ごみのしやりと利用」

調べて見つけた処理方法や工夫、働く人の願いを2つのごみ処理施設の仕組み図にまとめることで、各施設の処理の長所と課題がとらえられやすくなるようにした。その上で、短冊カードを用いて、調べたことを類別、整理した。

これらにより、ごみを出す側の意識を変えることの大切さに気付くとともに、ごみ処理における課題を自分のこととして考えられるようにした。

4 本年度の成果

三角図や仕組み図、短冊カードなどを用いて比較・関連づけすることで、思考の過程と結果を視覚化できたとともに、思考そのものと社会認知を深めることができた。

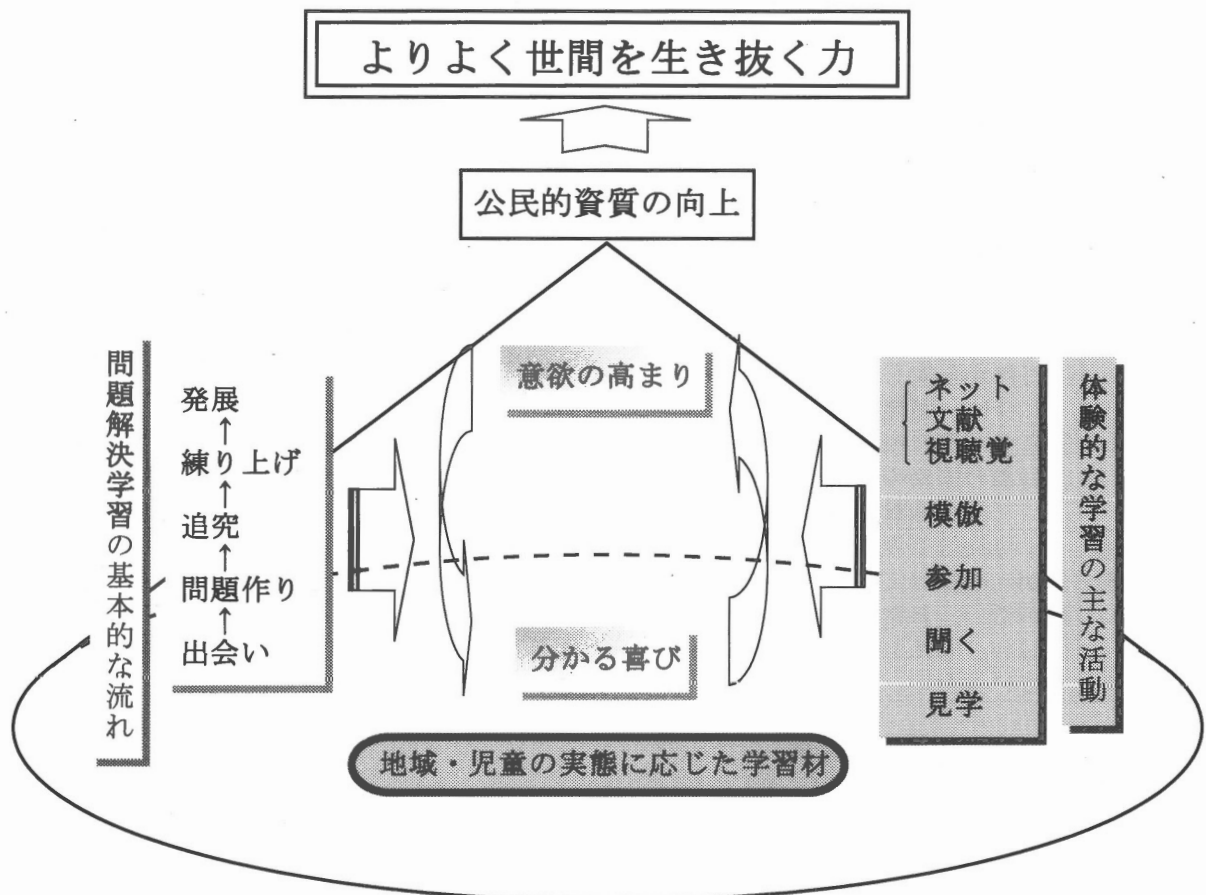
5 本年度の課題(来年度の方角性)

比較・関連づけの素材となる社会事象を、学習のねらいに則してとらえることができるようにすること。そのために、調べる活動の内容や構成を考える。

1 研究主題

分かる喜びを実感できる社会科学習の展開
—体験的な学習・問題解決的な学習の充実を通して—

2 本年度の研究の概要



(1) 研究主題について

体験的な学習は自然体験，社会体験，生活経験が不足し，人とのかかわる力が不足している現代の子どもたちにとって，新鮮で楽しさの期待できる学習になる。これは学習する意欲の源であり，学ぶ力の源でもある。

そして，問題解決的な活動を取り入れた学習は，課題を追究していく中で，一人一人の疑問が解決したときに「そうか，そういうことか。」「よし，できた。分かった。」という喜びを感じることができる。

体験的な学習や問題解決的な学習を充実させることにより学ぶ意欲を高め，思考力，判断力を育てることを目指している。

坂・綾社研で目指す児童像

- 社会的事象に驚きや疑問を感じ，意欲的に追究することができる児童
- 既習の基礎・基本の事柄や内容を使って，話し合ったり発表したりすることができる児童
- 調べたことを根拠にして，比較したり，様々な立場から考えることができる児童
- 問題解決に必要な資料を収集・活用するとともに，考えをノートにまとめることができる児童

(2) 研究活動

日にち	場所	研修会名	内 容	参加者
3月上旬	坂・坂出小	事前検討会	25年度の役割分担・計画	研究部
4月17日(木)		坂綾小研総会	25年度の組織作り	坂綾全員
6月7日(金)	坂・林田小	坂綾小研教科研	研究授業Ⅰの事前研修会	坂綾全員
6月28日(金)	坂・林田小	坂綾小研教科研	研究授業Ⅰ	坂綾全員
7月5日(金)・13(土)	坂・坂出小 他	夏季研分科会事前検討会	夏季研分科会の事前打ち合わせ	研究部
9月19日(木)	綾・宇多津北小	定例会事前研	定例会事前打ち合わせ	研究部
9月28日(土)	坂・勤福センター	香社研定例会	定例会提案発表	香小研社会科部員
10月11日(金)	綾・綾上小	坂綾小研教科研	研究授業Ⅱの事前研修会	坂綾全員
10月24日(金)	綾・綾上小	坂綾小研教科研	研究授業Ⅱ	坂綾全員
12月22日(木)	坂・坂出小	研究フォーラム事前検討会	研究フォーラムの役割分担等	研究部
1月20日(金)	坂・附属小	研究フォーラム事前検討会	研究フォーラム事前打ち合わせ	坂綾全員
2月15日(土)	坂出附属小	研究フォーラム	研究フォーラム発表	香小研社会科部員
3月上旬	坂・坂出小	事前検討会	26年度の役割分担・計画及び夏季研究会への事前打ち合わせ	研究部

3 研究の実践について

授業研究Ⅰでは、「減少していたサワラの漁獲量が、なぜ1998年以降増えてきたのだろうか。」という学習問題で授業を展開した。ICTを活用しサワラの漁獲量の変化の原因を追及していく授業であった。瀬戸内海に関する11府県の協力により漁獲量が増えたことを思考させていく授業であった。また、過去の先輩教師の優れた実践を再試行する提案性のある授業であった。

授業研究Ⅱでは、「用水が完成する途中の3年間はどのようにして工事が進まなかったのだろう。」という学習問題で授業を展開した。久保太郎右衛門の年表と地図を活用することで村の人々と太郎右衛門の業績を捉えていくことができた。児童に問題意識をもたせるために郷土の発展に力を尽くした先人への資料の選び方、提示の仕方等、大変参考になる実践授業であった。

4 本年度の成果

(1) 板書計画の工夫ができた

香社研の研究の視点「授業づくりの基本を学び合う」の方策の中から、「板書計画に基づく授業づくり」に重点をおいて教材開発を進め、子どもの思考の流れを明確にするための板書構造の工夫を行った。事前研修会では、板書構造を検討することで提示資料の精選をしたり思考が深まる明示的板書へと修正していったことができた。今後も、板書構造と指導計画の継続研究を行っていきたい。

(2) 問題解決学習の工夫ができた

「なぜだろう。」「どうしてだろう。」という思いにさせるような資料を提示するよう心がけた。授業を展開していく中では、追究意欲を持続させるような補助資料を提示したり、五感に訴えるような資料や体験活動を取り入れるようにした。まとめの段階には課題を解決できるための資料や新たな課題とさらなる意欲が生まれるための資料を提示するようにした。

(3) 体験の取り入れ方の工夫ができた

体験を取り入れることで意欲を高め、主体的な学習ができるようになる。しかし、児童に問題意識がなければ、体験を取り入れても何も残らない。体験前後の手だてを用意し、体験したことから学習が始まったり、体験を単元展開の途中における問題解決に使ったりするように心がけた。

5 本年度の課題(来年度の方向性)

今年度は板書計画を核として研究を進めてきた。2つの研究授業では地域の教材を開発することで、切実性のある問いをもたせることができた。また、事前の検討会では、優れた実践を再試行することで問題点が明確になった。来年度は平成27年度の夏季研究大会に向けて、研究実践の積み重ねや研究大会に向けての組織作り等大変重要な年度になってくる。日々の実践の積み重ねと研鑽に会員一同努めていきたいと考えている。

研究主題

自立と共生を育む社会科学習

2 本年度の研究の概要

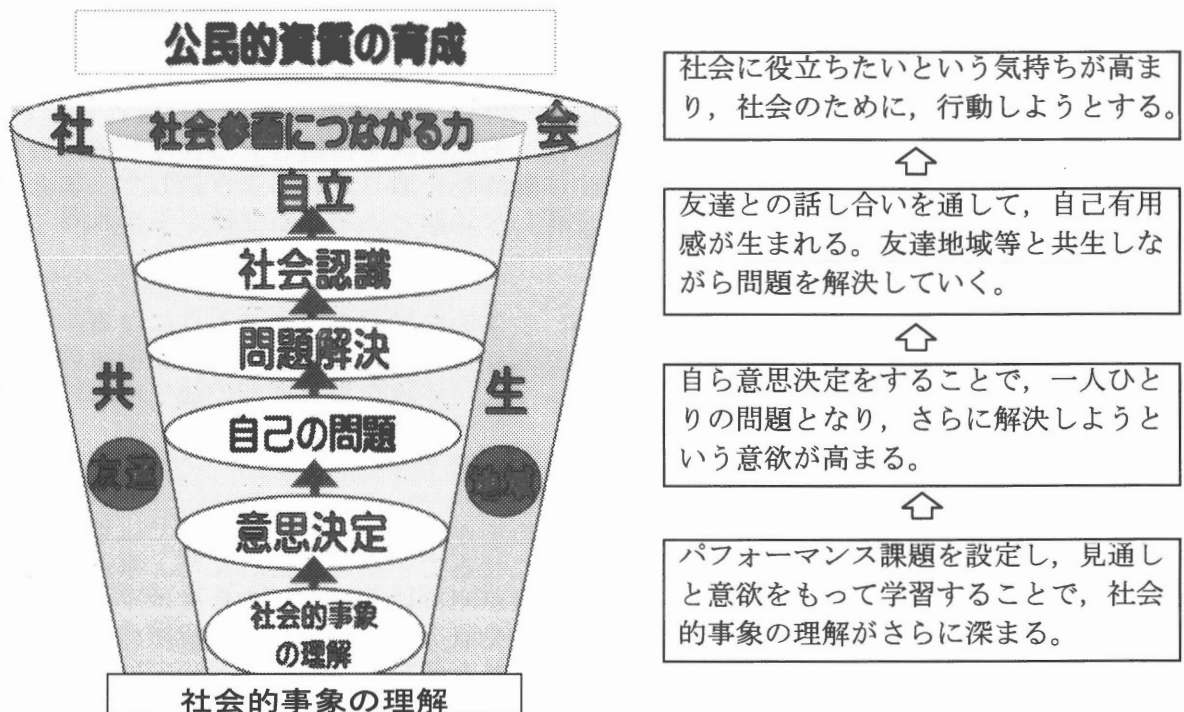
(1) 研究主題について

これからの時代をたくましく生き抜くためには、小学校段階から社会科を通じて、生涯を通じて学び続ける力、自分の頭で考える力及び他者との協働の中から新しい価値を見出していく力を身に付けていくことが望まれている。丸亀市小学校教育研究会社会科部会では、社会的事象に関する基礎的な知識や概念、技能を身に付け、自分の考えをもち（自立）、他者との協働を通じてよりよい社会を形成しようとする態度（共生）を社会科教育で身に付けることが大切であると考えた。

「自立」とは、自己形成すなわち自分づくりであり、自分の目標を明確にもち、それに向かって自ら意思決定しながら学習を進めることである。「学習」を個と集団の学び合いとするなら、まず個が課題を追究し、更に協働し、共感的に問題解決をしていくことが重要である。自立をめざす上で意思決定の場を効果的に取り入れることにより、自分のこととして課題をもつことができる。十分に社会的事象に対する理解を深め、自ら意思決定をすることで、自己の問題を再構成する状況が生まれる。意思決定することにより、自分で決定した満足感、新しい知識による再認識に対する充足感を子どもたちは感じるだろう。こうした学習経験を重ねることで、子どもたちに自己有用感を育てていくことが必要であると考えた。

「共生」とは、個と集団の学び合いの中で新しい価値を見付け、社会参画への意欲をもったり、みんなと協力して行動したりすることである。言い換えると、社会や他の人から必要とされていることを感じながら、力を合わせて共に生きていこうとする意思や態度を培うことをめざしていきたいと考えている。

「自立」の過程において、社会認識・知識・概念等、基礎的な基本的な事項及び内容を踏まえ、意思決定を行い、さらに、社会の一員としての自覚をもって参画していこうとする「共生」の意識を育てていきたいと考え、研究主題を「自立と共生を育む社会科学習」とした。



(2) 研究活動

日 時	会 場	研 究 内 容
4月17日	城東小	研究組織づくり, 研究主題決定, 年間計画作成, 夏季研勉強会
5月8日21日	飯山南小	丸小研事前勉強会 6年生「天皇中心の国づくり」
5月28日	飯山南小	丸小研事前研修会 6年生「天皇中心の国づくり」
6月 5日	飯山南小	丸小研研究授業 6年生「天皇中心の国づくり」 授業者 丸亀市立飯山南小学校 教諭 乗松 直樹 指導者 香川大学教育学部附属高松小学校 教諭 黒田 拓志
6月	各学校	夏季研事前勉強会(各学年部会別)
6月15日	市民会館	夏季研事前打合会
7月12日	郡家小	夏季研事前勉強会
7月25日	市民会館	夏季研準備
7月26日	市民会館	夏季研実践発表 3年「のこしたいもの つたえたいもの」 提案者 城乾小 教諭 小野咲枝 4年「特色ある地域と人々の暮らし」 提案者 城西小 教諭 平田晃司 5年「自然災害を防ぐ」 提案者 垂水小 教諭 寒川英樹 6年「わたしたちの願いを実現させる政治」 提案者 飯山北小 教諭 櫻井道芳
11月7日14日	郡家小	丸小研事前勉強会 5年生「情報化した社会とわたしたちの生活」
11月18日	郡家小	丸小研事前研修会 5年生「情報化した社会とわたしたちの生活」
12月4日	郡家小	丸小研研究授業 5年生「情報化した社会とわたしたちの生活」 授業者 丸亀市立郡家小学校 教諭 増井 泰弘 指導者 香川大学教育学部附属高松小学校 教諭 渡部 岳史
2月10日	郡家小	研究フォーラム事前研修会
2月15日	付属坂出小	研究フォーラム

3 研究実践について

研究授業 <第5年「情報化した社会とわたしたちの生活」>

ー現代の社会問題を捉えての教材開発ー

本単元は、新学習指導要領において新しく取り上げられた『情報化した社会の様子』について扱うものである。ここ数年「仲間外し」や「ネットいじめ」などの問題が上がっている。社会科には、社会の変化に対応しながらたくましく生きていく子どもを育てるという大切な役割がある。将来児童がケータイ等を利用する際、「知識基盤社会」を生き抜く力を育む上で、本単元の学習は大変重要である。「スマホ18の約束」など、自立や共生を育むための有効な資料を提示することができた。

さらに、資料から自分の考えをもち、KJ法による有効な話し合いの場がもたれた。

研究授業 <第6学年「天皇中心の国づくり」>

ー意思決定の場を有効にするための学習材の提示ー

意思決定させるには、児童がおのおのの考えをもつことが必要である。本時では、児童が多面的に考えをもてるよう、資料を多く提示した。また、児童にとって理解しやすい漫画も資料として用いた。その結果、児童一人一人が自分の考えをもち、意思決定に臨むことができた。参加不参加をめぐる話し合いの中で、天皇・行基・民衆という三者の立場から、誰もが自分の住む国を豊かな国・いい国にしたいという願いをもって行動したことに気づくことができた。

4 本年度の成果

- 丸小研社会科部会は長年、「自分づくりの社会科学習ー基礎・基本の定着と問題解決能力の育成ー」を研究主題・副主題にしてきた。「自分づくり」の過程は、社会科の究極の目標である公民的資質の基礎を養うことである。今年度より、研究主題を「自立と共生を育む社会科学習」とすることで、自立の部分「判断・意思決定の場」や共生の部分「社会参画」に視点を置いた研究がさらに進められてきている。

5 本年度の課題

- 研究主題「自立と共生を育む社会科学習」をめざし、自立の部分「判断・意思決定の場」や共生の部分「話し合い」「社会参画」に視点を置いた研究がさらに進められるようにしたい。その際に、丸亀市全体で取り組んでいる小中連携の観点からも検討を深めていきたい。
- 意思決定の場面では、児童が意思決定を本当にしたいかどうか、意思決定の場が不自然でないかなど研究していく必要がある。

1 研究主題

個が育ち、生きる社会科学習の創造
～考える力を育てる社会科学習をめざして～

2 本年度研究の概要

(1) 研究主題について

社会科の目標は、「公民的資質の基礎を養う」ことである。三観社研では、2000年度から公民的資質の基礎を養うとは、「経験」に照らし合わせながら、自分なりに物事を考え実践することのできる意思決定の主体を育成することだと考えてきた。このような意思決定の主体を「個」と定義する。そして我々は「公」と「私」のベストバランスを考えながら意思決定できる「個」を育てたい。本年度もこの『個』をいかに育てるかについて継続研究をしていきたいと考え、授業でその姿を模索し、研究を進めてきた。

研究の方向 「考える社会科学習」 ～ 考える内容と考えさせるための問い ～

社会科の研究は内容教科であるべきなので、研究の方向は考えさせる手順や方法でなく、何を考えていくかである。その授業作りの根底は教材研究により単元観を確立させることである。

また、「考える社会科学習」を具現化する視点として、問いと知識を大切にしてきた。考える場面は問いで始まり、知識で終わる、追求意欲が高まるような切実性のある問いを作ることで子どもたちは主体的に学習が進められる。そして授業後に得られる知識が社会科の本質をつくものでなければならないと考えた。

研究の視点 「考える社会科学習を支えるもの」**「切実性のある問い」の研究**

- 切実性をもたらす教材とは何か
(教材と教材とのズレ、教材と子どもの意識のズレ等)
- 切実性のある問いを持たせるための学習過程
(確かな事実認識をさせる、子どもと子どもの意識のズレを生じさせる)

単元観の確立をめざす教材研究

- 単元観を確立していくために必要な3つの作業
(学習指導要領の分析・社会的事象の分析・児童の実態分析)
- 単元観を確立していくために必要な視点
(育てたい子どもの社会認識を核とした教材研究)

(2) 研究活動

日 時	活 動	内 容
4月18日	三観社研運営委員会	三観社研の研究・運営について
5月11日	三観社研総会	三観社研の組織・運営について
6月19日	三観小研社会科部研修会	授業研究 3年「市のようす」
7月26日	香小研社会科部夏季研修会	提案発表 6年「武士の世の中へ」
10月19日	香社研定例会三豊集会	提案発表 3年「市のようす」
10月29日	三観小研社会科部研究発表会	授業研究 4年「ごみのしよりと利用」
1月11日	三観社研冬の研修会	実践報告 4年「ごみのしよりと利用」
2月15日	香社研社会科フォーラムカップ	実践交流 4年「ごみのしよりと利用」
2月27日	三観社研運営委員会	三観社研今年度の反省と次年度構想

3 研究実践について

(1) 4年「市のようす」の実践より

本単元では、航空写真と地図をつなぎながら地形や土地の利用などの学習を行った。校区内の地図と、市の白地図をつなぐなどの活動を通して、地図の見方に気づいたり、「鳥の目を」を意識したりする力を培っていくものであった。2つの地図を上手につなぎ合わせ、つなぎながら発表することによって空間認識が生まれてくると考えた実践であった。

問いの切実性という面からは、子どもたちの経験を生かし、その経験を軸にした授業展開が有効であった。具体的には、校区を市の白地図に位置づけようとしたとき、子どもたちの認識には曖昧なところがあり、その曖昧さによって生まれる子どもたち同士の考えのずれをもとに、問いの切実性を高めることができた。子どもたちの問いに対する切実性が高まったことにより、子どもたちは真実を知りたくなるとともに、調べる対象が明確になってきた。

子どもたちの主体的な学習活動が展開された実践であった。

(2) 6年「武士の世の中へ」の実践より

これまでの実践を見ると、源平の戦い、鎌倉幕府の始まり、元との戦いの三つの歴史的事象を単発的に指導する傾向があった。この単元を一つのストーリーとして展開していくために、棟梁と武士団、土地の様子を読み取らせその関係性を問うていくことが、児童の意識が流れる単元構成ができるのではないかと考えた実践であった。

問いをつくる場面では、石橋山の戦いから4年後の一ノ谷の戦いの間に頼朝軍の軍勢が6万人にまで増えている、この事実に対する驚きから、問いがつくられたことにより、問いの切実性が高まった。

考えを発揮する場では、仁尾小版マインドマップ(予想)を使い、資料から読み取ったことを交えて班や全体で考えを練った。最後に問いを検証して知識を獲得した。

予想からまとめまで児童の意識が途切れることなく流れた実践であった。

(3) 4年「ごみのしよりと利用」の実践より

今回の実践では、学習指導要領の第3学年及び第4学年の内容(3)を達成するために、内容の取扱い(5)に書かれている『廃棄物の処理にかかわるきまり』を取り上げ、ごみ当番が地域の人々の健康な生活や良好な生活環境の維持と向上に役立っていることを考えた。

本実践では、単元観を確立していくために必要な視点として、社会的事象のつながりに重きを置いて教材研究を行った。子どもたちは、ごみ当番を知っているが、ごみ当番の中身を知らない。しかし、ごみ当番を行うことによって、分別収集のきまりを知り、家庭でも分別の方法が変わり、徐々に資源化率は向上していること知る。こうした身近なごみ当番と資源化率とのつながりから、社会的事象と自らの関わり方を考え、自分たちもきまりを守って、効率的に資源化しようとする意欲を高めることができた。

事前に行った保護者アンケートでは、ごみ当番をできるならしたくないが、ごみ当番は必要であるという意見が多かった。そこにあるずれをもとに問いの切実性を高めていくことができた。

本時では、児童の市民の一員としての自覚を高めるために、市民の分別意識を高め、分別収集を進めるゴミ当番を教材化した。家庭での分別の意識が変わることがごみの減量化につながることを学び、分別の意欲化につなげていく実践であった。

4 本年度の成果

- 単元観を確立するために、学習指導要領・社会的事象・児童の実態を総合的に分析することができた。それにより、単元観の確立が図れている。
- 子どもが共通体験している社会的事象を取り上げることにより、子どもたちの意識を深めることが明確になった。
- 「切実性のある問い」の成立には、教材と児童の意識のズレが効果的であり、子どもの知的な好奇心を高めることができる研究ができた。

5 本年度の課題(来年度の方角性)

- 単元観を確立するための教材研究をすること。また、この単元・本時では何をつかませたいのかははっきりと持っておくことの必要性を感じた。

1 研究主題

人間の営みに学び、広い視野を育てる社会科学習の展開

2 本年度研究の概要

(1) 研究主題について

今回の学習指導要領（平成20年）の基となっている教育基本法は、平成18年に約60年ぶりに改正された。その前文には「公共の精神を尊び、豊かな人間性と創造性を備えた人間の育成」「伝統を継承し」「我が国の未来を切り拓く教育の基本を確立」といった社会科で培うべき内容の文言が新たに加えられている。このことから、社会科の担う責任は大きく、社会科の学習を通して、豊かな人間性と創造性を備えた人間の育成をしていかななくてはならない。

そこで、仲善社研ではこうした「今求められている力」を「子どもたちが社会を構成する人と人のつながりを理解し、広い視野に立って社会的事象の意味や人間の行為の在り方を考えること」であると捉え、今年度も上記の研究テーマを設定した。

このテーマの下、実践研究を行うことで社会科の目標である公民的資質の基礎が養われ、創造的に未来を切り拓くことができる子どもが育つのではないかと考えている。

そこで、本年度の研究内容は、以下のように設定した。

- ① 人間の行為に焦点をあてた教材研究
- ② 創造性を育てる単元構成
- ③ 社会的事象の意味をつかませる板書の工夫

(2) 研究活動

日 時	活 動	内 容
4 月 25 日	香小研仲善支部総会	組織・運営について
6 月 11 日	香小研仲善支部社会科部研修会	授業研究 3年「市の様子」 授業者 竜川小学校 教諭 小山 裕子
7 月 26 日	香小研社会科部夏季研修会	提案発表 5年「考えよう日本の米づくり」 発表者 榎井小学校 教諭 三谷 恵
11 月 5 日	香小研仲善支部社会科部研修会	授業研究 4年「満濃池を開発した先人たちの働き」 授業者 満濃南小学校 教諭 石井 英樹

3 研究実践について

(1) 人間の行為に焦点をあてた教材研究

三谷実践では、庄内平野の米づくりを通して日本の米づくりを考えさせるために、身近な地域の農家の見学を取り入れた。体験やインタビューを通して米づくりに生きがいを感じている人と出会うことで、農業の課題を身近に感じ、共有化し、自分に出来ることを考えようとする子どもの姿が見られた。その経験が、遠く離れた庄内平野の米づくりの学習においても意欲化を図り、その経験とつない

だ認識が単元の終末まで続いたことは、米づくりの明るい未来を考える学習において、農業を何とかしたいと農家の人の立場で考えようとする子どもがたくさんいたことからもうかがい知ることができる。

石井実践では、西嶋八兵衛の修理した満濃池が220年以上も壊れなかった理由を、空海の修理した満濃池と比較することから探った。そして、西嶋八兵衛の知恵だけでなく、満濃池の修理に携わった多くの人々の協力や、その後19回もゆるかえの工事を行い満濃池を守った地域の人々に焦点をあてることで、満濃池に対する愛情や、先人の努力に誇りをもつ子どもたちが育ったのではないかと考えられる。

(2) 創造性を育てる単元構成

三谷実践では、単元を通して創造性を育てるために、問題把握の場面から調べ活動に至るまでの間の子どもの意識をつなぐ「予想」の活動をしっかりと位置付けた実践がなされていた。米づくりの現状を知り、「庄内平野ではどうして質の良いお米がたくさんとれるのか」「農家の数や作付面積が減ってきているのはどうしてか」といった課題について、各自で予想し、予想を交流し、予想を確かめるという一連の流れを繰り返すことで、子どもたちは、常に自分の考え（予想）と比べながら学習を進めることができ、そのことで自分の考えの正当性や、自分の考えの不十分さを認識し、世の中の仕組みの奥深さや面白さを実感することができたのではないかと考える。

(3) 社会的事象の意味をつかませる板書の工夫

小山実践では、単元を通して竜川校区と比較する学習を展開し、市の特徴を見ていく視点として「土地の使われ方」「建物」「交通」の3つに絞って考えさせた。板書では、左側に竜川校区の航空写真、絵地図、右側に中央校区の航空写真、絵地図を提示し、それぞれの特徴を3つの視点ごとに対比させながら板書し、同じ所は赤、違う所は青で囲み、視覚的にも分かりやすくした。そしてそれらの「違い」に注目させ、中央校区の特徴を明らかにするために、駅前の地図を提示し、中央校区は市の中心にあり、交通の便のよい駅の近くにはみんなの使う建物が集まっていることを発見させた価値ある授業であった。

4 本年度の成果

上記に示した実践（成果）の中で、特に、予想を大切にした「創造性を育てる単元構成」について、三谷先生の実践発表により、4月に提案した研究の方向に具体的な実践が結び付き、単元を通してどのように授業を流していけばよいのかということが見えてきた。次年度は、さらに実践を増やして、研究の妥当性を吟味し、よりよい内容に進化・発展させていきたいと考えている。

5 本年度の課題（来年度の方向性）

今年度も、若い先生方が中心となって実践してくださっているので、事前の研修会では、多くの実践をしてきた先生方の意見はもちろん、社会科が専門ではない先生方、新採の先生方など、それぞれの立場から思いつく疑問を投げかけ、みんなで議論した上で、授業者が指導案をつくって実践していける環境が理想である。事前研は2回行っているのですが、1回目は、単元観や単元計画等を話し合い、どのような授業を提案するかを決め、2回目は、1回目の話し合いを受けて授業者が考えてきた、本時案や板書について検討できるような研修会になればと考えている。次年度は、事前研にさらに多くの参加者が集まれるようにしていきたい。

香社研だよりvol.1

発行者 香川県小学校社会科教育研究会
香川県小学校教育研究会社会科部会
会長 徳田 仁 司
発行日 平成 25年 7月 6日(土)

香社研テーマ

社会的な見方・考え表し方・在り方の学びを社会参画につなぐ学習
～社会科授業づくりの基本を学び合う～

高松市社研テーマ

子どもが自信を深める授業をつくる
―板書計画と子どもの反応の実証による―

6月定例会 高松ブロック集会(於:ふれあい福祉センター勝賀)

実践提案 高松市立一宮小学校 瀧義幸先生
高松市立鬼無小学校 大奥洋介先生
第3学年 「校区から高松市のようすへ」

1 提案の主張

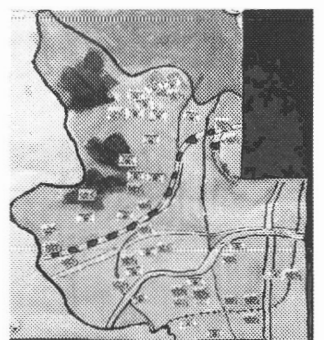
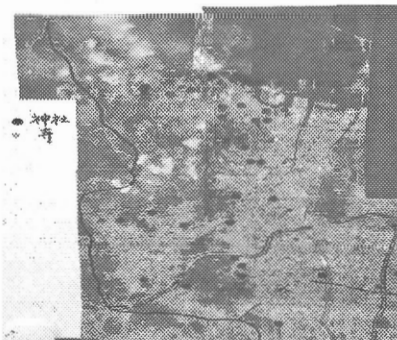
- ① 高松市の様子を表した絵地図に、昔から残されている古い建物などの絵カードを付け加える構成操作を行うことによって、児童の認識を現状を学ぶ社会認識から歴史認識へと広げる。
- ② 絵地図にぬられた土地の様子を表す色と、航空写真での実際の土地の样子の食い違いから、統一した規則の必要性に気づくようにする。

○授業の流れ

前時までに 東西南北のグループで古い建物などを調べ絵カードにして絵地図の中に貼る

本時 航空写真を見ながら 寺、神社、城跡のシールを 絵地図に貼る

社会認識から歴史認識へ



*西グループの例です

絵地図の様子と実際の土地の様子があわない

実際の土地の様子を画像で確認する



絵地図から地形図への移行の必要性

【成果】

- ・航空写真を見ながら古い建物カードを絵地図上にはる活動を通して、地図を見る技能の向上がみられた。
- ・絵地図と航空写真との違いから、地形図の必要性を感じることができた。

- ・寺や神社などの古い建物が高松市内各所にあることをつかむことはできたが、それを歴史認識につなげることは不十分であった。
- ・古い建物と人々の生活とのつながりを考えることによって、古い建物が残されている意味を理解することで歴史認識が深まるのではないか。

2 討議内容

- ・お寺、神社で歴史をひとくくりにしていいのか。石碑からつなげていくという方法もあった。
 - ・お寺、神社が集中している地域とそうでない地域があるが、市全体としてのまとめではなく、それぞれの地域を見ていくこともできた。
 - ・実際の画像と絵地図を比べて高低の必要性に入っていく方法は、とても勉強になった。
 - ・古い建造物は校区で扱いインタビューなどを通して子どもの思いを広げる。そこが基底にあって市の古い建物を学習すると効果的である。
 - ・子どもにどのように歴史に着目させたのか。
- 鬼無小学校は桃太郎神社の行事に子どもたちが参加している。総合で桃太郎神社を扱っているの、そこから鬼無小学校校区以外の神社へと子どもの関心を広げていった。
- ・神社、お寺では宗教になってしまう可能性がある。門前町、城下町、家並みなどを取り扱う方がよかったのではないだろうか。
 - ・絵地図への子どもの思いや願いを高めていく。情感たっぷりの気づきを支援していくといい。
 - ・地域のことをしっかりと深めて学習しておく。そして地域と比較することで考えを深めることができる。地域の法則性が市、県にもあてはまるのではないか、といった見方を育てていく。
 - ・この単元のねらいは地域によっての違いであるので、神社、お寺にしばることはいい方法だと感じる。3年生という発達段階を考えると歴史認識には限界があるから、この程度の取り扱い方が適当だと感じる。
 - ・思考操作の書き方のわかりやすさを研究していかないといけない。思考操作の先に社会認識、それを社会参画につなげていく。

3 ご指導

【1】東部教育事務所 池田 茂樹 主任指導主事

① 授業について

- ・基本は鬼無小学校の校区での学習になる。桃太郎神社からつなげていくのも一つの方法。
- ・子ども視点の古い建物を大切にする。
- ・位置だけでなく、由来なども含めて歴史認識が作られていく。そのためにも観察、調査できるものがない。

② 板書について

- ・黒板に課題を書いているが、十分ではないものがある。～しよう、ではダメ。何のために、どんなことをして、を課題に入れないといけない。
- ・子どもたちに先生の構想はわからないのだから、単元全体の位置づけを子どもたちにわかるようにしないとけない。
- ・くらべる、つなげる、まとめる、の意味のわかる板書を心がける。
- ・板書に根拠や解釈を入れる。
- ・社会事象を多面的にとらえるようにする。

【2】香社研OB、高松短期大学 講師 高橋 英式

子どもたちに何を伝えたいのか、をしっかりと考える。

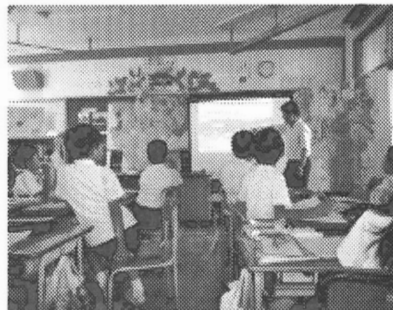
- ・細かい背景などを教材研究しておく必要がある。

世界で一流にならなければならない。

- ・日本の基準が世界基準になるようにする。

→しっかりとした「こだわり」をもった授業をつくる。

- ・博物館とそこの学芸員の方と一緒に授業を作る。



【編集後記】（香社研事務局）

今回は高松の提案でした。3年生の市の様子の学習で「歴史認識」を組み込み、さらにそこから土地の高低に着目していくという、学習指導要領の先を見据えた提案でした。討議ではたくさんの先生方から意見が出され、充実した会となりました。ご提案された高松社研の先生方、ご指導の池田先生、高橋先生、ありがとうございました。

香社研だよりvol.2

発行者 香川県小学校社会科教育研究会

香川県小学校教育研究会社会科部会

会長 徳田 仁 司

発行日 平成 25年 9月 28日 (土)

「社会認識を深め、社会に関わる力を育てる学習」

～基礎・基本を習得し、思考力を育てる社会科学習の在り方～

実践提案 小豆島町立苗羽小学校 高木浩彰先生

第4学年 「きょう土を開く～坂本養川と太田典徳～」

1 提案の主張

- ①教科書教材を再構成して活用することで、調べ方や調べる観点を学ぶとともに、基礎・基本となる社会的対象の意味や内容を確実に理解する。
- ②地域教材を学習していくことで、学習意欲が高まり、思考操作の過程の中で社会認識をより深める。
- ③単元全体を通して捉えた先人の働き、それに対する感謝の気持ちを手紙に書いたり、劇化したりすることを通して、社会参画につなぐための資質や能力を育てる。

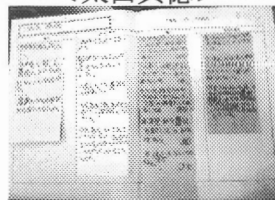
○授業の流れ

前時 用水やため池をつくった坂本養川（教科書教材）の業績を調べ、まとめた方法を手掛かりに、太田典徳（地域教材）のため池開発について調べ、「先人の働き」「苦労・苦心」「先人や農民の願い」「生活の変化」の4つの観点ごとにワークシートにまとめる。

本時 2人の先人のワークシートから共通点を比較・分類する。
＜坂本養川＞



＜太田典徳＞



見つけたキーワード

- ・農民を救いたいという強い思い
- ・用水（ため池）づくりを何度も嘆願
- ・先人への感謝の気持ち
- ・今も大事な水源 etc

先人が像や神社の神として称えられている理由を、4つの観点から文章にまとめる。

- ・どちらの先人も、水不足から農民を救おうと立ち上がり、昔の人たちの生活を向上させただけでなく、今現在も地域の人たちの生活を支えている。
- ・苦労と努力、強い思いでつくってくれた先人に感謝し、用水やため池を大切にしたり、先人の素晴らしさを多くの人に伝えたい。

【成果】

- ・太田典徳と蛙子池という地域教材を開発して授業を行うことで、農民のために立ち上がった先人がいる小豆島を愛する、誇りに思う心を大いに育成することができた。
- ・教科書教材から地域教材へと授業を展開することで、先人の働きが児童にとってより身近なものとなり、比較・関連することで社会認識をより深めることができた。

【課題】

- ・児童に身に付けさせたいことを教師が把握し、評価基準を明確にしておく必要がある。そうすることで、児童の思考活動をより深いものにすることができる。また、思考活動を工夫し、児童の思考がより明確に表れるようにすることが大事であった。
- ・6月15日の例祭日や、太田典徳を題材とした農村歌舞伎が上演される時期に本単元を学習することでより社会参画につなぐための資質や能力を高めることができたのではないかと。

2 討議内容

- ・4つの観点到らせたことで、観点別に先人の業績が調べやすくなり、児童の多様な意見を引き出すことができた。
 - ・教科書教材で、調べ方や調べる観点を学習することで、地域教材を学習する際にも見通しをもって学習することができていた。また、教科書と地域教材を比較することで、地域への愛情を深めることができた。
 - ・太田典徳に感謝の手紙を書いたり、業績を劇化したりすることで、社会参画につなぐための資質や能力を育てることができた。特に、社会参画の基礎を培う上で、直接に参加し体験したことは、高学年への意欲化につながると思う。
 - ・4つの観点は、児童・教師のどちらが設定したのか。
- 教科書の外観後、児童の疑問から4つの観点到らせた。

3 ご指導

- ・観点の洗い出しをする際、教科書教材は帰納的な方法で行い、さらに演繹的な方法で地域教材の観点を見つけていくとよい。
- ・現地への見学や地域を愛するゲストティーチャーと関わることで、地域とより深く関わるきっかけ作りになり、児童の郷土愛を深めることができる。
- ・教科書教材から地域教材へと学習意欲が広がり、地域へ目を向けることができた学習内容であった。

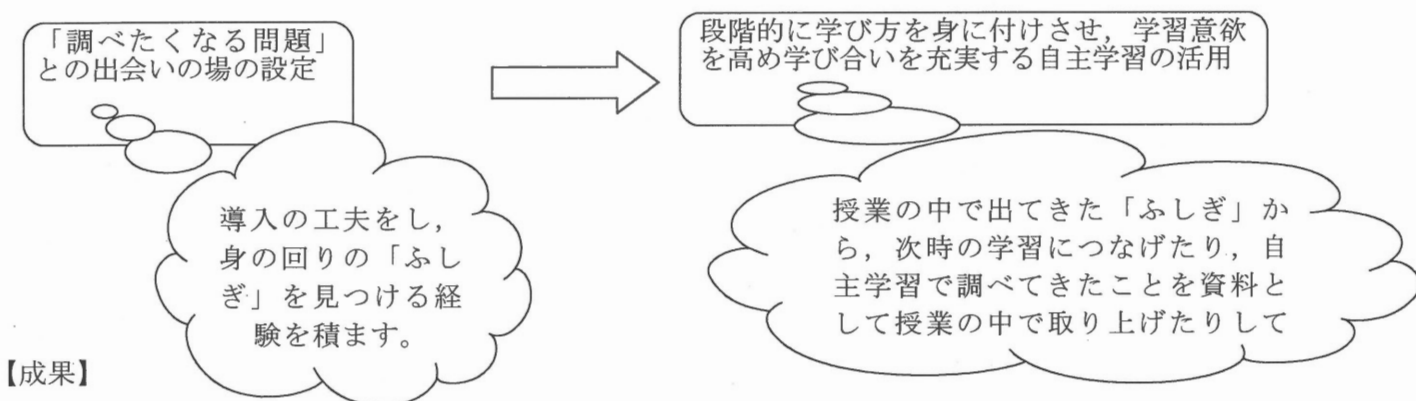
実践提案 さぬき市立志度小学校（実践時津田小学校） 松田章子先生

第4学年 「住みよい暮らしをつくる」

1 提案の主張

- 身の回りの「ふしぎ」を見つける経験を積ますため、導入の工夫をすることで、調べたくなる問題との出会いの場を設定する。
- 1時間の授業の中のみでなく、日常生活の中で新しく生まれた疑問をまた調べるという連続性を大切にするすることで、問題解決能力の育成につなげる。

○学習の流れ



【成果】

- ・自主学習は知識・理解の定着だけでなく、段階的に調査活動や表現物作成に取り組ませることで、思考力を高めることができた。
- ・子どもたちの調べたいという気持ちを導入でかき立てることで学習意欲が高まった。

- ・高学年になるにつれ、学習の対象が日本全体や世界へと広がるので、実際に見学することが難しい。学習意欲を継続するためにも、導入の工夫や新たな学び方を身に付ける必要がある。

【課題】

2 討議内容

- ・自主学習が苦手な児童に対して、どのような対応をしたのか。
→時間をかけて、ゆっくりと練り上げていくことが大切。児童の意欲につなげるためには、よいノートの紹介や、真似をさせてよさを広げるとよい。
- ・社会科以外で、自主学習を多様に活用できたか。
→社会科用の「自主勉強の手引き」を作成し、児童に提示した。他教科の手引きは作っていないが、社会科を見本に、他教科でも同様な学習ができた。社会科で自信をもち、他教科でも意欲的であった。
- ・自主学習には、量や時間などの制限を設けているのか。
→量の制限はない。学習量が少しであっても認めていくことで、児童の意欲につながった。
- ・自主学習をする上で大切なことは、①児童に学習方法を示し、学びの場を保障する。②家庭との連携である。

3 ご指導

- ・一人から、みんなにつながり学習ができている。自主学習を進めることで、書く力や、聞く力が伸びてきている。
- ・中学年は学習を通して、地域を好きになったり地域に住んでいることに喜びを見いだしたりする、ふるさとを愛する心を育てることが大切。そのため、社会的な事象を知る上で、直接参加が望ましい。

【編集後記】（香社研事務局）

今回は小豆とさ東の提案でした。両実践共に、活用段階で効果的に地域教材を組み入れ、社会的な認識を深めるご提案がなされていました。表現物を拝見し、改めて先生方のご丁寧な指導と、思考を深める手立てが大変勉強になりました。ご提案された両社研の先生方、ご指導の永坂先生、三井先生、ありがとうございました。

香社研だよりvol.3

発行者 香川県小学校社会科教育研究会
香川県小学校教育研究会社会科部会
会長 徳田 仁 司
発行日 平成 25年 9月 28日(土)

香社研テーマ

社会科的な見方・考え表し方・在り方の学びを社会参画につなぐ学習

～教科書活用による社会科授業の日常化～

坂綾社研テーマ

分かる喜びを実感できる社会科学習の展開

～体験的な学習・問題解決的な学習の充実を目指して～

9月定例会 坂出・綾歌ブロック集会 平成25年9月28日 於：坂出市勤労福祉センター

1 坂出綾歌社研で目指す児童像

- 社会的事象に驚きや疑問を感じ、意欲的に追求することができる児童。
- 既習の基礎・基本の事柄や内容を使って、話し合ったり発表したりすることができる児童
- 調べたことを根拠にして、比較したり、様々な立場から考えたりすることができる児童
- 問題解決に必要な資料を収集・活用するとともに、考えをノートにまとめることができる児童

これら4つの目指す児童像に迫るために、教師の工夫点として、①資料提示の工夫、②体験的な学習の取り入れ方の工夫、③ノートの充実の工夫の3つをあげる。

2 実践提案 提案者 宇多津町立宇多津北小学校教諭 橋本美穂 先生

(1) 単元名 5年「米づくりのさかなな庄内平野」

(2) 本実践の主張点

主張点1 「5の2米」を2学期に収穫するには何をすればいいのかを調べ、実践する。
(体験的な学習・問題解決的な学習)

第5学年の社会科では直接見たり、聞いたりすることのできない地域や事象を取り上げ、資料中心の学習を進めていくことが多くなる。そのことが社会科への関心や意欲を低下させる1つの要因になっているようである。さらに本校校区には、水田がほとんどなく、本単元の学習対象は子どもにとって遠い存在であるといえる。そこで、「5の2米を育てよう」を目標にバケツ稲栽培の体験を行う。

バケツ稲を育てるために何をすればよいのか？どんな世話が必要なのか？と課題をもたせる。そして、授業を通して解決したことを、またバケツ稲づくりに反映するという場を設定することで、分かる喜びを実感させたい。

主張点2 即時解決の手段としてのゲストティーチャー（問題解決の手段）

ゲストティーチャーを活用する授業は、教科を問わずいくつか参観させていただいた。講話をいただくことで、授業のねらいに直結する当事者の声が聞けて、リアリティと切実感が増し、子ども達の理解や納得度は深いものになる。

今回はそれに加え、実際に聞いて確かめたくなったことや、調べ発表を聞いて新たに湧いた疑問を解決する手段としてゲストティーチャーを活用した。

ゲストティーチャーの回答により、即座に得られた、リアリティある「そうなのか！」は分かる喜びをより大きくするのではないだろうか。



3 討議内容

- ・「農家の仕事が儲からないのになぜ続けているのか」との児童の問いにゲストティーチャーは、何と答えたのか。
- 農家の本音としては「田があるから」とのこと。それは伝えずに「米作りを周りの農家がやめていく中で、自分がやめるともっと米が減ってしまう。だからやめられない」と話してもらうようにした。
- ・バケツ稲でひとつずつ種もみをまくのはそれほど大変ではないが、田んぼでの米作りとなると大変な労力がある。そこで「何とかならないか」との疑問が生まれ、技術が高まる工夫等に迫っていけないのではないかと。
- ・庄内半島では、「はえぬき」を育てている。香川県の米と食べ比べてもおもしろい。
- ・社会参画というキーワードから、人との結びつきを自分の体験を通して比較・考えたりすることが大事と参考になった。
- ・子どもが切実な問いをもって、ゲストティーチャーから学びを取り込むのがとてもよい。
- ・本時は、教科書やゲストティーチャーの話が中心になって、体験や学びが埋もれてしまったのが残念。
- ・課題を焦点化して、本筋のバケツ稲と教科書の関連を見るなど課題に迫ることが大切なのでは。
- ・米作りを通して「国内生産」につないで、衰退していく農業を努力・工夫して行っているというのを繰り返し学習することが大切なのではないか。
- ・5年生では米作りを1地域のみ取り扱うだけでなく、香川の米作りと比較することで、社会条件に合わせてそれぞれの工夫があるという視点が必要。

4 ご指導

◇ 香川県教育委員会義務教育課主任指導主事 山内秀則 先生

農業を身近に感じられにくい宇多津北小学校の子どもに米作りを体験させたのがすばらしい。実物・本物を体験させるのが必要。以前、教科書に出ていた庄内平野の米農家の伊藤さんに会ったとき、「農業で伝えたいことは」と尋ねると、「とれるかとれねえかわかんねえ」と答えてくださった。そこには真実がある。本物を用意することは説得力がある。今後は、ゲストティーチャーが単元全体に関わる存在になることが大切。見えること・聞けることが大事であり、「なぜ農業なのか」「田んぼがあるから」これは重い言葉である。社会科は自分の中で完結するのではなく、仕組みを教え、大人の社会が見えるようにする意味を大切にすること。

思考には「比較」と「関係づけ」がある。意味を考えさせるには「関係づける」思考が必要。「比較」から特色の違いが見える。見えることを積み上げていく。すると、意味を考えるようになる。比較した点を統計で面にしていく。

今、子どもたちが「主体的に語る」ようになったが、その反面、手段が目的化してしまうマイナス面が見られる。教えねばならないことを教材研究して、伝えたいことにしていく。伝えたいことを学びたいことに広げていく。軽重をつけ、見通しと振り返りを充実し、言語活動とリンクさせていってほしい。

◇ 元香川県社会科教育研究会会長 唐木裕志 先生

コシヒカリは中世以降に作付けされた水田で、ヒノヒカリは近世以降に作付けされた水田で栽培されていることが多い。香川県でも最近やっと品種によって作付けするようになってきた。社会科の教材研究では、フィールドワークを大切にしたい。ネット世代には現実に直面した体験が必要。教師が教材研究したものは子どもに提供すべき。授業は、教材がネタバレ状態でしても差し支えない。じっくり教科書を読ませて授業をしても、子どもたちは新しい発見をして勉強ができるものである。資料を提示し、その中でどう学ばせるのか、教師は仕掛けを工夫する。そして、実践した教材は一式保管しておくことで必ず役に立ちます。社会科教師は、教材研究に力を入れていってほしいと思います。

【編集後記】

「バケツ稲」栽培体験を取り入れた実践で、子どもたちが課題意識をもつことができ、児童にとって切実性のある疑問がゲストティーチャーの活用により解決し、わかる喜びを実感できる実践だったと思います。実践発表をされた先生方、そして、ご指導いただいた、県教育委員会義務教育課主任指導主事 山内秀則先生、香社研OB唐木裕志 先生、本当にありがとうございました。

香社研だよりvol.4

発行者 香川県小学校社会科教育研究会
香川県小学校教育研究会社会科部
会長 徳田 仁司
発行日 平成 25 年 10 月 19 日(土)

香社研テーマ

社会的な見方・考え表し方・在り方の学びを社会参画につなぐ学習
～社会科授業づくりの基本を学び合う～

三観社研テーマ

個が育つ社会科学習の創造
～考える力を育てる社会科学習をめざして～

香社研 10月定例会三豊集会 平成 25 年 10 月 19 日(土) 於: マリンウェーブ

1 三観社研研究の方向(提案者: 観音寺南小学校 教諭 出演 大賀 先生)

考える社会科学習とは～考える内容と考えさせるための問い～

(1) 単元観の確立をめざす教材研究

① 必要な3つの作業

- 学習指導要領の分析
- 社会的事象の分析
- 児童の実態の分析

社会科は内容教科であるべきなので、研究の方向は、考えさせる手順や方法ではなく、何を考えさせるかである。

② 単元観を確立していくために必要な視点

- (ア) 社会的な事象のつながり (イ) 人間の生きる姿
- (ウ) 変化・発展の様子 (エ) 自分とのかかわり

(2) 「切実性のある問い」の研究

① 切実性をもたらす教材とは何か

サプライズ(驚き)から思わずその理由を考えたり、矛盾から問題を意識したりするような子どもの意識と教材の間にズレが生じるもの。

② 切実性のある問いをもたせるための学習過程

問いの切実性を高めるには、子どもの予想や考えがズレて真実が分からなくなった状態が必要である。その状態で、事実に基づいた根拠を出して交流することが学習過程として重要である。

2 実践提案(提案者: 観音寺市立一ノ谷小学校 教諭 合田 雅気 先生)

(1) 単元名 3年「市の様子」

(2) 単元観

土地の様子の特徴等をつかむためには、鳥の目線で大まかに捉えていくことが大切である。

(3) 本時について

① 地区の特色を生かした学習問題をつくる

本時では、観音寺市における一ノ谷地区の位置を予想させる活動を行う。その際に、子どもたちは「国道」「高速道路」「財田川」に着目し、一ノ谷地区を推測していこう。このような活動を通して、子どもたちは目印になるものをもとに位置を特定していく大切さを学ぶと考えた。

問いは、学習過程や得られる知識を決定するもので、重要なものである。この「問い」を「意欲をもって取り組む問い」にすることができたら、考えようとする意欲が高まる。

② 「市」と「地区」の地図をつなぎながら空間的認識を育む

本単元では、前単元の「学校の周りの様子」から「市の様子」へと空間が広がっていく。つまり、「鳥の目」を一段と高くもつ必要がある。そこで、常に既習の「地区」の地図を振り返り、「市」の地図に位置付けながら考えさせていく。

③ 問いの切実性に向けて

本時では、子どもの認識の曖昧さをつき、A 児の予想を取り上げて、子ども同士の考えのズレをもとに問いの切実性を高めようと考えた。

子どもの問題に対する切実性が高まれば高まるほど、子どもたちは真実を知りたくなるとともに、調べる対象が明確になる。それによって、子どもの主体的な学習活動が展開できるものと考えた。

3 討議内容

本会の討議は、ストップモーション方式で行い、授業の映像を見ながら参加者が合田先生の意図を知りたいと感じたところで止め、意見を頂いた。

討議の視点①：子どもたちの意識をいかに焦点化していくか。

討議の視点②：子どもたちが方位や地図をもとに理由を考えて、それらをいかに組織化するか。

※ →以下は、合田先生の話

<問いをつくる段階>

○ 観音寺市における一ノ谷地区の位置を予想したが、取り上げた児童の考えが正しい場合どのように展開するのか。

→ 3年生ならば真ん中を予想するだろうと考えていた。正解が出て構わず、そう考えた理由を説明できる方が大切である。

<児童が考えをもつ段階>

○ どの程度のことを、子どもたちは学んでいるのか。

→ 観音寺市の形の確認や山地や川が東西に流れている程度で、周りにどんな市町があるかは知らない。高速道路や国道はつかませている。

○ 学習問題に違和感があり、本当にそれを知らないのか。地図や写真をもっと子どもに渡して、全国→香川→観音寺と探させ、根拠を示していく方が大切なのではないか。本当に大切なのは、土地利用ではないのか。

→ 関係づけることをねらいとしているため、一ノ谷→観音寺→全国と広げていく。

<児童の考えを組織化していく段階>

○ 自分が授業者ならばどこで登場し、意見を組織化するのか。(合田先生より)

・ 情報が制限され過ぎており、理解している児童だけの空中戦にならないのか。町名や河川名の書かれている資料を提示し、それらをもとに話し合いを行うと、理解の遅い子も思考できるのではないか。

・ 本質は、土地の様子である。絵地図をもとに、看板ではなく、川や建物を根拠に話し合うべきではないか。

・ 絵地図を中心に写真等を根拠として話し合うとさらに意見を引き出すことができるのではないか。

・ 財田川がどれか分かっていないから空中戦になってしまったのではないか。財田川の発言が出てきたところで登場し、場所をおさえるべきだ。

→ 実際の授業では、予想外の反応がたくさん来るもので、自分の日々の指導をきちんと振り返る。公開するためには、子どもをきちんと創ることが大切であり、日々の授業で目の前の子どもを創ってほしい。



4 指導（指導者：観音寺市教育委員会 義務教育課 主任指導主事 小西 寛 先生）

① 教材化の本質

学校の周りから観音寺市全体へ、具体から抽象へのスモールステップになっている。超具体的な学習と言える。歩道橋への着目が素晴らしく、地区ではどこにあるか分かっているが、市全体での場所は分かっていない。地区のあらゆるものから選びぬいて、歩道橋に決定したことはさすがである。

② 問い

焦点化を可能にする問いであった。最終的にはっきりするし、方向もすっきりする。A 児の発言に対する二者択一から議論することから問いが切実になっていく点も大事にしたい。

③ 物の見方・考え方

歩道橋の場所を探る時点で、児童の思考は建物、川とめぐらせていた。様々な点から考えられている。思考を整理する時間が欲しかった。川の場所を確認する手立てや支援があると、児童の思考はさらに深まったのではないかと。

【編集後記】（香社研事務局）

誰もが見たことのある歩道橋を、自分たちで調べられる「学校の周りの様子」から地図や写真などの資料で捉えていかなければならない「市の様子」につなぐ教材として捉えた授業提案でした。大変勉強になりました。また、小西寛先生からは、教材化の本質、問い、ものの見方考え方を育てる指導の三点で講評をいただきました。香社研OBの岡根淳二先生からは、グローバル化というのは、欧米諸国に倣うことではなく、日本人らしさを捉えることである。そして、これからの10年がわれわれ社会科教師にとって夢とやりがいのある時代であって欲しいというお話をいただきました。実践発表、指導をしていただいた先生方、本当にありがとうございました。

香社研だよりvol.5

発行者 香川県小学校社会科教育研究会
香川県小学校教育研究会社会科部会
会長 徳田 仁司
発行日 平成 26年 2月 15日(土)

香社研テーマ

社会的な見方・考え表し方・在り方の学びを社会参画につなぐ学習
～社会科授業づくりの基本を学び合う～

高松市社研テーマ

子どもが自信を深める授業をつくる
～板書計画と子どもの反応の実証による～

11月定例研 高松南集会 平成25年11月9日(土) ふれあい福祉センター勝賀

実践提案：高松市立香南小学校 黒川 浩一 教諭 ・ 高松市立浅野小学校 水口 純 教諭

第4学年 きょう土を開く「四箇池に込められた先人の願いや働き、苦心を『ため池物語』に表そう」

(授業者：高松市立東植田小学校 窪田 啓伸 教諭)

1. 主張点

- (1) 教科書の典型材で学んだ観点とその内容を基に地域の教材を調べる学習を通して、典型教材における基礎・基本の学習と地域教材における問題解決的な学習の連続を図る。
- (2) 地域の開発・発展について調べたことを「絵物語」に表現する活動を通して、よりよい暮らしをつくっていかうとする人々の願いに支えられて開発は進んでいくことについて理解する。

2. 単元の流れ

第1次では、郷土に伝わる人々の働きや史跡などについて、「高松の今とむかし」から読みとって絵カードに表し、「ふるさと歴史年表」や「ふるさと歴史マップ」を作成する段階で、山田校区にある四箇池を位置づける。このことで、自分たちのふるさとと先人への関心を持ち、「ふるさとため池物語」を作成するという学習課題を作った。

第2次では、水に関係した坂本養川の取り組みを調べ、郷土を調べる際の観点や調べ方について理解することにした。坂本養川について、「用水の仕組み」「水回し」「人々の願い」「開発」「用水送り・苦労苦心」の5つの観点を絵カードにまとめた。

第3次では、四箇池にかかわる人物や史跡について調べ、坂本養川の観点を基に、四箇池について、「ため池の仕組み」「水回し」「水あらい」「人々の願い」「開発」「ため池造り・苦労苦心」の5つの観点到にまとめた。調べたことを基に「ふるさとため池物語」を作る活動を通して、地域の歴史を受け継ぐ自分たちの思いや心構えについて考え話し合う。(本時)

第4次では、「ふるさとため池物語」を地域の人や全校生に発表、郷土のよりよい発展について考える。

3. 本時について

○学習課題にせまる過程

あとがきを書く活動では、「人々の願い」を中心に考えた。4つの池の開発の歴史には、「願い」と「開発」が連続して繰り返されてきたからである。「開発」の根底に願いがあるからである。これにより、発展してきた地域に愛着を持ち地域社会のよりよい発展について考えられるようになる。導入では、5つの観点を線でつなげる時間を設け、観点の関係性に気づき、納得して学ぶことができた。また、多様に関係性を考えることもできていた。

○因果で事象をとらえる

社会認識は「過去と現在の比較」「推移と変化」「物事の起源」「社会条件の関連」に目を向けて行われる。ただし、今回の「松尾池から公測池が作られるまでに200年近くもあいているのはなぜだろう」の問いの答えは、資料が戦争で消失して待っているため、はっきりと分からない。子どもたちが考えを巡らせても、決定的な答えを確定させたり、提示したりすることができなかった。授業での子どもたちは、「田を造る人がいるから。」「工事の面で、お金が足りなかったか

ら。」「東の方に田んぼが増えてきたから」など、様々な事象を考えることができていた。

4. 討議内容

○公測池が作られるまでに 200 年近くもあいている理由を考える手がかり（飢饉が続いていた、干ばつが続いていた、許可が降りなかった、など）を教師が与えてもよかったのではないかな。

○どのように人々の苦労を捉えたのか。

→どんな願いを持って行動したのかを考えるようにした。子ども用の小村田之助の資料（授業者作成）を読み聞かせをしていた。

○資料が消失したことで、事象を捉える活動は予想になるが、「だからこそ、物語を作ろう！」という意欲づけになる。

○資料の読み取り以外で行ったことは何か。

→子ども 5 人を車に乗せて、四箇池を回り、様子を見たり、地形の概観を確認したりした。

○本時では、授業者がまとめを書くより、対話の方が願いについて理解しやすいとした。今後、理解を目指す内容によって、まとめの文章を書くか書かないかについて考えてもいいのではないかな。

○歴史教材は参画しにくいのが現状。そのため、歴史人を参画モデルにするという視点を持って教材に取り組む。「歴史人の□□から、××できる人間になりたい。」という自分の将来像をつくること。

○対話形式の授業だった。子ども同士が意見を出し合って進めていく授業も行うことができた。

5. ご指導

○高松市教育委員会 指導主事 小柳 良二 先生

①地域教材と歴史

中学の歴史はリアルな空間に当てはめにくい。そのため、どうやって歴史を感じさせるかがポイントである。

→地域教材を使うことで自分事として理解するために地域教材と関連させる。

②社会科の板書

- ・単元で押さえない知識と思考の流れが分かる板書を心がけたい。
- ・板書とノートをつなぐりを意識して実践する。
- ・学習パターン（ノートづくり、学習の流れなど）をつくって、見通しを持たせる。

③3、4年の社会科の役割

中学校学習指導要領の「内容（2）エ」は本単元で行ったこととほとんど変わらない。

→3、4年の社会科は中学社会科の出発点である。中学3年までスパイラルで学習は進む。

民主社会の形成者であることを自覚し、社会参画をベースにする。地域を愛する気持ちを持たせる。方法知、内容知を習得し、地域の課題は何かを探る活動を促していく。

○香社研 OB 植松 勝 先生

①全国大会に向けて

「社会科がどんな役割をもっているか」「10 年先の教育の課題は何か」を考えて授業を創る。日本の現状（課題）を社会参画につなげる。

将来の人材を育成するという思いを持つ。

②見えるものから見えないものへ

- ・子どもたちが収集したもの（事実）を足で稼いでつかむ。
- ・学習材に加工して因果関係を把握する。
- ・単元でつかませたい価値を子どもたちが気づき、理解する。

→社会科の原理原則

事象を捉える活動が予想になったが、子どもがまた情報を収集するので学びが続くことになる。

ただし、教師が考えるための視点（人口の増え方、市だけでなく県内全体の動きなど）を与えてもよかった。

【編集後記】（香社研事務局）

今回は高松の提案でした。高松市立東植田小学校 窪田 啓伸先生のご実践を提案されました。子どもたちの時間認識の育ちを促す資料提示や、単元設定、そして、本時の発問など大変学ぶことの多いご実践、ご提案でした。ご提案された高松社研の先生方、ご指導の小柳先生、植松先生、ありがとうございました。

【講演】「社会的な見方や考え方と社会科の授業づくり」

澤井 陽介 先生

改めましてこんにちは。1日お疲れさまでした。香川に来て5年目になります。昨年の夏は予定が合わなかったのですが、大会に参加させていただいたりしています。香川は親しみのある県になっています。附属坂出小学校や附属高松小学校には何度も来させていただいて本当に親しみのある県になっています。

夏は香社研の熱い研究から熱い夏が始まる、そういう気持ちになっていて、やはり繰り返し関わるとそういう気持ちになってきます。今日は午前中から夏季研での先生方の熱心な研究、実践、提案など、様々な工夫のある授業を見せていただいて、本当に学ばせていただきました。

今日は「社会的な見方や考え方と社会科の授業づくり」ということなのですが、その前に紹介したいことがあります。学力状況調査ではない、教育課程実施状況調査の一部を紹介したいと思います。

(1) 教育課程実施調査の結果

学校の周りの様子を探検する場面です。教師役の人が地図をもってきて「ここをこんなふうに見てくるといいよ。」と指導していました。すごく大事だと思いました。社会的な見方や考え方・表し方、とりわけ、ここで言う社会的な見方を子どもに指導しているということが重要です。特に3年生の場合、地図帳で見ていくと、次に写真を重ねるんですけど、地図記号とか周りの様子もそうなんです。なにが見えてくるかというと、この地図で言うと北側が田んぼなんです。要するに「田んぼを見てくださいよ。道を見てくださいよ。」ということが視点なのですが、見方・考え方なので、地図帳の位置づけとして「この辺りは田んぼが多いなあ。」「この辺りにはお店が多いなあ。」「なぜなんだろう。」「どんな関係が広がっているのだろう。」こんな風に見ていく。つまり、見方と考え方は切り離せない、ということなんです。関係的に見ていく。実的な見方・考え方を養っていく。ただ地域の様子を写真に撮ってきて貼り「こんな様子だ。」だけではいけない。「なぜここにこれが広がっているのかなあ。」という風にいくことで、知見的な情景や社会的な情景と関係づけることができる。このように丁寧に指導していく必要があります。

そこで、香社研さすがだなと思ったのが、教科書を分析していることです。午前中の提案にもありましたが、これはさすがだな、と思いました。当然皆さんされていることですが、教科書を分析した上で、ではなぜこの教材なのかということを説明している。これは全国に紹介したいと思いました。

本単元で大事にしている教材はこれで、それはなぜか。そして社会的な事象、つまり社会の現実と出会う、社会的な事象と出わせている。なぜそこで減って、なぜそこで増えて。この時に、他の部会をまわった時でもそうだったのですが、予想をさせている。子どもからいろんな予想が出てくる。「きれいになった。」とか「海が汚れた。」とか。でも右側のグラフを見ると、「急に海がきれいになるわけがないなあ。」「ここには人間の働きがあるのではないか。」という社会的な事象を見抜く力がある。

今日どこの学年でもそうでしたが、予想をする中に子どもの見方が表れるんです。見方や考え方は使われなければ、見方や考え方ではなく理解です。頭の中にとどまってしまう。でも何かを予想するときに、「ああでないか、こうでないか。」と考えることが、その子の社会的な見方や考え方です。これを社会的な見方や考え方にしていこうということですね。見方や考え方を加えて、自分の社会との関わり方、

自分の生き方，こういうものをより社会的なものにしていきましょう。授業レベルで言うと，社会科的なものにしていきましょうということです。そうすれば，その子たちは，社会に関わろうとしますよ。参画する子ども，いずれは大人になっていきます。社会的な見方考え方を育てていけば，社会的事象に関わろうとする子どもは，社会に関わるようになるというロジックなんですね。このようなことを授業で実現しようとしている。人間の働きが，子どもたちの予想通り，誰かが努力している。いや，誰が努力したかはわからないけど，人間の働きに返っていく。このような今日の提案からも分かるように，私は香社研の研究は理論だけでなく，実践が必ずついてくる，いい研究だと思います。

(2) 全国の実践

<子ども100当番がこんなにたくさんある理由を説明する実践>

問題文の中に□で抜いてある言葉を考える問題。これを見て。(写真)全国の子ども100当番の家です。この問題を考える子どもたちは，子ども100当番の家が分からない子どもたちではない。どういう答えが出たかというと，

- ①「どこにいてもすぐに避難することができる」こういう趣旨で答えている子が2%。
- ②「どこにいても」か「すぐに」のどちらかを使っている子が37%。
- ③「安心・安全のため」が27%。
- ④「不審者・犯人から逃げ込むため」が29%。

どれが正解でどれが不正解なのか。

もう一回問題文を見ます。左の図のように配置されているのはなぜでしょう。そういう意味のという問題でした。つまり，資料を読み取ってわかる。という問題です。

①②③④はどういう解答かと言うと，①地図上の散らばりと配置を考えて書いている。そのような解答は2%でした。地図上の散らばり，つまりどこにいてもすぐに駆け込める，逃げ込めると書いた子，は2%。②地図上の散らばりか設置の理由を書いた子は37%。③設置の目的を抽象的に「追われた時に逃げられるから」ではなくて，「安全を守るため」「安心して暮らせるため」というように抽象的に書いた子が27%。④地図から読み取れない知識を書いてある子どもが29パーセント。これが一つのデータです。これはすなわちどういうことかという分析はできていないですが。ちょっと置いておきます。

<防災の実践>

4つの写真があります。1枚目(A)，地域の人々，防災訓練の様子です。もちろん説明もある。2枚目(B)，地域の人々がみんなで避難マップをつくっている写真と説明。3枚目(C)，国や県の事業，耐震工事の写真と説明。4枚目(D)，国・県・市の事業として災害発生情報をいち早く気象庁から県や市へ情報がわたっていく様子をイメージして図にしたものと説明。

あきこさんはAB・CDにわけました。それぞれ，どこのどんな働きでしょうか。かなり高度な問題です。どれくらいできると思いますか。キーワードはわかりますよね。地域。県。国。

- ①どこのどんな対策か具体的に書いている。15.5%
- ②「どこの」「どんな対策」の「どんな」が具体的でなく「安全のため」など抽象的にしか書けなかった。21%
- ③「どこの」「どんな」のどちらかしか書けなかった。29.9%
- ④個別の資料の説明の説明を書いている。「逃げる」「橋が崩れないように」20%

つまりこれで言うと，①が正解だが②番も拾わないと，15.5%しか正答していないということになります。②も拾って37%ぐらいが正答したことになります。厳密に言うと，「どこの」「どんな」が

回答できた子は、①の解答の子、15.5%しか正答していないことになります。

＜「政治は〇〇の願いを実現する働き」を考えさせる問題＞

これは、唐突に出しているのではなく、それまでの資料、それまでの取り組み、「〇〇センター建設までの取り組み」で願いが形になっていくことを勉強した後、まとめとして書かせる問題です。

() に当てはまる言葉を下の□から選んで書きなさい。正答率85%。これは選挙をする意味、大切さが分かっているかを問う問題。これは簡単です。

もう一つの問題を見てみると、ちなみに40%。矢印の意味を次の二つの言葉を使って説明しましょう。「代表」「議員」。これはもう一つ仕掛けがあって、最初に選挙という言葉を選ばせて、選挙を選んだ理由を二つの言葉を使って説明しましょう。これは緩く見て40%、厳密に見ると20%台。これは何を意味しているか、私が何を言いたいのかというと、まだ分析結果を与えているわけではないのですが、子どもたちは事象については理解しているんです。あるいは、私たちの子どもたちが考えて分かったと考えているんだけど、意味を考えて分かっているかということは、これから解明していかなければいけないのです。

子どもたちは、事象は分かっているが、意味を本当に分かっているのか。選挙に行くことが大切であることは頭で理解しているが、選挙に行くのにはどういう意味があるのかはわかっていない。

また2つの具体を束ねて、「つまり何ですか」という問題は極端に出来が悪い。他の問題よりも。「二つの事象に共通することは何ですか」という問題は子どもたちにとって極めて難しい問題です。

言語表現するのでさらに難しい。去年お話したかもしれませんが、「山で涼しい」と書きちゃうんですね。関係付けて書いているのか、並列で書いているのかわからないんです。こういう学習ってこれから大事だし、これまであまりやられてこなかったのかもしれませんが。どんな関係があるのか、つまりどんなことを考えるのか。つまり、相互を関係づける、意味を考える学習です。これは学習指導要領の目標に書かれています。特色・相互の関連、意味を考える学習、こういう学習がきちんとやられてないのではない、そのように考えられる、テストの結果なんですね。

(3) 社会的な見方・考え方を育てるには

今日の研修会でこんなのがありました。具体的な事象から、それを関連付けて、その人物が目指したことを想像する。こういう学習、もちろん思考操作的な学習で、まとめの段階や整理する段階での学習なんだろうけど。こういうことは、この実践の形でなくてもいいので必要なんだと思うんです。

「社会的な見方や考え方を成長させましょう。」と言っています。地理的分野では、なぜそこに広がったか、どのように広がっているか、なぜ広がっているかを、公民的分野では、政治的・経済的な見方や考え方を説明している。中学校の調査官に聞くと、この二つ、地理と公民の見方や考え方を住み分けているということでした。しかし、小学校を見てみると、内容の中に両方入ってきているじゃないですか。ですから、小学校の社会科で、中学校とのつながりを考えると、社会事象の特色や意味を考えさせる学習に取り組まないと、社会的な事象の見方や考え方が育たないんです。個別の着眼点のことを言っているのではないです。「これは何だろう。これはどうだ。」などの。ある程度抽象化された事柄を表したい時ってありますよね。さきほどの6年歴史、歴史上の人物の目指していることを三角形の図から考える活動で、二つの事実から共通するものを考え、言葉に表した時、それは見方や考え方に近い表現になっています。

もう一つは、概念の枠組みが基礎となっている、一定の理解がもとになっている。個別の見方考え方のことを言っているのではない。ある程度束ねられたものを見方や考え方にしている。こういうベース

はもう、賛成反対にあらうと中学校が先行して解決してしまっていますから、ここに小学校は合わせていく、ということが大事なことです。つながっていかねばならない。

去年にも話したかもしれませんが、社会的な見方や考え方を成長させるためには、人間の働きや営みですよ。小学校の地理的内容公民的内容、歴史的な内容などありますが、軸にあるのは人間ですよ。人間の働きが出てくる教材は、ぐっと引き寄せられるでしょう。それを学習指導要領解説で言うと、時間的に空間的に、あるいはさっきの社会条件自然条件との関連を見ていくとすれば、まず関連的に物事を見ていくことがまず大切。追究考察する学習を通して成長させるんですね。

もう一つは、理解したことをもとにして、その社会的事象の私たちの生活における意味を考える。これはですね、社会的事象はいろんな立場で見ることができますよね。この視点から見たらこんな意味がある。この視点から見たらこんな意味がある。そりゃそうですね。いろんな人の合意形成のもとにつくられているものが多いですから。そうするといろんな立場から話し合ったり討論したり多面的総合的にとらえたりすることができる。こういうことが大事になってくる。これはもう学習指導要領解説の域ですけど、ただここに多くの意義がありまして、上の段は、概念をしっかりと形成しましょう、ってことを言っている。概念をしっかりと形成しましょう。社会的事象、社会的な見方考え方についても、社会認識論って言っても、もっと言えば社会科のとらえ方についても二つの軸がある。みなさんも社会科に関わっていれば、だいたい二つの軸についてイメージできると思います。「理解の社会科」か「子どもが説明できる社会科」もっと言えば、「概念形成の社会科」か「子どもが構成的に問題解決していく社会科」か。「概念形成の社会科」は、内容理解を全面に出している。「子どもの問題解決の社会科」はもちろん問題解決的な学習を全面に出しています。この二つが対立しているのか。研究者は、それぞれの立場から強く意見を述べているだけです。しかし、どちらも大事であることは、研究の域でなく、法律で、学校教育法30条が知識技能を活用して課題を解決する思考力判断力の表現と言っている。学習指導要領が「知識や思考のバランスです。」と言ってます。両便なんです、社会科は。ですから理解の社会科か問題解決の社会科か、どちらも大切です。社会科の二つの柱です。

このように考えたら、見方や考え方もしっかりと社会的事象の見方という側面と、後半は一つ概念をみんなで獲得しようという側面。どちらかというところ、社会の一員として広い視野から考えようという考え方。社会的事象の見方という側面と社会の一員としての広い視野からという側面の考え方が、やはりどうしてもある。これ、どちらかを否定すると、理解の社会科か問題解決の社会科かという論になってしまう。学者の先生方、研究の先生方がいろいろ主張されています。基本的にいろいろあっていいと思うんですけど、さきほど言っていたいただいた現場から立つと学校の先生方が一番バランス感覚をもってやっていると思います。つまり、理解したことをもとにして、実社会を見せたり、現実社会に目を向けさせたり、あるいは「あなたの関わりかたは」と考えさせたり。

例えば、祭りに関わる一つの事象があります。様々な人が関わっている。運営する人、協力する人、そして参加する人々。こういう見方をしていくわけですよ。関係的にとらえていく。それは時間的に言うと、受け継がれてきたものである。運営してきた人の並々ならぬ苦勞があった。その時代の背景が見えたり、あるいは工夫や努力が見えたり。あるいは協力する人。例えば、商店街や街の盛り上げ隊とか。町をよくしよう、景気を良くしようとか背景・目的が見えたり、こういうふうに見えてくるのが社会認識ですよ。この内容は学習すると願いを考えてくる。ここに、「これからは」という見方が求められている。公民的資質の基礎に、よりよい社会の形成に参画する基礎の説明が加わっている。今ある社会よりよりよい社会を形成していく。「未来に向かってこれからは」という視点がまず大事になってきます。

(4) 社会認識の深まり

もう一つは、「自分たちは」という視点が大事になってきます。参画ですから、この自分たちはという時に、地域の一員としての自分であったり、国民の一員としての自分たちであったり、視野を広げていく。学年に応じて、内容によっては世界の一員として、世界の中の日本人として、こういうふうに自分の視野が広がって行っていますよね。

この二つのベクトルを持って、社会認識の深まりと言えます。社会認識というのはあくまでも、過去の人たちがつくったものをみんなで一緒に一生懸命、決められた理想的な姿、学習指導要領に書かれている事実にたどりつくために、積み上げていく。「ああ、やっぱり協力していたね。工夫していたね。」で終わり。これが社会認識としてよいのかどうか。もっと言えば、これからの社会認識はこれからも続いていかなければ、発展していかなければ、私たちは未来の大人としてどうしたらよいか。こういう社会の認識。関われる社会、形成される社会という社会認識。これが間違いなのかどうか、私のほうが聞いてみたいです。間違いでないとすると、見方や考え方は概念形成、つまり「工場は輸送に便利などところにつくられた」これは法則的な概念形成ですね。事実を積み上げて。「工場は海沿いだけでない、内陸にあっても高速道路があるじゃないか。」「やはり工場は輸送に便利などところにつくられるんだ。」こういう法則的なもの。これを社会的な見方や考え方と要綱辞典なんかには書かれています。これなぞって終わり。つまり昔の人、過去の人、研究者の人があみ出した法則を、こどもが後ろからそのままなぞって終わり。そういう見方を養うことで、終わりでいいかということです。これは概念形成、つまり自動車工場の自動車の生産の仕方が分かった者はどういう大人になっていくのか。「分かったらそれでいいんですか」ということです。米作り。米の作り方が分かったらいいんですか。米の作り方が分かった子どもは未来に向けて何が残るんですか。農業で働く、工場で働く、そんな子は役立つかもしれませんね。でも本当にそういうことを求めているのか。そのことを考えると、やっぱり事例を通して、社会的現象の意味を考える、その向こうに社会が見えるという学習をしていかないと、分かった、理解したでは、概念形成、見方や考え方は社会的現象を解釈するだけになってしまわないでしょうか。

私は学習指導要領に書いてないことばかり言っていますから、意見をもらいたいくらいです。勇気を出して言っていますから。こんなふうに社会的見方や考え方は、概念形成に向かう社会的現象の科学的な見方や考え方や社会の一員としての考え方である。これが切り離せないから見方や考え方なんです。「これからは」は勝手に考えるわけではないです。この人たちの努力を見ながらこれからは、絶えずここに戻る。自分は参加者にもなれるし、運営者にもなれるし、自分はどんな関わりをしてその人たちの工夫努力をしっかりと見つめた時に、自分はどうすべきかと考えることができる。外側から見て、「自分は祭りに参加してやろう。」と思いついて言うことではない。つまりこれをひっくるめて社会認識であります。矢印は一方向ですけど、言ったり来たりだから。これからはと言っても一回現実は見ない。勝手な空想はしてはいけない。これからはと言って現状はわからない。ですから、見方や考え方は、見方の側面と考え方の側面がありますが、やはり結び付いているものです。「これを社会認識の成長としてはいけませんか」とさっき研究部の先生方とも話をしていたんです。ですから公民的資質の基礎は、社会認識に加えて、問題解決をしていく能力、実社会の課題を解決していく力であり、これからの未来を生きる子どもたちに大切な力であると考えます。

こういうふうに考えると今日は大変よい実践ばかりだったのです。例えば「共生」という言葉が出てきましたよね。「共生」というのは、もともと生物学から生まれた言葉なんですよ。美しいイメージがあるんですけど、本当は美しくない、美しいものばかりではないんですよね。「片理共生」聞いたことがありますか。寄生とか要するに片側だけが利益を受ける。でも現実社会では違いますよね。より良い共

生。思いやりのある共生。そういう姿をイメージしますから、外国の人との関わり、社会の中で使われますから生物学とは違います。

しかしですね、共生をテーマにする場合、もう一回見ていただきたいのが、キーコンピテンシーの中の、三つキーワードがありましたよね。その中の一つにですね、多様な集団における人間関係形成力があります。こういう報告があるんです。多様な集団における人間関係形成力。それはいろいろなところに書いてありますが、4つだけ特質に取り出すと、共感する力、感情をコントロールする力、協調する力、利害の対立を解決する力です。私は今とらえられている共生というのは、子どもたちはもう持っているんです。言葉で。「みんな仲良く」「ふれあい、理解しあう」でも現実の社会ではそうはいかない。共生に向かおうとする中で、対立や矛盾が出てくる。そういう問題を解決していく姿を見せる。このことが大事になってくる気がします。

初めから、ある課題をぼっと設定するのではなく、調べていく中に、共生に向かう中に、社会の中で生じている課題、外から、T P Pの問題をもってくるのではないんです。ともに生きていく中に生じる問題。例えばバリアフリーの問題。そういう問題を子どもたちが解決していく。このことが大事だと私は思います。意思決定を最終的に子どもがするんですが、大人の意味決定がありますよね。大人たちの判断、意思決定をしっかりと見せる。その上で子どもが考えていく。この順番が大事なような気がします。パフォーマンス課題も初めにつくられるのもいいですけど、後半になってくることもある。

ちょうど今日おもしろいなと思った素材がですね、5年生の自然災害のところですね。自然災害に対する丸亀市の防災対策や自分たちのできることを調べて4年生に伝えようというパフォーマンス課題です。初めの方、第2次でつくられているんです。でも今日の初めの大島先生の提案で、高齢者が災害で一番被害にあっているという現実がありましたよね。4年生に知らせようというスタートしたけど、本当に知らせるべき相手は誰なのか。社会的事象と出会えば、出会うほど、問題の質は高まっていくんですよね。そうすると本当に知らせるべきなのは4年生ではない。高齢者や地域の人たちなのではないか。こういうふうになってきたら、この課題は本物の課題になってきている。このように考えると、共生についてやはり問題を解決する中で、共生の在り方を考えていく。あんまり難しい問題を取り上げる必要はないですけど、子どもの問題解決が、つながっているかももう一度考えるべきかなと思います。いい授業、いい提案ばかりだったのですが、まだまだ磨きようがあるかもしれないと思いました。

「農家を守るためにどんなことができるでしょう」という実践。これもすばらしい実践でした。いろいろな資料からみんなで予想を磨きあげる。これもよくある事例ですね。課題が明確になっているから、学習ができるんです。課題が明確になっていないと、空想論になってしまいます。「国が補助金をだせばいい。」こんなことを子どもがいうことを望んでいるのか。先生方は、「みんながもっと買えばいい。」この時にですね、私は最終的に子どもが「米作りの名人になっておばあちゃんたちを支えてあげたい。」「米作りをしてみたい。」これは確かにいいですよ。将来を生きる子どもたちに農業について夢を持たせることはいいことです。確かにいいですが、この学習はこれからの米作りが、どんなふうにしたら明るくなっていくか、ということですよね。「誰が誰に働きかけをすればいいのか、そのことによってどんな風に農業が元気になるのか」というロジックをみんなで線で結び合いながら、妥当性を吟味していく。「本当にできるの?」というように。それが難しければ、米作りの関係性を調べていく。そうすると、こういう問題は一人では解決できない。私の行いでいいわけではない。J Aがあつて、農業試験場、行政があつて、農家の協働体制があつて、消費者があつて、国があつて、こういう関係の中で、「品種改良をすればいい」ということは、誰が誰に働きかけるのか、これこそ社会的事象を関係的にとらえるということではないでしょうか。私はどこにいる、社会の中で私はどこにいる、私のできることは何か。社会の問題は一人で解決するのではなくて、みんながそれぞれ役割に応じて解決していくこと

が大事だ。それが社会認識なんです。このことを目指して、こういう学習があったらいいなと私は思うんです。

ついでに申し上げると、これからの新しい動きを大島先生がされていました。子どもたちに未来、希望が見えないと、大人になるのが嫌になります。大人になりたくない、もしくは農業をやりたくない、工業をやりたくないというような。そういうことも考えられます。

ですから、現在の課題を解決しようと取り組んでいる人たちをこの先見せていくというのはどうでしょうか。今ある課題に果敢にチャレンジしている人。品種改良をしている人とか。品種改良って10年かかるんです。やってないわけではないんです。10年かけて、未来を見据えて毎日ずっと研究をやっているんです。そういう現実を見せてあげたらどうですかね。そちらのほうが未来の農業を考える子どもにならないでしょうか。加えて農家は農家一人の仕事ではなくて、農家同士が協働して機械を使っているから、機械の購入台数は一時期より減っている。これは農業の就業人口が減っているだけではなく、農業の共同化が進んでいる。そういう社会の現実。JAがあって、農業試験場があってみんなで協力して行っている農業、農家ではなくて農業である。そういう見せ方を大事にする必要があります。そうなってくるとこの学習も、みんながそれぞれの立場でやるのがあって、私にもやるのがあって、こういう社会認識が大切なんじゃないですか。その延長線上に自分のこれからの関わりが見えてくる。

社会科の評価規準をあえて分けたならば、ここに注目してもらいたいんですよね。つながっていると、どこにあてはめたらいいか、学習活動は見えないんです。

あえて分けたのは、学習活動の限度に分けたんです。社会科がどうしても雲の上に祭り上げておろしてこなかった社会的な回路をどう思いますか、社会に参画する子どもを育てるためには、社会的な態度を育てる授業展開をしないと届かないですよ。「わかったわかった。」理解だけの授業になっちゃう。このところに焦点を当ててもらいたくて、あえてこんな風に分けたんですよね。

（５）社会的事象の特色や意義を考える学習

一つ、やはり考えていただきたいのは、社会的事象の特色や意義を考える学習をしなければならない。教科書研究をしていただけてますが、同じくらいに学習指導要領研究をしていただけて。

これ例えば政治の学習なんです、政治は国民生活の安定と向上を図る大切な働き。〇〇種の高齢福祉サービス、どっちが内容ですか。多くの先生は高齢者福祉サービスの方を内容とするんですね。でも学習指導要領では、「国民生活の安定と向上の働き」のほうが内容である。これは、調べる対象とするものに、例示を加えているものなんですね。言ってみれば、教材の柱なんです。次に、学習指導要領に何と書いてあるかというと、「調べる内容を手がかりにしてこのことを考えるようにする。」と書いてあるんです。つまり子どもなりの解釈を求めている。限られた情報を手がかりに解釈するようにする。すると、例えば福祉サービスであれば、「いつでもお年寄りが、相談できる窓口がある」「お年寄りでも通えるスポーツクラブがある」とすると、「子どもはお年寄りが健康的な生活ができるためのものがたくさんある」と子どもに表現させたらいいと思います。これは子どもなりの解釈です。これを間違えると、「安定と向上を図る働きをしています」という言葉のかっこ抜きを埋めて終わりになってしまいます。これでは意味が分かってないですよ。だからこのように子どもたちが考える場面があることが大切です。

「昔の道具」の単元は、代表的なものとして挙げられます。昔の道具には、昔の人の知恵が込められていた。道具はだんだん便利になってきた。これは様子の理解、特色の理解なんです、大事なのは、人々の生活の変化を考えるんです。道具が変わったら人々の生活がどう変わったかということです。こ

のことが抜けていませんか。子どもの解釈、つまり社会的な見方や考え方が使われていると言えます。

社会的な見方や考え方って、予想を大事にして追究・考察をし、振り返りを大事にすることで養われていく。予想・見通し、振り返りを大事にしなければいけません。

それとあえて言えば、問かけを大事にしなければならないと思います。例えば、「A駅は大きな駅だから周辺に人が多い」と学校周辺について気づいたことを言う。これで終わりでしょうか。「ここはどんな地域ですか。」と問う。子どもは、「人が多いから中心地なのかな。」と考える。こういう表現が必要なのではないのでしょうか。「なぜ人が多いと中心地なの。」と問う。すると子どもは、「お店が多いと思うから。」と考える。こういう問かけによって、子どもは見方や考え方を使うようになります。初めは減少を言っただけだったんです。「なぜそう言えるの。」という問かけによって、事実や現象にとどめずに、持っている見方を子どもが使うようにする問かけをする。特色や意味を考えさせるということです。見方や考え方はほっといたら育たない。理解とどう違うかということ、見方や考え方は使わないといけないんです。使わなかったら理解や認識で終わりです。子どもの中で閉じ込められたままです。総則に書いてある見通しや振り返りは、別に見方や考え方を養うためと書いてあるわけではないですが、やはりこれからの学力の大事なキーワードだと思うんです。子どもの中に生きて働く、「自動車づくりが分かった。」「米づくりが分かった。」その先にあるものを子どもに養っていくことが私が大事だと思っていることです。

(6) 情報の焦点化

情報の焦点化ということを考えてほしいです。社会的は言葉が一人歩きしていませんか。具体的な事実が大切だと冒頭で言いました。鳥取県の白ネギの実践なんですけど、「白ネギにどんな工夫があるんだろう。」という発問がありました。悪いわけではないんですが、いろんなことが全部工夫なんですよね。機械とか、広い畑とかも工夫なんです。いったいどれが工夫なのか。子どもが調べてきたものはすべて工夫になってしまいますよね。本当に社会的事象の意義、工夫は目的が明確でないと、「なるほど工夫なんだ」ってならないですよ。焦点化されている例です。土がもりあがっているところがある。他のところは雑草が抜かれているにも関わらず、ここだけは雑草が意図的に植えられている。これは盛り上げていく土上が崩れないようにするためなんです。そこに栄養分がたまってその区分のねぎが白く太くなり、おいしく甘くなる。これこそが、「他の場所はきれいなのになぜ。」これが焦点化したなぜです。これは意味を考えさせますよね。そうでないと漫然とした工夫になってしまう。子どもに意味を考えさせる授業が大切です。

私たちは社会科で日本の人々の強みを教えています。勤勉さ、誠実さ、高い技術、こういうことを子どもたちに伝えていくのが社会科でなければならないと思います。よりよい社会の形成に参画する資質や能力、基礎をバックに取り入れて、社会的な見方や考え方、表し方の学びを通して実社会に生きる人々の姿を学んでそれをモデルにしながら将来にわたって自分の関わり方や見方を考えていくようなそんな授業作りをしていただけたらと思います。

大変素晴らしい研究会に参加させていただきました。ありがとうございました。

「香社研フォーラムカップ2014」報告

一年の各郡市の実践を交流するまとめの会を、本年度も昨年同様、香社研「フォーラムカップ 2014」と位置づけて実施しました。

開会式後のデモンストレーション（一人1分間）で、実践の概要を全体に説明し、参会者が関心のある実践を選んで聞くパネル発表という形で進めました。その実践を、

○ 研究を広めることに貢献した実践・・・金カップ

※ 参会者がまねしたい実践に鉛筆を投票して決定。

○ 研究を深めることに貢献した実践・・・銀カップ

※ 講師の中田正弘先生が選出。

という二種類のカップに分けて、実践者に贈呈する計画でした。しかし、公共交通機関に不都合があり、講師の先生の到着が実践発表に間に合わなかったため、本年度は、参加者が投票した次点の実践に銀カップを贈呈することとしました。

また、研究部から平成28年度全国大会に向けて研究の方向を提案し、帝京大学教授の中田正弘氏から、研究の方向性及び実践発表について、貴重なご助言をいただきました。

休日にもかかわらず、100名を超えるご参会をいただき、盛会裏に終えることができました。

社会科の授業は好きですか？

「社会科って、何をどうやって教えるからもっと楽しくなる？」
そんな悩みを、解消できる社会科研究フォーラムを開きます。今回の目玉は、2つです。

【目玉1】
県内各郡市の
優れた実践
金カップ

【目玉2】
帝京大学
中田正弘先生による
講演

【内容解説】 1年 香川県立中学校社会科部会 香川県立中学校

【目玉1】 県内各郡市で実践発表し、本年度の優勝（金）と準優勝（銀）を争う。発表内容は、各郡市で発表された実践の中から、最も優れた実践を選出する。発表内容は、各郡市で発表された実践の中から、最も優れた実践を選出する。

【目玉2】 中田正弘先生（帝京大学）が講師。社会科の授業等、ネット情報調査。

【目玉3】 平成24年2月15日（土） 13:00～17:00
【目玉4】 香川大学教育学部附属坂出小学校 体育館
【目玉5】 講師 帝京大学 中田 正弘先生
【目玉6】 参加費 無料
【目玉7】 参加資格 なし（無料に限りなく、どなたでもご参加いただけます）
【目玉8】 応募方法 各郡市で発表された実践の中から、最も優れた実践を選出する。発表内容は、各郡市で発表された実践の中から、最も優れた実践を選出する。



【昨年度受賞者よりゴールドカップ返還】

1 目的

- 参会者各々が共感できる実践に投票し、最も得票数の多い実践をグランプリとし、ゴールドカップを実践提案者所属の郡市社研に授与することを通して、次世代を担う若手のがんばりを賞賛し、研究を広める場とする。
- 深い教材研究や理論を背景にプロの技が光る先見性・提案性の高い実践を、講師の先生に選考していただき、シルバーカップを、実践発表を行った郡市社研に授与することを通して、研究を深める場とする。
- 各郡市の今年度の実践を交流したり、講師の助言を通して、研究を深化し、来年度の研究の方向性を探る。
- 香社研の研究を広く県内外や他教科の先生方にも広める。

2 日時 平成25年2月23日（土）13:00～17:00

3 場所 香川大学教育学部附属坂出小学校 体育館

4 日程

◆ 開会 13:00～13:20

- 1 会長挨拶（徳田 仁司 校長先生）
- 2 カップ返還
- 3 フォーラムカップの進め方
- 4 デモンストレーション

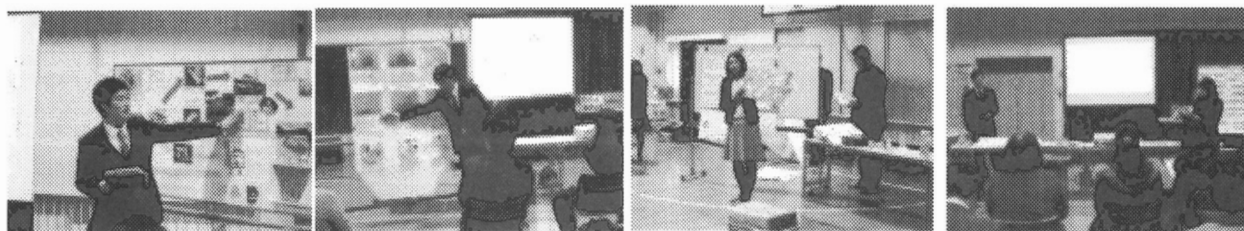
それぞれの郡市で、実物を出したり、キーワードで好奇心を揺さぶったり、概要をかい

つまんで説明したりと、趣向をこらした説明がありました。数名で協力してパフォーマンスを考えていた郡市もあり、聞いていてわくわくするようなデモンストレーションになりました。まずは聞いてもらうことが重要だったのです。



【「実践の概要」A4用紙1枚】

◆ 実践交流(パネル発表) 13:20~15:15



◆ 研究部提案「H28年度全国大会に向けての研究の方向」 15:20~15:35

香川大学教育学部附属高松小学校

教頭 大嶋 和彦

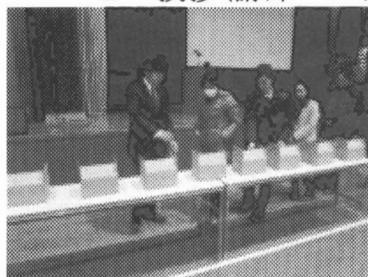
◆ 研究への助言 15:45~16:45

帝京大学 教授 中田正弘 先生

◆ 閉会 16:45~17:00

1 表彰 金賞・・・高松北 銀賞・・・高松南, 坂・綾, 三・観

2 挨拶(講師へのお礼含む) 片井 功 校長先生



5 成果と課題

昨年に続く成果は、ボトムアップとトップダウンの研究の融合が見られた。前半の実践交流が後の本部提案につながり、中田先生がそれを価値づけしてくださった。

新しい取り組みとして、実践者への一言を書くようにした。これによって、発表を見てくださった方の生の声を各郡市が持ち帰ることができるようになり、これまでのがんばりへのねぎらいの言葉や、今後の研究への一助となっている。

来年度以降の課題は、大きく二点ある。一点目は公平性が保たれたかということ、二点目は見ることで実践が少ないことである。今年は8グループによる実践発表だったため、3・3・2というグループ数で分けた。開始時刻、発表時間、1ラウンドでの発表郡市数などを工夫することで、なるべく多くの実践を、余すことなく、また人数の偏りなく進められるよう、そしてアンケートでいただいたたくさんの意見を、なるべく次回に生かせるように考慮して運営したい。

研究への提言

帝京大学教授 中田正弘先生

1 はじめに

こんにちは、帝京大学の中田と申します。

私は起きて13時間になります。羽生選手が金メダルを確定したというのを見た瞬間に家を出ました。だいたい4時ぐらいでしたかね。玄関から一歩外を出ると長靴の上まで雪がずぼずぼと来ました。そこで歩いて行くことにしたんです。東京は土砂降りの雨で、雪が10センチ積もっている中で歩いたんです。交通機関は一切動いていませんでしたから、よくここまで来たなと嬉しく思っています。予約していた飛行機が飛ばなくなって、新幹線に変えたんですね。10時半ごろに岡山に到着しました。うどんが食べられると思っていたら、岡山の駅で2時間足止めを食らっちゃいました。

一昨日です。共著で本を書きました澤井先生から電話を頂きました。「香川凄いや、いっぱい見てきてよ。」と、埼玉でそういう電話をしてきました。彼曰く、社会科研究は香川が日本一ではないかとおっしゃっていました。私も共感して、こんな熱気の中で凄いなと思いました。今日の私のテーマは、私なりに強調点を大きくして、書いたものです。

香社研は何を目指すかという、社会参画が一つある。そのたびにおっしゃっているのが、社会科本来の魅力ある授業をしていこうじゃないかと。じゃあ、社会科本来の魅力と言うのは何かを考えていかないといけません。

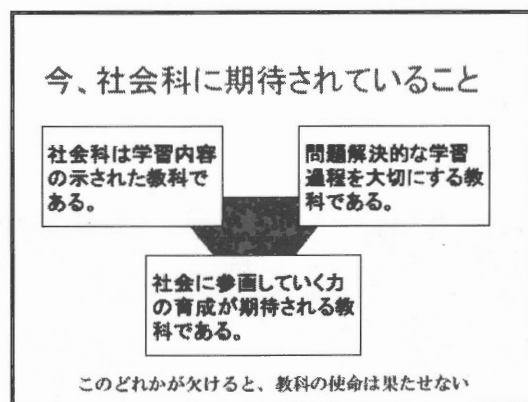
社会科の授業が好きかどうかを調べてみましょう。お手元のクリッカーを押してください。みなさん、自分の番号入りましたか？とても好きが多いんですかね。その他という方もおられますね。好きな方76%、これは立派ですよ。通常の学校だとかなり・・・と

いう人が出てくるんですけどね。

2つ目、聞いてみます。社会科授業得意ですか。・・・どうだ、うまくいくときもある。難しいという方も結構いらっしゃる。社会科って難しいですかって聞かれると、多くの方が難しいって答えるんですよ。ですから、この社会科っていう評価を基準に、先進的な研究に加えて、社会参画していく子をどうやって育てていくか、魅力ある社会科をどうやってしていくかについて考える必要がありますよね。

2 今社会科に期待されていること、

この三点セットは外せない。



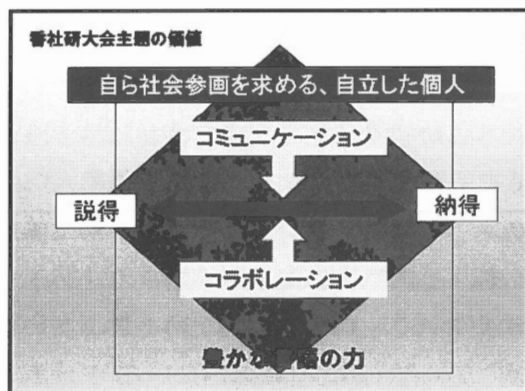
1つ目は、社会科は学習内容の示された教科であるということ。いかに理解を深めていくか。

2つ目、その理解の方法は問題解決的なプロセスを重視するということ。子どもは「なぜ」って思う問いと、「分かった」と思う答えが離れているんです。問いと答えがくっついている授業って簡単なんですよ。質問に答えたらすぐ正解になりますから。社会科の場合、問いが出てくると答えが出るまでに時間がかかる。それは、調べて考えるからです。だから、単元を貫く学習問題が出てくるんです。

3つ目、学習の結果として、社会に参画していく力の育成が期待される教科であるということ。参加するだけじゃなくて、参加するうえでの理解や認識を教えるんです。

おそらく、この3つが絡むと、魅力的な社会科になると思います。

授業は、子どもたちの言語活動を取り上げての説得と納得の応酬なんですよ。説得をさせるときは事実が必要。事実がないのにもものは言えないわけですよ。だから調べていくわけですよ。相手を納得させるためには、もっと具体例を持ってこないといけないわけですよ。社会科の場合、先生が子どもたちに提供するのではなくて、子どもたちが獲得していくとしていきますから、そこにコミュニケーションが生まれてきます。当然、言語の力が必要です。



松本先生が実践されていた地域教材と大西先生の地域教材、こどもに近づけていきました。「こんなにもあるぞ」と、でも、地域教材だからといって、子どもが興味を持つか、学びやすいかというとは決してそうではないんです。私の先輩で、鎌倉街道、鎌倉古道の研究をしている方がいるんですけど、この人が、高校で鎌倉時代の授業をしたんですよ。実につまらないんですよ。教材としての力が弱いんですよ。子どもたちが追究している材料にならないんですよ。今日発表された実践は、ただ、教材があるのではなくて、活動

や表現の部分をユニットにして活用しています。教材としての力をつけている。このところが、さすがだなと思ったところです。

だから社会科は、自ら社会参画を求める、自立した個人というのが期待されるわけです。これに説得と納得がなければ、中身は空っぽの社会科です。

社会認識をどう使いこなしていくか、課題になるところです。社会認識は、内容面と機能面があるんですよ。

内容面というのは、社会事象を対象とし、知ることを通じて得られる知識です。それと同時に集める知識を束ねて、そのことから見えてくる世界です。渡辺先生が同じことをおっしゃっていた。4年生で消防施設を扱います。消防施設ってブロックごとに同じものがたくさんあるんですよ。防火水槽、消火器、警報機とか。1つのブロックに何か、2つのブロックに何かではなくて、みんなで一带を集めて調べていくと見えてくる世界がある。素早く消していく仕組みが見えてくる。働き、見方、考え方とか。これが社会認識ですよ。そして、それが、機能面です。認識するという機能面です。

3 なぜ社会参画か

平成20年の中教審答申の社会科改訂の基本方針についてです。「理解と愛情を深め、社会的な見方や考え方を養い、身につけた知識、概念や技能などを活用し、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培う」とあります。社会を知って終わりじゃなくて、もう一度社会との接点に目を向ける場があってもいいんじゃないかと思います。

背景は、ESD (Education for Sustainable Development) です。持続可能な開発のための教育です。香社研のいいところは、魅力ある社会を実現する子どもを育てればそこに

到達できるぞということを知っていることです。それは、昭和 22 年の学習指導要領の社会編の試案で言っているんです。「社会科の任務は、青少年に社会生活を理解させ、その進展に力を致す態度や能力を育成することである。」というところですね。そもそも、魅力ある社会科は、社会参画に到達している社会科だと思うんです。

このテーマについての価値を見ていきます。教育において社会科のバックボーンを語るときは必ず出てくるのがこの 3 つなんです。グローバル化、情報化、少子化。グローバル化というと、いろんな測り方があるので難しいんですけど、仮に公立小学校に在籍する外国人児童生徒というのは 4 万人。決して多くはないのかもしれませんが。

情報化について、皆さんに聞きます。インターネット利用者、平成 9 年は 1115 万人でした。では、24 年度は何人いると思いますか。正解は、9500 万人。国民の 75% 以上は使っているんです。これを小学生に限定すると、学校で利用していることもあるんですけど、日常的にインターネットを利用している子は 90 数%です。ですから、LINE についての授業実践がありましたけれども、この時代に合って、教材を開発していくというのはすごい重要で、いい提案されたなと思いました。

じゃあ、高齢化社会について聞きます。高齢者は、2005 年に 20% を超えました。2055 年は、何% だと思いますか。実は、40.5% です。今、小学校 1 年生が 7 歳ですよ。その子が町の中で 10 人すれ違うと、そのうち 4 人の方は 65 歳以上の方になる。ものすごい勢いですよね。

進展し続ける社会と求められる人材の変化。今、子どもたちが大人になるころにはものすごく変化している。今の子どもだけ取り

出してみます。文部科学省でコミュニケーション能力推進会議というのをやっているんです。これの中間まとめの中に、今の子どもたちのコミュニケーションの様子をかいつまんで出していて、今の子どもは、意外と気の合った子どもとばかりいるのではないかという指摘があるんです。もう一つは、よくコミュニケーションを取っているみたいだけれど、思いのほか、自分のことを一方的に話しているんじゃないかということもあります。携帯電話とかインターネットでのコミュニケーションが盛んになってきたけれど、外遊びや自然体験が減ってきているよね。そのことで他者とのつながり、身体能力に悪影響を及ぼしているという指摘がある。じゃあ、これからの子たちに、これからの社会の変化を見越してどんな力を育てたらいいのかというのが大きな課題になってきます。

考えてみてください。「あなたはボランティア活動に興味がありますか。」という内容です。五か国調査です。日本、韓国、アメリカ、イギリス、フランスのグラフがあります。日本はどれでしょう。エのグラフが多い。5 か国の中で最もやる気がないと思っている。だいたい先生方、やる気がないという順番に押していますね。本当はどうかと言うと、実は、日本ってやる気あるんですよ。このグラフ、とても好きなんですけれども、平成 21 年の調査なんです。あの大震災があってから、ボランティア活動についてとても需要があって、大切であり、身近なものとなった。大震災によって興味関心が高まったというのは分かるんです。でも、その前のデータでも、日本の子どもたちというのは、人のために働こうという気持ちを持っていることが分かっています。

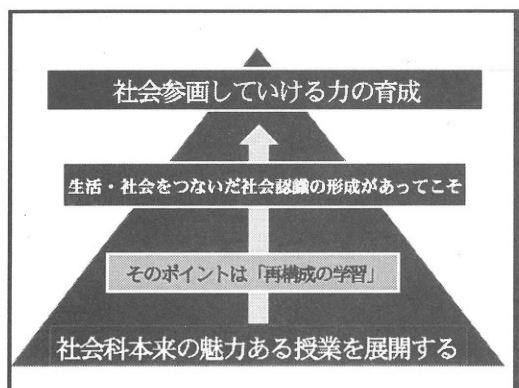
子どもたちに聞いています。今、住んでいる地域(市町村)が好きですか、嫌いですか。

みなさんはどう思いますか。選んでください。フランスのグラフとほぼ同じですね。つまり、日本の子どもは自分の国が大事だということです。日本の子どもたちは自分の住んでいるところが好きだと思っている。

最後の問題。他人に迷惑をかけなければ、何をしようと個人の自由であるという質問です。日本のグラフはどれですか。見てみましょう。日本の子供は秩序を守ろうという思いを持っている子が多いんですよ。

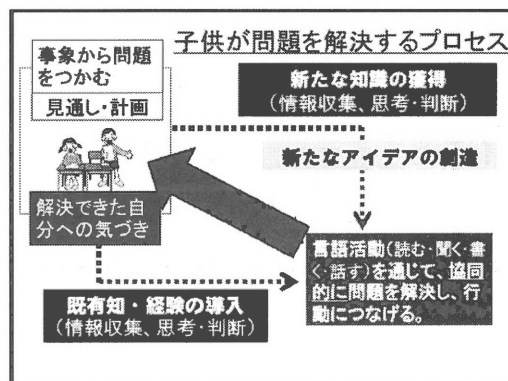
そうするとですよ。もう一度、香社研のテーマを見てみると、香社研のテーマに価値が見えてきます。なかなか友だちと言葉でうまく関わっていけないけど、心の中では関わろうという気持ちが子どもの中にいっぱいある。だとしたら、どういう社会科を目指すかという、香社研で目指しているところに価値あるように思えるんです。

大嶋先生が先ほど説明されたものを私なりに考えるとこんな図になると思うんです。



一番てっぺんが参画していける力を育成する。そのためには、社会科本来の魅力ある授業を展開する。でも、それは、中身がなきゃだめだ。生活社会をつないだ社会認識の形成がないとだめだと言っているんです。さっきの戸城先生の授業は、法や決まりと消費生活を結び付けたんです。守屋先生もそうでした。つまり、生活社会をつないだ社会認識の形成を大切にした授業だったんです。つかん

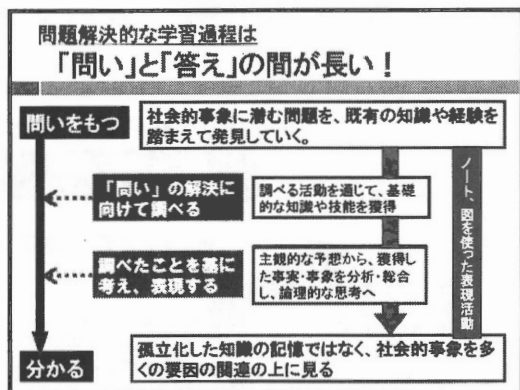
だ事実からいったい何能说えるのかを大事にした授業だったと思います。そのポイントを香社研は、再構成の学習だという風に言っている。再構成というのは事実をつかんでそれで終わりというのではないんです。それを合わせると何が見えますかという授業の作り方です。さっきの地域教材の授業もそうです。図にしてみました。



社会科って、考えさせたいですよ。問題があるから考えるんですよ。2時間岡山で止まっちゃった、どうしようかって考えるわけですよ。人間が考えるときって、一番最初にやることは、知っていることを導入するんです。だけど、知っていることだけで解いたら学校の勉強にならないわけですよ。子どもたちにしてみたら、知っていることを導入しても解けないんです。見通しや計画を立てて、新しい事実を獲得していくんです。調べていくんです。それを持ち寄って考えるわけです。その結果、解決できた自分。これがすごく重要になりますね。決定的な学習です。つまりね、これまでいい社会科っていっぱいあったわけですよ。だけど、これまでいっぱい見てきました。毎時間ね、ポケットから手品を出すんです。食いつかせるという言い方を。面白いですよ、子どもは。それで1時間が終わる。でも、それで子どもは自分で問題解決したとは思わない。問題解決するというのは、そこから考えていって、必要な情報を集めて、そこで分かったと言えること。そこで、やっ

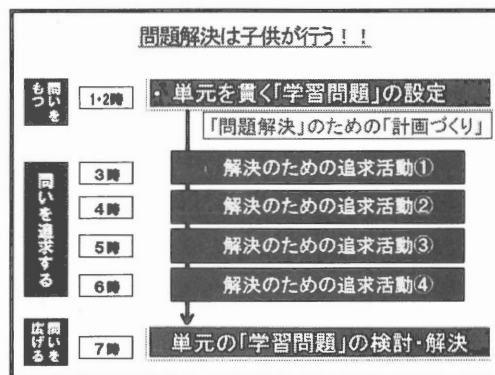
てのけたと言えること。子どもたちに見通しを持たせるとか、計画を立てさせるとか、終わった後に「やったよ、先生。」という。こういう社会科、とても重要になってきますね。

4 社会科授業づくりについて

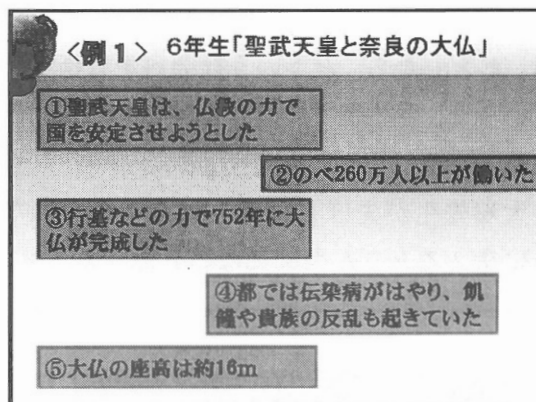


一つ目に、問いをもつことについて考えましょう。さっき言いましたが、「問い」と「答え」の間が長いんですよね。これ、くつついたら、先生が解説するだけの社会科になるんですよ。離すんです。その間、子どもに歩ませるわけです。どうやって歩ませるかという、まず、入り口で社会的事象に潜む問題を見つけさせるわけです。「なぜ？」と思わせる。それが、最後に「分かった！」になるんです。だから、授業の出口は、あれとあれとあれを知って、合わせて考えてみたらこうだった。社会科は、そういう考え方です。その間に、問いの解決に向けて調べる。調べたことをもとに考え、表現する。多分、香社研でこれから力を入れていこうとしているのは、調べるだけじゃなくて、調べた後で再構成をどうやっていくかを考えることなんです。その一つに、香社研で作ったノートの本があるんです。ノートっていうのは、再構成のフィールドです。

もっと重要になってくるのは、ただ単に学習問題、学習課題を設定するんじゃなくて、それをどうやったら解けますかを考える。じゃあ、それを調べていこうよ、というのが追



求活動①②③④になっていくわけです。子どもの考え方によっては、この順番が入れ替わることだってあります。これを香社研では、問いを持つ、問いを追求する、問いを広げるという言葉を使っています。



6年生の「聖武天皇と奈良の大仏」について。みなさんに聞きます。みなさんは、何番を一番最後に子どもたちに考えさせますか。正解はないんですよ。

- ①聖武天皇は、仏教の力で国を安定させようとした。
- ②のべ260万人以上が働いた。
- ③行基などの力で752年に大仏が完成した。
- ④都では伝染病がはやり、飢饉や貴族の反乱も起きていた。
- ⑤大仏の座高は約16m。

さあ、何番を授業の最後に持って来ようと思いますか。見てみると、一番が多いですね。もう一度言いますが、正解はありません。やりやすさとしては、①を最後に持ってくるこ

とが多いでしょう。でも、④⑤でも構いません。

ちょっと、動かします。

④都では伝染病がはやり、飢饉や貴族の反乱も起きていた。

②のべ 260 万人以上が働いた。

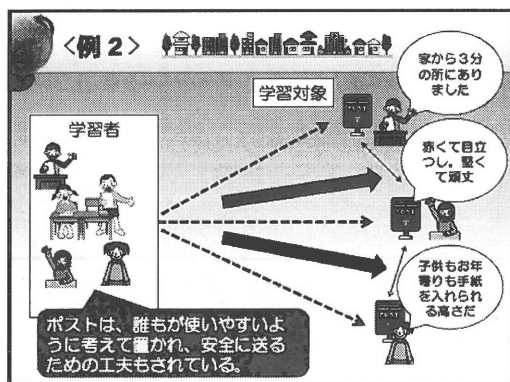
⑤大仏の座高は約 16m。

③行基などの力で 752 年に大仏が完成した。

①聖武天皇は、仏教の力で国を安定させようとした。

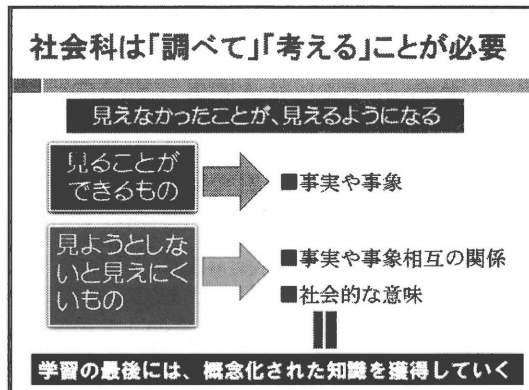
こういうことなんです。④②⑤③は、どちらかっていうと、具体や事実です。見ようとすれば見える事実です。最後の①は、④②⑤③を再構成して見えてくる世界なんです。これを授業に当てはめてみます。

これも社会科の例なんですけれども。

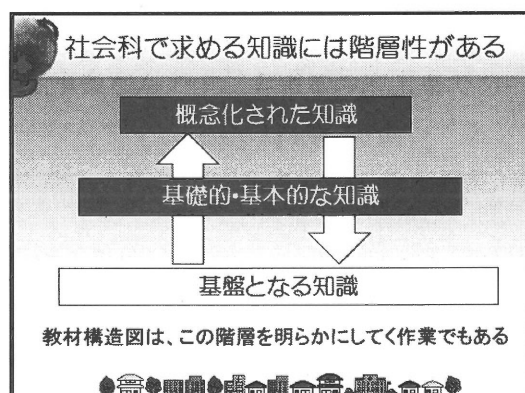


ポストがありますよね。でも、子どもたちの学習対象は、目に見えるものです。だから、ポストを勉強します。そうすると、「家から3分のところにあった。」「赤くて目立つ子どももお年寄りも手紙を入れられる高さだ。」こんなところで終わりたいくないわけですよ。もう一步先へ行きたい。その間をつまんでいく。そうすると、見えてくる世界がある。「ポストは、誰もが使いやすいように考えて置かれ、安全に送るための工夫もされている。」これが見方考え方の勉強になっていくわけです。別の事象に当てはめてみても、こうなっているんじゃないかという見方をす

ることができる。これが、見方、考え方ということですね。



社会科は、見ることができるものと、見ようとしないうと見えにくいものがあります。見ようとしないうと見えにくいものを見ていくときには、香社研でやっている、調べて終わりではなくて再構成してもう一度考えて夢を獲得する授業づくりが必要です。つまり、社会科では、基盤となる知識があつて、基礎的・基本的な知識があつて、最後に、概念化された知識がある。この基礎的・基本的な知識というのは、さっきの図でいうと、「752年に行基が作った」「大仏の座高は約 16m」のことです。概念化された知識が、「仏教の力で国を安定させようとした」です。基礎的・基本的な知識ばかりやると、暗記の社会科になる。概念化された知識だけやると、中抜けの社会科になる。そうすると、事実を掴んで、再構成して意味を把握していく。それこそ、もっともっと具体が出てくる、事柄、あるいはツールもあるかもしれません。



社会科の問いを持つこと。さっきの大仏を授業にします。



こどもが口々に言いますよね。「頭がパンチパーマだ。」「目がでかい。」とかね。やがて、「なんでこんなに大きいのか作ったのかな。」と思うわけです。そこから、推論が始まるんです。比較、総合、関連とありますが、一番簡単なのは予想ですよ。そうすると、簡単に調べていこうと思って、調べるわけですよね。

6年生「聖武天皇と奈良の大仏」を例に

問題意識の醸成＜獲得すべき知識の明確化＞

○なぜ聖武天皇は、大仏をつくったのだろう

具体的な追究活動に基づく＜基礎的な知識の獲得＞

- 工事の様子（のべ260万人が働いた）
- 聖武天皇が即位したころ、都では伝染病がはやり飢饉や貴族の反乱も起きていた。
- 聖武天皇の命により、行基などの力で752年に大仏が完成した。

問題解決の結果としての＜概念的な知識の獲得＞

○聖武天皇は、仏教の力で国を安定させようとした。

子どもたちの問題意識というのは、「なぜ、聖武天皇は大仏を作ったのだろうか。」なんです。この「なぜ」は、事実が分からなかったら解けないです。「仏教の力で国を安定させようとした」は答え。問いと答えですよ。ここがずれていくと問題解決学習にならないわけです。

調べる事柄は、真ん中に出てきます。これが具体的な事実です。一番上が問題を解決するという目標ですよ。I want ではないんです。I should なんです。私たちは何を調べ

るべきかの中でこれを獲得していくわけです。そのことを再構成していくときに見えてくるのが、一番下です。

これ、新卒6年目の女性がやられた授業なんですけど、山古志村を扱ったんです。復興の授業で、グーグルアースで地理的状况をおさえながら、地割れして、助けが来ないような場所にまで地震の影響が起きていることを確信して、事実を調べていくわけですね。こういうことを調べていったのちに別の資料が出てくる。なんと、東日本大震災は、二日間で2200人全員が長岡市に避難していたんです。子どもたちも驚くわけです。最初に出会った事実と、出てきた社会的事象が違う事実があるんです。わたしは、「プラスワン」って呼んでいるんですけど。「なんで、たった二日間で？」これが、問いになりませんか。定番ですね。



日本橋です。これを見せますよね。当時の様子を調べると大体わかるんです。もう一枚出します。同じ場所です。いっぱい見回していくと、長い橋があるとか、長浜西洋館があるとかって言うていきますよね。もう一つ教えたことがある。たった20年で変わったんです。子どもびっくりしますよ。これが問いになっていきますよね。

どんな問いが学習問題になっていくかというと、いろんなタイプがあるんです。

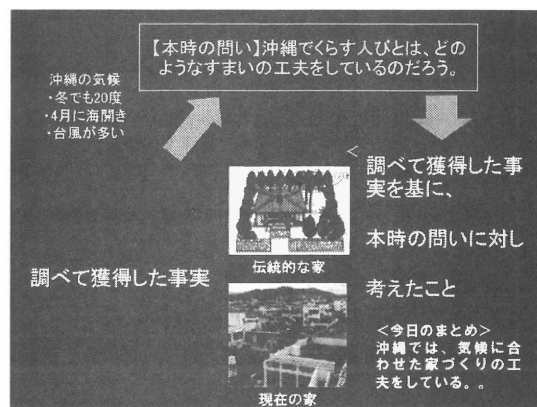
どんなタイプの学習問題があるか	
WHY 追究型	なぜ、人口が増えたのに水の使われ方が減ったのだろう
HOW 追究型	ごみはどのように処理されるのだろう
WHAT 追究型	税金って何だろう
発見・追究型	おいしいトマト作りの秘密を発見しよう
作業・追究型	大仏のつくられ方を調べたことをまとめて、パンフレットを作ろう

ただ、WHAT 追究型、発見・追究型、作業・追究型でいくと、意味が変わってくるんですよ。WHAT というタイプだと答えがすぐ出ます。どちらかというと、WHY や HOW の問題が必要になってきますよね。社会参画を強く意識するんだったら、ごみを調べてこれだけあるからごみを減らすことを学習問題にしていこう。東京で有名な玉川上水というのがあって、玉川上水は、徳川家康が江戸に入ってきたときに、これが飲み水になりました。おそらく、東京のほとんどの学校は、「玉川上水はどのようにして作られたのか調べよう。」という学習問題になると思います。それは、やめた方がいい。玉川上水って、今でも残っているんですよ。特に、終点あたりは、底が透明になっていて、地元の人が大騒ぎしている。つまり、「何で玉川上水は 400 年前に作られているのに、今の人が大切にしているのか。」で入っていきます。そうすると、「玉川上水って何？」で調べていきます。調べて分かった時に今のことが見えてくる。そして、「あなたはどうしますか？」という学習方法もあるのかなと思います。

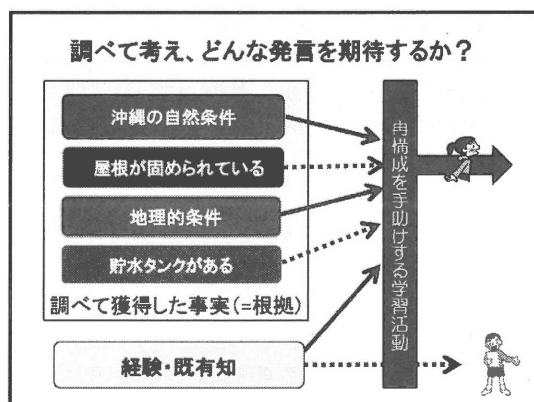
学習問題はどう使っていくかというと、社会科ですから、読み物だとか、説明文の解説だとかありえないんですよ。社会科は、社会的事象に出会うわけですよ。出会った後で、新しい事実を会えるところがいいですよ。

その中で、疑問が集約されていく。そこに問題があるのだと思います。

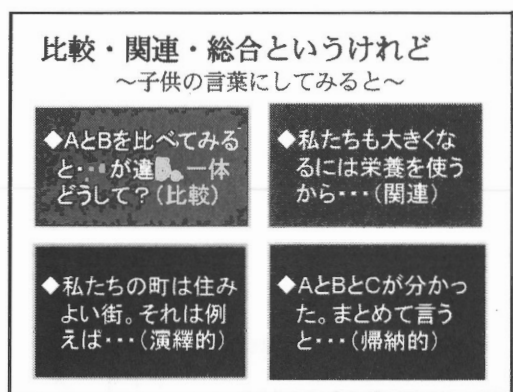
再構成する学習に関連して、です。例を出します。



これ、5年生の特色ある地域の暮らしですけども、よく教科書に出てきますよね。「沖縄でくらす人びとは、どのような住まいの工夫をしているのだろう。」とありますよね。こんな意見が出ると。「沖縄の気候は、冬でも 20℃」、「4月に海開き」、「台風が多い」です。学習活動としては、最初に今言ったことについて、さらに調べてという風に行くと思うんです。「周りに木がある」、「防風林がある」、「漆喰で屋根が固められてある」、「屋根にタンクがある」、「屋根が平ら」、「家が頑丈な作りになっている」など。これは、なぜかという、調べて分かった事実です。社会科は、これで終わらない。再構成するというのは、この先です。つまり、この事実を合わせると、何が起こるか考えるという作業です。「暑さに合わせて窓を大きくしているん



じゃないの?」「台風が多いから家を低くしたり、屋根を固めたりしているんだよ。」「タンクは水不足に備えているんだ。」「つまり、沖縄では、気候に合わせた家づくりをしているんだ。」最後のまとめは、最初に見えなかった世界です。カバーしてみます。調べて獲得した事実を使って、問いにぶつかって、もう一度再構成という活動に入るんです。調べて獲得した事実を基に、本時の問いに対し考えたこととなります。こういう授業ってどうやってやるかという、香社研が目指している再構成の学習というのは、こういう場面でも出てくるんですよ。つまり、45分間で何か問いがあって、調べる活動があって、いったいどういうことなんだろうかというときに、グループであったり、個人であったり、話し合いであったり、構造図であったり、そういうのがあって、再構成していくんですよ。その結果、その子が考えたことをまとめていくんです。ですから、この男の子のようには行きたくないわけですよ。この男の子は、経験や既有知だけでどっちかっているとイケちゃう。新しい事実を獲得されていない。社会認識を開くというときに、背景となる事実というのが、ないとだめなんです。



比較・関連・総合という言葉がありますね。学習指導要領にも書いてありますよね。分かりにくい言葉ですよ。簡単に考えた方がいいと思います。比較は、問題発見の手法なんです。比較というのは、問題を見やすい

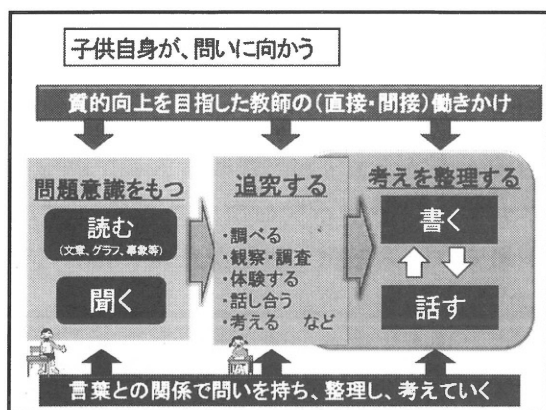
んですよ。理科でやるじゃないですか。インゲンマメの発芽。比べるでしょ。ひとつは、ピンピンして、ひとつは、ふにゃふにゃしてる。「どうして?」「僕らは、栄養を使って生きているんだ。だから、種だって栄養を使うんだ。」比較すると問題が見える。

関連するとか総合するとかありますね。演繹的とか帰納的とかいうのもありますね。演繹的というのは、中学生がよく言います。「私たちの町って住みやすいよね。例えば、正月の夜に・・・。」これは、演繹的に近いですよ。小学生は、割と帰納的なことが多いですよ。『町探検に行った。これ、これ、これが分かった。私たちの町のキャッチフレーズをつくろう。』これが基本的なやり方ですよ。事実、事実、事実を関連付けていく。「私たちの身体だって、栄養を使うんだから、きつと種だって栄養を使うわ。みんな使ったからしわしわになっているんだと思う。」これが関連です。こういう風に子どもの言葉に置き換えていくと、比較、関連、総合って、実は、普段やっていることなんです。これを意識してやっているかということなんです。多分、意識してやっているんですけども、それを比較、関連、総合という言葉に置き換えているか、置き換えていないかの話ですよ。

私たちの思いなんですけれども。45分間の中に、香社研でいえば、再構成の時間ですよ、今日の課題を掴むときに調べがなかったら認識なんてできないですよ。調べて分かったことから、もう一回問いに戻って、「じゃあどういう意味ですか。」という時間を設定した方がいい。時間にしたら調べるということと調べたことを基に考えるということ。先生たちが意識して、授業に臨むか望まないか。これを意識して臨むと、考えたことを先に発言した子に、「あなたの意見は、調べたことと考えたことなのね。」とフィードバック

クができる。こういう構造は重要なんじゃないかなって思うんです。構造が大切だと思うんです。

4 言語活動について

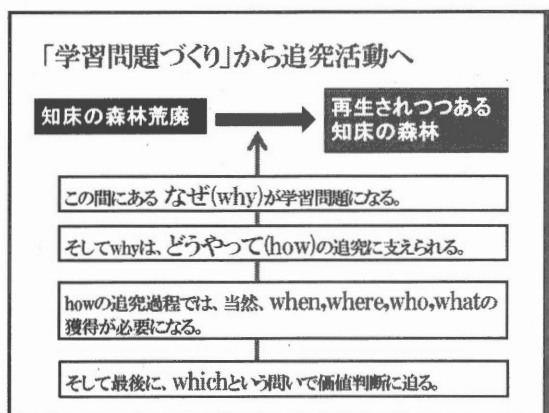


言語活動に触れます。言語活動って4つしかないんですよ。それは何かというと、「読む」、「聞く」、「書く」、「話す」です。「読む」、「聞く」というのは、入力系の言語活動です。インプットを得意とします。「書く」、「話す」は、アウトプットを得意とします。だから、授業の前半では、当然「読む」、「聞く」という言語活用が必要なんです。一枚のグラフを読んでいく、その時に「なぜか」といきなり言わないで、「気付いたことどんどん言ってごらん。全体を見て分かることでもいいんだよ。」どんどん読み取っていくわけです。その中で、「なぜ」って思うことが出てくるはずなんです。調べてみようかってなるわけです。調べたことは、アウトプットしていくわけです。それは、「書く」と「話す」ということです。これらは、出力系の言語活動ですけど、機能が違います。話すというのは、交流を得意とします。交流というのは、お互いにしゃべったことを納得したり、しゃべったことを深化させたりする役割です。「書く」というのは、思考を文脈化させる役割があります。ですから、先生は、授業の最後に書かせるのです。なぜか。それは、思考を整理さ

せようと思うからです。これが、言語活動です。授業の中に、どうやって、これだけの機能をうまく入れていくか。いきなり、授業の最初に、書かせたり、話したりするケースもあるんですけど、少ないですね。

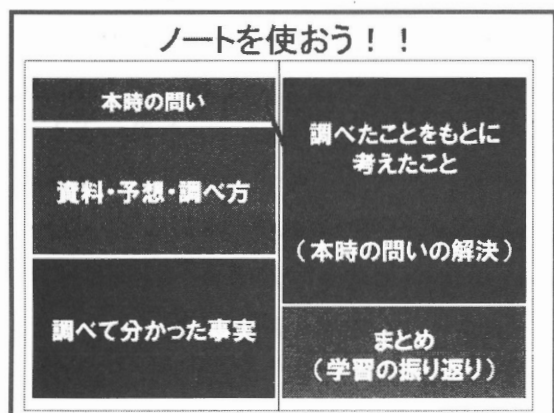
学びの質を高めるために、教師の役割があります。かつて、初任者の授業で、体育を見たんですよ。逆上がりでした。全記録を取ったんですよ。先生が一番しゃべっていたんですよ。「頑張れ。」や「その調子。」って。違うでしょ。それで、逆上がりができるわけじゃないじゃないですか。できちゃっている方が不思議なんですけど。その子どもの活動に対してかける言葉というのは、「ひじを曲げてごらん。」とか、「おなかを鉄棒に着けてごらん。」教材研究に裏付けられた声掛けですよ。そうやって、子どもは、言語を学んでおかないと、支援できないですよ。

それから、再構成していくには、「だってね。」を使います。日本の文法は、I think が言いやすいんです。「だってね」の because が引っこんじゃう。「私は、こう思います。」「ぼくは、こう思います。」だけど、再構成していくと、どこを再構成していくかは、because を再構成するんです。「なぜなら」を再構成するんです。最大のキーワードは、教室の中に、「だってね。」を増やすことです。私たちの問いは、変化しています。先生たちの言葉も変化していきます。例えば、5年生で、きれいな知床の写真を見せる。昔の1970年ぐらいの写真を見せる。そうすると、「今は、なんでこんなにきれいになったの。」という話になる。「なぜ」という問いは、それを調べることによって、How という疑問に置き換えられる。「自動車は、なんでこんなにお客様のニーズに合わせて、ライン一本でいろんな車が作れるのだろうか。」という問いから、「じゃあ、どうやって作られてい



るのだろうか。」という問いに変わる。Why という疑問は、How という具体的な課題の中で解決されていく。子どもたちの中では、当然、当然、when, where, who, what というのが出てくる。そして、最後の社会参画を目指すときには、「あなたはどうしますか。」という which が出てくる。教師の言葉として、問題解決の言葉として、使ってください。

5 ノートについて



ノートはぜひ続けてください。これは、香社研、すごいですよ。ノートの機能は、問題解決の見通しを持たせ、学びのプロセスを可視化する、様々な情報の取り入れや、吟味・修正を可能にするなどです。後は読みませんが、メタ認知、つまり、問題解決でこの段階にいるということを子どもたちに認識させられると思います。ノートは見開き一ページで考えています。授業のめあては、左上。調べて分かったことや資料は、左下。右上は、調べたことをもとに考えたこと、友達の考え

など。ぜひ、やってください。

また、ノートを使うとき、1 ページ目は空けてください。そして、ページには、通し番号を付けてください。そして、1 ページ目に見出しをつけるんです。そのノートは、子どもにとって、参考書になります。私が知っている学校の子どもは、3 冊、4 冊持っていて、毎回持っているそうですよ。授業中にそれを振り返るんです。

単元のまとめとしての作品作りとノート指導

～探究的なノートにはこんな機能がある～

- ① 問題解決の見通しを持たせ、学びのプロセスを可視化する
- ② 様々な情報の取り入れや、吟味・修正を可能にする
- ③ 思考を支えるフィールドとなり、多様な思考活動を可能にする
- ④ 個々の学びの質を高める
- ⑤ 言葉と経験の往復運動を活性化し、理解を深める
- ⑥ 学びに対するメタ認知を育成する

6 おわりに

最後に写真を紹介して終わりにしたいと思います。フィンランドにあるユバスキャラ大学附属小学校で見つけた写真なんですけれども。「これ、どうやって使うんですか。」って聞いたんです。そしたら、「説教するときを使う。」とおっしゃった。「頭ごなしにしかることはしない。でも、何か問題を起こした時に、子どもに提示して、あなたはどこにいますか。」と聞くんです。一番下は、その状況が起きたということ。二番目は、その状況を理解しているということ。次は、謝罪の方向を考えているということ。自分なりの方法を獲得できたということ。相手にアクセスしたこと。自分の役割を果たしたこと。「あなたは、どこにいますか。」と聞いたときに、「あっ、そうだった。自分のことが分かった。」となる。2 つ目に聞くことです。「じゃああなたのすることはなかに。」例えば、「ぼくは、

次に相手に謝る方法を考えます。」と答えた場合、「じゃあ、それが終わったら教えて。」といえる。こういう使い方をしている。学んでいる自分に気が付いているか、問題解決している自分に気が付いているか。転ばぬ先の杖ではないですけども、次々に資料を用意して、その面白さで引っ張っていく。本当にそうかと考えた時に、自分自身と振り返るときに、「ぼくは、ここにいる。」「これが分からないから先生助けてほしい。」「ぼくは、これがやりたい。」と言葉で言えるのか。これが、21.5世紀の学力ですよ。その社会科は、子どもたちが自分の学びを認識できる社会科であると思います。

参加していかがでしたか。今の感想を。授業づくりのヒントを得た。私も得ました。ぜひ、東京でも紹介したいと思います。

みなさんのご活躍をお祈りしています。春休みは、遠くありませんので、頑張りましょう。終わります。

